
バカとテストと右脳娘

シュレ猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと右脳娘

【Nコード】

N0931U

【作者名】

シュレ猫

【あらすじ】

神谷夏樹は自分の学力を考慮して、基礎からしっかり教えてもらおうとあえてFクラスに入ったFクラスにあるまじき心根の持ち主。そして、彼女の召喚獣には反則級の能力と致命的な欠陥があった。そんな彼女は中学校からの親友である吉井明久と一緒にニコイチコンビとして試召戦争を戦っていく。しかし、常識人の夏樹は試召戦争よりも日常が戦いの日々？ 明久だけでなく、雄二や秀吉、ムツリー二などのFクラス男子とは協力し、美波と瑞希のFクラス女子ペアから親友を守るために奮闘する毎日。夏樹「できれば女

子とも仲良くしたいのに」。Fクラスよりも先にそんな願望を叶えたのはAクラス？ 夏樹と明久のニコイチコンビの活躍に乞うご期待！

この小説は私の処女作なので、文法におかしいところや誤字脱字などがあると思いますが、そういったところは指摘いただければ幸いです。

注意：最初にお読みください

小説の書き方

基本はオリ主である夏樹の一人称で進める予定ですが、明久や雄二等がメインの回やその二人視点が面白い場合は夏樹以外のキャラの一人称で進みます。それと、戦闘描写など一人称での表現が難しいときは三人称で進みます。一人称か三人称で統一した方がいいのですが、まだ作者にそんな腕はありません（ペコリ）。それと、夏樹の一人称パートでは夏樹が読者の皆様に対して語りかける形をとるので明久などの友人に対する言葉遣い（タメ口）と地の文（丁寧語）との間に違いが生じます。

この小説ではオリ主×明久にするつもりはありません。オリ主と明久のカップリングを期待していた方は申し訳ありません。それと、明久×瑞希、明久×美波にもしないつもりなので、その二人との恋愛じゃないと嫌だという方にも謝罪いたします。

2巻までの内容は原作の地の文の参考なども多く、勝敗に小さな変化が生じてても大筋の流れはほとんど原作と同じですが3巻から特にフラグなどが大きく動く予定です（大暴露：4巻の内容はなくなる予定です。楽しみにしていた方、本当にすみません）。また、短編の内容も基本的に全て書きたいと思いますが、3巻からの乖離の影響で原作とはイベントの時期が変化することをご了承ください。

また、試験召喚システムの背景や設定に作者の捏造設定を加えています。それほど酷い捏造はないつもりですが、ご注意ください。

夏樹が明久擁護タイプのキャラなので他の二次小説に似た内容もあると思いますが、できるだけオリジナリティーを入れていくつもり

です。

明久について

- ・ 原作とそれほど大きな違いはないが、FFF団には所属しない。
- ・ 姫路に対してだけ特別強い恋愛感情を持つわけではない（原作でも秀吉に告白まがいをして姫路が本命かは不確定ですし）。

その他のキャラ

- ・ 少なくとも初期は原作通りの性格で書くつもりですが、夏樹の影響を考慮し少しずつ性格が変わっていくはずです。

時々展開などのアンケートをお願いすることもあるかもしれませんが、そうしたときは是非ともご協力ください。

神谷夏樹の振り分け試験（前書き）

さかさまテルテル様、由里様、まあ様、直井刹那様、糖分摂取魔様、感想ありがとうございます。

今回は予告通り夏樹の振り分け試験の結果を投稿します。ついでに作者が考えている試験科目数、各クラスの点数範囲も書いていきます。って、あれ？夏樹は？

夏樹「……しくしく」

ほら、部屋の隅にうずくまってないで挨拶、挨拶。

夏樹「ぐすつ、酷いよ、シュレ猫。ひつく…載せちゃダメって言ったのに」

ちよつと、いじめすぎたかも知れませんが。夏樹がなんでこんなに落ち込んでいるか分からない方は第一次試召戦争編の第四話まで読まれると納得すると思います。

では、ご覧ください！これが夏樹の試験結果です！

神谷夏樹の振り分け試験

・夏樹の振り分け試験の結果

現代国語：96点

古文：24点

化学：85点

物理：109点

生物：43点

地学：32点

英語W：名前無記入なので0点（書いていけば198点）

英語：名前無記入なので0点（書いていけば442点）

日本史：137点

世界史：81点

現代社会・地理：70点

数学：230点

保体：92点

総合得点：999点（名前を記入していれば1639点）

作者はこのほかに実技科目の美術や音楽、家庭科があると思います
が選択のため総合得点には入らず、3つの中から2つを選んで選択
1と選択2のように対決科目として使用するようにします。……使
用する機会があればですが。

・各クラスのトップの点数

原作開始期の明久は得意科目がないので彼をFクラスの最下位とし
てBクラストップの根本の点数と比較することで各クラスのトップ
（より点数高い上位クラスとの壁）の点数を算出しました。

5巻で明久は振り分け試験が850点くらいと言い、3巻で根本の
総合得点が2000点に若干足りなかったので根本は普段2000
点のラインを前後していると判断しました。よって、両者の差をと
ると1150点、これがAクラス以外の5クラスに均等に分かれる
とすると各クラスのトップと最下位の差は230点となります。

よって、各クラスと上位クラスとの壁（トップの点数）は以下のよ
うになります。

Fトップ：1080	Eトップ：1310	Dトップ：1540
Cトップ：1770	Bトップ：2000	

この点数通りならプロローグの西村先生の言葉が成立するはずです。
……これから見ると翔子や瑞希は桁違いですね。

神谷夏樹の振り分け試験（後書き）

以上、夏樹の試験結果と各クラス間の壁でした。

夏樹「……」

夏樹は拗ねているのでそのまま私が。一応しっかり確認したつもりですが、算出に使った点数などに誤りがあったらご報告いただければ幸いです。

設定集（前書き）

夏樹の設定について載せておきます。

まだ情報は少ないですが、本編で明らかになるたびに更新していきます。

ただ、夏樹の召喚獣については本編において重大な謎として扱っていたので、少なくともDクラス戦を読み終わるまでは設定を読むことはお勧めしません。

H23年7/24：夏樹の家族を追加、家族については十六話の重大なネタバレを含みます。

設定集

かみやなつき
神谷夏樹

つやのある黒髪を背中まで伸ばし、うなじのところで結んでいる。身長は160cm代後半で、胸はDカップ。黙っているとキリツと引き締まったカッコいい顔立ちをしている。イメージが一番近いのは過去にマガジンに掲載されたゲットバツカーズの『風鳥院花月』のサイドの髪を短くし、バストをDにした姿。外見からはクールな印象をいけるが、性格は天真爛漫で明るく、さらに表情がコロコロと変わるので、親しく付き合った人間は可愛いという印象を持つ。

審美眼、観察眼が優れているので、男女の区別や一卵性双生児の区別などで間違えたことは一度もない。よって、男の娘と言われている人物を見ても、完璧な男と判断するのでそういった人物に可愛い格好をさせる意味が理解できない。

学力については、テストを受けることに得点にかなりのバラつきが生じるが、大体Cクラスの中堅からBクラスの下位の成績。しかし、Fクラス並の点数の教科が多いので、基礎から勉強するためにFクラスに入った。

和食は祖母にしっかりと教えてもらい、しょっちゅう手伝いをしていたのでかなりの腕前。具体的には明久のパエリア以上。ただし、和食以外は中学に入るまであまり作る機会が無かったので、それほど上手くは無い。そのため、現在練習中。

召喚獣

デフォルメされた夏樹が燕尾服を着て、白い手袋を付けているような外見。ただし、本人とは異なり髪形はポニーテールとなっている。これは夏樹本人が1年の中頃まで（召喚獣作成時まで）はポニーテールだったが、明久の女性の好みを知ってから勘違いされるのを防ぐために髪型を変えたことが原因。

武器は楽器で、獲得点数によって楽器が変化する。演奏を行うことで相手の点数を秒当たり数点減らせるが、自分はその倍の点数を消費する。また、夏樹の召喚獣は他の召喚獣に物理攻撃を行っても相手の点数を減らすことができない。

楽器表

0	1	0	(	4	0	0	)	4	1	0	)	:	無し				
1	1	1	1	4	9	(	4	1	1	1	4	4	9	)	:	リコーダー	
5	0	1	1	9	9	(	4	5	0	1	1	4	9	9	)	:	竹笛
1	0	0	1	1	4	9	(	5	0	0	1	1	4	9	)	:	トランペット
1	5	0	1	1	9	9	(	5	5	0	1	1	9	9	)	:	フルート
2	0	0	1	2	4	9	(	6	0	0	1	2	4	9	)	:	ホルン
2	5	0	1	2	9	9	(	6	5	0	1	2	9	9	)	:	ファゴット
3	0	0	1	3	4	9	(	8	0	0	1	3	4	9	)	:	竖琴
3	5	0	1	3	9	9	(	8	5	0	1	3	9	9	)	:	ヴァイオリン

家族

父親は音楽家で、母親は画家。二人とも海外を中心に活動しているので夏樹は長月中学に入るまでは田舎の祖父母の家で育った。年の離れた兄：春華^{はるか}がいて、祖母の死後（祖父は祖母より先に他界）は春華の家に住んでいる。

プロローグ

私たちがこの文月学園に入学してから二度目の春が訪れた。

道の両脇には満開の桜が咲き誇っている。いつもならそんな桜をゆつくりと眺めながら登校するのだが、今の私は桜の花には目もくれない。なぜかって？ それは登校時間を余裕で過ぎているから。そう、明らかな遅刻です。

「遅刻だぞ、神谷」

玄関の前で呼び止められます。声のした方には浅黒い肌をした短髪のいかにもスポーツマンといった感じの男の人が立っています。

「はあ、はあ、おはようございます、にしむー。そして、遅刻してごめんなさい」

息を整えてから頭を下げて挨拶と遅刻の謝罪を済ませます。この人は生活指導の西村教諭、趣味のトライアスロンが理由で陰で『鉄人』という渾名で呼ばれている先生です。友達は生活指導の鬼と言っていますが、私はそんなに怖いとは思いませんけどねえ？

「神谷、いつも言っていることだがにしむーは止める。きちんと西村先生と呼べ」

「ええー！ 私なりの親愛のしるしです。それに、これをやめると私のキャラが立ちません」

「キャラがどのよりも、礼儀の方が大切だ」

むー、私は西村先生は嫌いではないのですが、この話題だけはいつも平行線です。それでも個性的なキャラが多い文月学園でアイデンティティーを確立するのは大変なのに。キャラが濃いにしむーには分らない苦労でしょうけど。

「ほら、これがお前のクラスだ」

先生が箱から封筒を取り出し、私に手渡しました。宛名の欄にはかみやなつき『神谷夏樹』と私の名前が書かれています。

「ありがとうございます」

私はドキドキしながらその封筒の封を切ります。無事に目的のクラスになれていれば良いんですけど。封筒を開けるべくがんばっているのにしむーがため息交じりに話してきました。

「いつも言っていることだが、お前はもう少し均等に勉強したらどうだ？ そうすれば今回だって2科目名前を書き忘れた位でそこまで落ちることはなかっただろうに」

おっ、ということは名前を書かなかったあの教科は順当に0点になったんですね。途中退室すら0点扱いのこの学園なら当然ですけど、少し不安だったんですね。解けないと思われるのが嫌で普段どおりに問題を解きましたから。封筒の中身を取り出すとやはり予想通り、「F」という文字が大きく書かれていました。

「むっ、まさかわざと名前を書かなかったのか？ 一番の得点源の英語を捨てるなんて何を考えている」

にしむーがいぶかしげに問いかけてきます。Fクラスという結果

を見て笑顔のままの私を見て真相に気付いたのでしょ。

「いえ、私みたいなタイプは中途半端に上のクラスに行くと試召戦争でみんなに迷惑をかけてしまいますからFクラスの方が気兼ねないでいいので楽なんです」

「英語で400点以上とっておいて何を言っているか。英語のテストだけでも名前を書いてあれば少なくともDクラスには入れたんだぞ。お前は主戦力の2科目が少ないにもかかわらずFクラスの上位なんだからな」

やはりそれくらいの点数にはなっていましたか。私、普通にテストを受けたらCクラスの下位からBクラスの下位くらいの総合点はとれるんですよ？ 総合点ならね。だから今回は英語の名前をどちらにも書いていたらCクラス入りにはなっていたでしょう。英語WだけでもEクラスの上位には入っていたでしょうし、我ながらナイス判断です。

「でも私、バラつきが大きすぎてFクラス並の点数の教科も多いですよ？ そういった教科はしっかり基礎から教えてもらわないとついていけませんし、ちょうどいいんです」

それにFクラスには友達が多そうですしね。

「まあ、お前が後悔しないならいいがな。それと、基礎からやらないといけないという自覚があるならしっかりと行動で示せ」

心配してくれるのは嬉しいんですけど、こればかりはしょうがないんですよ。苦手な教科はどうしても内容が覚えられなくて。好きな小説の内容なら結構覚えられるのに。

「西村先生。遅刻を注意したのにその本人が足止めしていいんですか？」

注意が長くなりそうなので、ここで話を切ります。そして、呼び方も今回はしっかりと西村先生と呼びました。呼び方のお説教で更にお話が長くなることは分かりますからね。

「むっ？ 確かにそうだな。この話は今度ゆっくりとするとして今は早く教室に向かえ」

あつ、やっぱり完全には逃げられませんか。私としてはこのお話はもううんざりなんですけど、しょうがないですよね。

にしまーと分かれた私はこれからの学園生活への期待を胸に抱きながらFクラスへと向かいました。

プロローグ（後書き）

がんばって少しストックも作りましたが、亀更新になる可能性大です。しかし、今週中にはもう1、2話ストックを書いて、1話は更新する予定です。評価や感想をお待ちしています。

第一話：頂点と底辺（前書き）

予定を変更して第一次試召戦争編の一話を投稿します。

夏樹「昨日の今日でどうしたの？」

いや、流石にこの小説を今後読み続けていくのか判断していただくのに君と原作キャラの絡みがないのはどうかと思って。

夏樹「読者さん、呆れてるんじゃない？ 急に予定を変更したりして」

その時はその時ということで、試召戦争編第一話始まります。

夏樹「始まります！」

第一話：頂点と底辺

「うわー、贅沢な教室だね」

今まであまり来たことのない三階に上がると、通常の五倍くらいの広さの教室が目の前に現れました。生徒が五十名ほどしかないことを考えるとスペースの無駄遣いとしか考えられません。この半分程度でも十分すぎるほどに広いのではないのでしょうか？

それにただ広いだけではありません。教室の内装も贅沢すぎるほどに贅沢です。まず、教室の前にあるのは黒板ではなく壁全体を覆うようなプラズマディスプレイ。……プロジェクターとスクリーンで十分でしょう？

そして、高級ホテルのロビーのように壁には観葉植物や拡張高い絵画がさりげなく置かれています。モネにゴッホにミレーですか、作品の選択もさることながら結構よくできた複製品ですね。相当高いでしょうに。でも、有名絵画を高校の教室に飾る必要があるのですか？

無駄なお金を使う余裕があるなら設備にまわしましょうよ。

……駄目です。ここにいとツツコミどころだらけで心労がたまっています。これ以上教室の中は見ないことにしましょう。

「……なんだろう、このばかデカイ教室は」

後ろのドアから前のドアくらいまで移動したところでさっきまで私がいたところから小さなつぶやきが聞こえました。

私と同じでAクラスの設備に驚いているのでしょうか。でも、この声はかなり聞き覚えがありますね。こう、学年一のバカと称される友達を彷彿とさせるような。声の主が気になった私はFクラスへ向かう足を止め、後ろを振り返ります。

すると、そこでは予想したとおり茶髪でなかなか整った顔立ちをした男子生徒が物欲しそうな顔でAクラスの中を覗き込んでいました。

「おおー！ あっきーではないか」

私はおどけた口調で話しかけ、その男子生徒に近づきます。

「ん？ あっ、夏樹！ 夏樹も遅刻だったんだ」

彼の名前は吉井明久。彼と私は中学時代からの親友で、今のところ、この学園の生徒の中で私が名前ベースの渾名で呼ぶ唯一の男子です。

「皆さん進級おめでとうございます。私はこの二年A組の担任、高橋洋子です。よろしく願います」

教室の中から学年主任の高橋先生の自己紹介が聞こえ、あっきーは教室内をよく見ようとドアにはめ込まれた窓に顔を近づけました。このままあっきーを置いていくのも何ですし、少しでも付き合いますか。

「参考書や教科書などの学習資料はもとより、冷蔵庫の中身に関しても全て学園が支給致します。他にも何か必要なものがあれば遠慮

などすることなく何でも申し出てください」

うっ、必要なものは全支給ですか。絵画や観葉植物、プラズマディスプレイはどうでもいいですけど、それだけは魅力的ですね。

まだましな化学とかを底上げしていれば何とか……無理ですね。今回のテストは相性最悪でしたし、Cクラス下位から中堅に上がるので精一杯でしょう。自分でFクラスを選んだんだからこんなことで惑わされずに、あつきーに声をかけてさっさと自分のクラスに向かいましょう。

「では、はじめにクラスの代表を紹介します。霧島翔子さん。前に来てください」

あつきーに声をかけようとするのと同時に黒髪を肩まで伸ばした日本人形のような少女がディスプレイの前に立ちました。

「……霧島翔子です。よろしく願います」

少女の目はクラスメイト全員に向けられているようでありながら、よく見ると同性の級友たちにも向けられています。

「そっか、噂は本当だったんだ」

隣の親友^{バカ}が何か呟いています。Aクラス代表となった彼女が容姿端麗、学業優秀であるために男子からの告白が絶えないのにも関わらず、誰一人として彼女の心を動かした生徒がいないゆえに生まれた「霧島翔子は同性愛者ではないか」という噂。

私もその噂は聞いたことがあります、聞いてすぐ一笑に付しま

した。告白した中に好みの人物がいなかったか、既に好きな人がいると考えるのが普通でしょう。今まで告白してきた人、どれだけ自信過剰なんですか？

しかし、隣にいるバカはその噂を信じているようです。何でこのバカは気付かないんでしょう？ あの視線は中学時代に数多の女生徒が私に向けてきた視線と同じもののな。

そう、女子の好意に気付かないこの朴念仁のせいで中学時代の私は今霧島翔子が級友に向けているのと同じ視線にさらされてきたのですよ。学年の四分の一近くの女子に！

まあ、想い人が噂を聞いて彼女を誤解しないよう、同じ恋する乙女として祈っておきますか。

（霧島翔子さん。あなたの恋が上手くいきますように）

「つと、夏樹。僕らも自分のクラスに行かないと」

教室を見るのを止めてあつきーが話しかけてきます。

「いや、私はあつきーを待ってただけど……。まあ、いいや。じやあ、行こうか我らがFクラスに」

「夏樹、なんで僕が「元一年D組にあつきーがFクラス以外に行くなんて考える人は一人もないよ？」Fだと、ってせめて最後まで言わせてよ！」

「ただでさえ、あつきーが覗きやってて時間食ってるんだから急がないと」

「やめてえー！ 意味はあってるけど、その単語は犯罪のニュアンスが強い！ って、あれ？ 我らのってことは夏樹もFなの？ 夏樹ならDかCくらいだと思っただけだ」

「今気付いたの？ 苦手科目の成績がポンコツな私が下手に上に行くと迷惑かけるからね。ちょっと手を抜いて英語のテストどっちも名無しで出しんだ」

「ええ、もつたいない！ 夏樹はそれで後悔しないの？」

「まあ、自分で決めたことだし、Fクラスの方が友達多そうだし後悔はしないよ」

私たちは軽口を叩きあいながらFクラスに向かいました。

「……あつきー、前言撤回していい？ 少しだけ後悔してきた」

「その気持ちは痛いほど分かるよ」

私たちの前にはまるで廃屋のような部屋があります。心なしかかび臭いような気がします。もしかしたら廃材置き場か何かと間違えたのかとプレートを確認しますが、何度みてもそこに書かれている文字は「2年F組」、決して廃材置き場ではありません。

ただでさえ遅刻しているのに教室前でまごついて時間を無駄にしても仕方ありませんし、ここは覚悟を決めて教室に足を踏み入れます。

「すみません！ 遅刻しました！」

「早く座れ、このウジ虫や……ろ、う？」

むっ？ いくら遅刻が悪いこととはいえ女の子にウジ虫野郎は酷いですね。野郎は。でも、こんな激しい性格の先生ってこの学園にいましたっけ？ 私は謝罪のために下げていた頭を上げ、教壇にいる人物を確認します。

教壇にいたのは教師ではなく一年のときの同級生、坂本雄二でした。

「あれ？ もつちー、教壇に立って何やってんの？」

「一応このクラスの最高成績者だから、遅れている先生の代わりに教壇に上がってみたんだが、……夏樹、お前涙ぐんだりしないのか？」

「？ もつちーは一体何を言っているの？」

「いや、なんとなくお前が涙ぐむのをきっかけに俺に不幸が訪れそうな予感がしたんだが」

「もつちーの口が悪いことは知ってるからね。このくらいは気にしないよ」

「お前、言ってくれるじゃねえか」

あつ、少し不機嫌になった。

「……なんなら今から泣こうか？」

私の言葉とともにまだ名前さえ知らない級友たちが靴や教科書、果てはカッターまで構える。どうでもいいけどこのクラス男子ばかりだね。

「いや、お前が俺の性格を理解していてくれて助かった」

もつちーも自分の予感が現実に成る予兆を感じたらしく、さっきまでの不機嫌さは霧散した。

「そつえば、最高成績者って事は雄二がこのクラスの代表なの？」

私に続いてクラスに入ってきたあつきーがもっちゃんに問いかけます。

「ああ、そうだ」

ほとんど同時にニヤリと笑うあつきーともっちゃん。これは碌でもないことを考えているな。

「これでこのクラスの全員が俺の兵隊だな」

椅子が無いせいで床に座っているクラスメイトを見下ろしながら言うもっちゃん。やっぱりね。いくら事実とはいえ言い方が悪いよ。

「にしても、夏樹がFクラスとはな。想像もしなかった」

「うん。CとかDだと勉強についていけそうにないから英語をどっちも名無しで出したんだよ」

私の言葉にもっちゃんは苦笑します。

「他の奴だったらそんなことに気にせずいい設備を狙うのに、相変わらずお前は欲が無いな。でも、お前がこのクラスにいるのは嬉しい誤算だ。頼りにさせてもらっ」

むう、頼られるのは嬉しいけど、あまり期待をかけられると緊張します。

「えーと、ちょっと通してもらえますかね？」

不意にあつきーの後ろから覇気のない声が聞こえてきました。

そこには寝癖のついた髪にヨレヨレのシャツを貧相な体に着た、いかにも冴えない風体のオジサンがいました。

「それと席についてもらえますか？　HRを始めますので」

どうやらこの人が担任のようです。

「あつ、すみませんでした」

「はい、わかりました」

「うーっす」

私たちはそれぞれ返事をして席……といっても、机じゃなくて卓袱台なので畳に直接座りました。あつきーともっちーは一つ席を飛ばした隣同士でしたが、私は二人の間には座らずあつきーの後ろの席に座りました。だって、二人の間だと二人が口喧嘩したら間違いなく巻き込まれますからね。

第一話：頂点と底辺（後書き）

前書きでも述べた通り、プロローグで夏樹と鉄人しか出ていないのは寂しいので第一話を投稿しました。

夏樹「感想とかももらえるとうれしいな♪」

次の更新は来週の月曜日の予定です。

夏樹「予定っていつかもう書きあがってるんだから貯蓄を崩すだけでしょ？ ケチらないで投稿したら？」

……月単位での更新になる亀更新になっちゃうかもしれないし。

夏樹「作者からアンケートです。実は既に書き上げた試召戦争編2話と3話はこの話の2倍近くの文量があるのですが、半分に分けた方がいいですか？」

ちなみに2話は姫路さんの到着でひき逃げのように切ると大体半分になります。

夏樹「半分でいいなら2話の前編を土曜日にでも投稿するつもりです」

アンケートの答えが無ければ順当に月曜日です。

夏樹「でもシュレ猫。今後今この2話、3話くらいの量になるんじゃない？」

4、5話を書いても今の2話と同じ文量だったらそのくらいを目安にするよ。

夏樹「この小説がお気に召しましたら今後も温かい目でお付き合いください」

第二話：最低クラスの仲間達（前書き）

雛閑さん、ご指摘を、糖分摂取魔さん、感想をありがとうございます。

夏樹「ありがとうございます」

糖分摂取魔さんへの返信で書いた通りあまり長いと携帯で見づらいつ思ったので、元々の二話を姫路登場までと明久と雄二の密談のシーンに分けて投稿します。

夏樹「糖分摂取魔さん、折角分けて良いって言うてくれたのに本当にごめんなさい」

作者の思い違いで、今回は元の三分の一程度と前話より若干短くなっています。

夏樹「続きは早めに投稿するので許してくださいね。それでは自己紹介編、始まります」

第二話：最低クラスの仲間達

いよいよ二年生最初のHRが始まりました。

「えー、おはようございます。二年F組担任の福原慎です。よろしくお願いします。」

そう言つて福原先生は薄汚れた黒板に名前を書こうとして、止めました。えっ、まさかチョークすらろくに用意されていないのですか？ 本当にここ教室ですよね？

「皆さん全員に卓袱台と座布団は支給されていますか？ 不備があれば申し出てください」

……この学園はこれで不備が無いという人がいると思っているのでしょうか。

「せんせー、俺の座布団に綿がほとんど入っないですー」

と、クラスメイトの誰かが先生に設備の不備を申し出ました。

「あー、はい。我慢してください」

「先生、俺の卓袱台の脚が折れています」

「木工ボンドが支給されていますので、後で自分で直してください」「センセ、窓が割れていて風が寒いんですけど」

「わかりました。ビニール袋とセロハンテープの支給を申請しておきましょう」

結局不備を申し出ても「我慢しろ」か「自分で直せ」しか言いま

せんでした。……きちんと不備を申し出ても学校が対応してくれないのなら何故聞いたんでしょうか？ ……気分？ 形式的質問？

まあ、一応私も不備を申し出ておきますか。

「福原先生、我俣は言いませんから最低限勉強ができるだけの道具はそろえてください。教室にチョークが無いなんて教育委員会に訴えたら大問題になりますよ」

「授業が始まるまでにはきちんと整えておきます」

いくら画期的な試験校とはいえ、こんなんでもよく今まで経営が成り立っていましたね。本当に驚きです。

「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね。廊下側の人からお願いします」

福原先生の指名を受け、車座を組んでいた廊下側の生徒の一人が立ち上がり、名前を告げました。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

独特な言葉遣いと小柄な体、女の子と見紛うばかりの可愛らしい顔の生徒が最初の自己紹介を始めます。

彼は秀吉くん。あっきーやもっちーと同じく去年のクラスメイトであり、現在私が好きな人。自分の好きなことのために他のものには目もくれずにがんばっている姿がカッコいいと思うんですけど、友達に彼のことがかっこいいから好きだと言つと必ずと言っていいほど脳の機能を疑われます。……失礼な。

「……と、いうわけじゃ。今年一年よろしく頼むぞい」

軽やかに微笑みを作って自己紹介を終える秀吉くん。……隣であつきーがもだえていて少し気持ち悪いです。まあ、秀吉くんの外見はかなりあつきーの好みに近いから少しは気持ちも分かりますけど。

「……………土屋康太」

次の生徒が自己紹介を始めます。次はむっつーですか。かなり運動神経のいい人なんですけど口数も少なく、おとなしいんですね。やはり目立つとイロイロとやりにくいんでしょうか。

まあ、なんにせよ彼が女子の多いクラスでなくて良かったです。彼の人格を良く知っている私はしっかりを対策を練っていますが、普通の娘はなかなか対応できませんしね。

「——です。海外育ちで、日本語は会話はできるけど読み書きが苦手です」

むっつーへの今後の対応をいろいろ考えているといつの間にか次の人が自己紹介を始めています。

「あつ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は——」

そして、その声は珍しく女子の声でした。でも、Fクラス入りするような女子で、ドイツ帰りと言えば、

「趣味は吉井明久を殴ることです」

やっぱり。このピンポイントにしてバイオレンスな趣味はしまっ
ちでしたね。しまっちこと島田美波ちゃんがあっきーに笑顔で手を
振っています。でもね、しまっち。あっきー、思いつきり怯えてる
よ？ いくらツンデレの照れ隠しでも怯えさせるのはやりすぎだと思
う。

やはり、去年のクラスメイトだらけです。予想していた自分が言
うのもなんですが、学力で決めたわけでない一年生のクラスの友達
が最低クラスに集中しているのは一体どういうことなのでしょう。

しまっちの自己紹介が終わった後は淡々と自分の名前を告げるだ
けの作業が進みます。

「——です。よろしく」

あっきーの前の人が自己紹介を終えました。ということは次があ
っきー、その次が私ですね。

「——コホン。えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って
呼んで下さいね」

『ダアアーリーリン！！』

野太い声の合唱。これはひっじょーに不愉快です。

「——失礼。忘れてください。とにかくよろしくお願い致します」

作り笑いでごまかしながら席に着くあっきーですが、今にも吐き
そうな顔をしています。……吐きたいのはこっちだよ。私は吐き気
を我慢して自己紹介をするべく立ち上がります。

「神谷夏樹です。趣味は読書と楽器の演奏、モットーは好意には好意を、悪意には悪意を。嫌いなことは人の幸せを邪魔することです」
『じゃあ!』

私の自己紹介を聞いて勢い良く声を上げた生徒がいます。おっと、大事な言葉を忘れていました。

「ちなみに好意には好意と言いましたが、流石に恋愛感情に恋愛感情を返す訳ではないのでその辺は覚えておいて下さいね」

『そんな! ここで告白すれば今の紹介を理由に絶対上手くいくと思っただのに』

『そうだ! 俺の人生計画『クラスメイトから結婚まで』君の失言をきっかけに』全654話』が開始45秒でエンドロールに! 残り653時間59分15秒は何を放送すればいいんだ!』

たとえ勉強はできなくても、そうそう失言するほど私はまぬけじゃありませんよ。それに勝手に私をあなたの人生計画に加えないでください。残りの時間? 普通に告白が成功するまでの失恋の数々を流せばそんな時間は簡単に埋まるでしょ。女の子の失言を利用して付き合おうとするぐらいだし。

そんなちよつとした騒動の後も名前を告げるだけの単調な作業が続きました。何人かの紹介が終わると不意にガラリと教室のドアが開き、息を切らせて胸に手を当てている女子生徒が現れました。

「あの、遅れて、すいま、せん……」
『えっ?』

誰からというわけでもなく、教室全体から驚いたような声が上がりました。声こそ出しませんでしたけど私も同じ気持ちです。

なぜ、彼女がここにいるのでしょうか？

第二話：最低クラスの仲間達（後書き）

姫路さんへの質問から雄二の宣言までの間に切れるところが多かった。少し短くなってしまう。すみません。

感想や評価いただけるととても嬉しいです。

次は戦力紹介の直前までとなっています。これからもよろしくお願いします。

第三話：引き金を引く時（前書き）

糖分摂取魔様、LEN様、まあ様、さかさまテルテル様、感想とアドバイスありがとうございます。

今回は元々二話として書いていた分の残り2/3を投稿しました。

夏樹「だから二話の倍弱あるんだ？」

今は分の量や改行の頻度などの試行錯誤の期間だから。

夏樹「ですから、量が多かったり改行が少なくて読みにくいときは気軽に言ってください」

では、第三話始まります。

第三話：引き金を引く時

騒然とする教室を意に介さず、平然としていた数少ない人物の一人である福原先生がその姿を認めて話しかけました。

「丁度よかったです。今自己紹介をしているところなので姫路さんをお願いします」

「は、はい！ あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願いします……」

彼女は息を整えると自己紹介をすませました。

「はいっ！ 質問です！」

すでに自己紹介を終えた男子生徒の一人が高々と右手を上げました。

「あ、は、はいっ。なんですか？」

いきなり質問されて驚く彼女。

「なんでここにいるんですか？」

聞きようによつては失礼な質問が浴びせられます。

でも、私もその気持ちは分かります。

彼女は入学して最初のテストで学年二位を記録して、その後も上位一桁以内に常に名前を残しているほどの優等生。そんな彼女はA

クラスにいて当然。Fクラスに来るなんて誰も想像できないでしょう。

「そ、その……振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました……」

その言葉を聴き、私もクラスメイトたちも納得しました。彼女は途中退室のせいで0点扱いとなり、その結果ここに振り分けられてしまったです。……そういう文言を掲げているのは知っていました。が、本当にその犠牲になった子がいたんですね。

そんな彼女の言い分を聞き、クラスの中でちらほらと見苦しい言い訳が始まります。

『そう言えば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに』

『ああ。化学だろ？ アレは難しかったな』

『俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力を出し切れなくて』

『黙れ一人っ子』

『前の晩、彼女が寝かせてくれなくて』

『今年一番の大嘘をありがとう』

バカばかりです。どうでもいいけど、最後から二番目の人、嘘と言われてニヤツとしてません？ ってことは本当なのでしょうか？

ちらりと彼を見ると鞆の前ポケットにDSとそのソフトが。あのパッケージは……まさか、ラブプ。ス！？ ええ、ゲームのせいでクラス分けを棒に振ったんですか！？

まあ、いいです。それよりも大事なことを考えなくては。姫路さんがクラスメイトですか、………渾名はひめひめですね。

「で、ではっ、一年間よろしく願いしますっ！」

そんな中、ひめひめは逃げるようにあっきーともっちーの間の空
いている席に座りました。

「き、緊張しましたあゝ……」

ひめひめは席に着くや否や、安堵のため息をついて卓袱台に突っ
伏します。おっ、あっきーがひめひめに話しかけるみたいです。

「あのさ、姫——」
「姫路」

あっきーが話しかけた途端もっちーがそれにかぶせます。あれは
狙いましたね。

「は、はいっ。なんですか？ えーっと……」

慌ててもっちーのほうに体を向けるひめひめ。

「坂本だ。坂本雄二。よろしく頼む」

「あ、姫路です。よろしく願いします」

「ねえ、——」

「私もよろしく願いします」

ひめひめの視界に入るようにして挨拶すると、今度は私の台詞が
あっきーの台詞にかぶりしました。……ごめん、あっきー。本当にわ
ざとじゃないから許してね。

「こちらこそよろしく願います」

「あつ、私は元Dクラスの神谷夏樹です。苗字でも名前でも好きなように呼んでね。……それとお願いんだけど、姫路さんのこと、ひめひめって呼んでいいかな？」

「ひつ、ひめひめですか？」

「あー、姫路。こいつはこういう奴だと諦めて許可してやれ。ほとんどの友達にそういう系統の渾名をつけるんだ。実際、俺ももっちーとか呼ばれてるしな。全く似合わないことこの上ない。その点姫路は似合ってるんだからましだろ」

もっちーがサポートしてくれます。でも、こういう奴ってどういう意味ですか。まるで私がおかしいみたいじゃないですか。

「わ、分かりました。じゃあ、私は夏樹ちゃんって呼びますね」

「ところで、姫路の体調は未だに悪いのか？」

「あ、それは僕も気になる」

今度はあつきーがもっちーとひめひめの会話に口を挟みました。ようやく話せてよかったね、あつきー。

「よ、吉井君!？」

あつきーの顔を見て驚くひめひめ。一体どうしたんでしょうか？

「姫路。明久がブサイクですまん」

もっちーが全くフォローになってないフォローをします。

「そ、そんな！ 目もパツチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗だし、全然ブサイクなんかじゃないですよ！ その、むしろ……」

おや？　もしかして……

「そう言われると、確かに見てくれは悪くない顔をしているかもしれないな。俺の知人にも明久に興味を持っている奴がいたような気もするし」

「え？　それは誰——」

「そ、それって誰ですかっ!？」

あつきーを遮ってひめひめが勢い良く問いかけます。やっぱり、彼女もそうでしたか。他にも気になっている人がいるらしいし、ほんとあつきーはモテますね。

「確か、久保——」

……あー、そのネタですか。確かにあつきーはモテるんですけど、そっち方面は可哀相ですね。

「——利光だったかな」

久保利光　↓　♂（性別／オス）

「おい明久。声を押し殺してさめざめと泣くな」

いやあ？　誰でも流石に泣くと思いますよ？

「半分冗談だ。安心しろ」

「え？　残り半分は？」

「ところで、姫路。体は大丈夫なのか？」

「あ、はい。もうすっかり平気です」

「ねえ、雄二！ 残りの半分は？」

大きな声で問いかけるあつき……。あつき、残念だけど半分どころか全部事実だよ。でも、私にはそれを言えるだけの勇気も冷酷さありませんでした。

「はいはい。その人達、静かにしてくださいね」

あつきーの大声は流石に問題なようで、パンパン、と教卓を叩いて先生が警告を發します。

「あ、すいませ——」

バキィイ バラバラバラ……

先生が叩いた衝撃で教卓がゴミ屑と化しました。教室内がしんと静まり返ります。

「えゝ……替えを用意してきます。少し待っていてください」

先生は気まずそうに告げ、足早に教室から出て行きました。

「……雄二、夏樹、ちょっといい」

「ん？ なんだ？」

「ここじゃ話にくいから、廊下で」

「別にいいけど、もっちーだけじゃなくて私も？」

「うん」

そして、私たちは三人で廊下に出ました。

「で、何の話なの、あつきー？」

「この教室についてなんだけど……」

「Fクラスか。想像以上に酷いもんだな」

「うん！ 私もしっかりしたつもりの決心が揺らいだしね」

「二人もそう思うよね？」

『もちろん（だ）』

「雄二もAクラスの設備は見た？」

「ああ。凄かったな。あんな教室は他に見たことがない」

なんとなくあつきーが言いたいことが分かってきました。

「そこで僕からの提案。折角二年生になったんだし、『試召戦争』をやってみない？」

「戦争、だと」

「うん。しかもAクラス相手に」

「随分無謀だね」

「……何が目的だ」

「いや、だってあまりに酷い設備だから」

「嘘をつくな。全く勉強に興味がないお前が、今更勉強用の設備なんかの為に戦争を起こすなんて、そんなことあるわけないだろうが」

「そ、そんなことないよ。興味がなければこんな学校に来るわけが

――」

「あつきーがこの学校を選んだのは『試験校だからこその学費の安さ』が理由でしょ？ 誰が願書に書く時に志望動機のでっち上げに協力したと思ってるの」

長月中学出身の親友舐めるなよ。隣でもっちーもうんうんとうなずいています。もっちーもあつきーが文月学園を選んだ理由を知っ

ていたみたい。

「……姫路の為、か？」

あつきーがビクリと震えます。

「ど、どうしてそれを!？」

たぶんもっちーはカマをかけたただけなのにあつきーは見事に引っかかります。本当に単純だね。

「へえー、ひめひめの為なんだ？」

「べ、別にそんな理由じゃ——」

「私は友達思いでいいと思うよ？」

「だから、本当に違うってば!」

別に隠さなくてもいいのに。

「気にするな。お前に言われるまでもなく、俺自身Aクラス相手に
試召戦争をやるうと思っていたところだ」

「え? どうして? 雄二だって全然勉強なんてしてないよね?」

確かに。あつきーの言う通りもっちーは設備とか気にしそうにな
いんだけど。

「世の中学力が全てじゃないって、そんな証明を試みてくたな」

あつきーは訳が分からないといった顔をしています。

「それに、Aクラスに勝つ作戦も思いついたし、その下準備も夏樹

がいれば——おっと、先生が戻ってきた。教室に入るぞ」

私もあつきーも促されるまま教室に戻りました。

「さて、それでは自己紹介の続きをお願いします」

壊れた教卓をボロい教卓に替えて、気を取り直してHRが再開されます。

「えー、須川亮です。趣味は——」

特に何も起こらず淡々と自己紹介が進む中、あつきーが小声で話しかけてきます。

「ねえ、夏樹の答えは聞けなかったんだけど、夏樹は試召戦争する気はある？」

少し考えて、口を開きます。

「……本当はもう少し経ってからが良かったんだけど、とりあえず反対するつもりはないよ」

「ほんと！　ありがと、夏樹！」

「坂本君、君が自己紹介の最後の一人ですよ」

「了解」

あつきーと話しているうちに自己紹介がもっちーまで進んだようです。

ゆっくりと教壇に歩み寄るその姿にはいつものふざけた雰囲気は見られず、クラス代表として相応しい貫禄を身に纏っているように思えます。

「坂本君はFクラスの代表でしたよね？」

先生に問われ、鷹揚にうなずくもっちー。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ。……さて、皆に一つ聞きたい」

もっちーの間の取り方が上手いためか、クラス中の視線がもっちーに向けられました。

皆の様子を確認した後、もっちーの視線は教室の各所に移り出します。

かび臭い教室。

古く汚れた座布団。

薄汚れた卓袱台。

つられて私たちももっちーの視線を追って、それらの備品を順番に眺めていきました。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが——」

一呼吸おいて、静かに告げるもっちー。

「――不満はないか？」

『大ありじゃあつ!!』

二年F組生徒の魂の叫びです。

「だろう？ 俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

『そうだそうだ!』

『いくら学費が安いからと言って、この設備はあんまりだ！ 改善を要求する!』

『そもそもAクラスだって同じ学費だろ？ あまりに差が大きすぎる!』

堰を切ったかのように次々とあがる不満の声。

「皆の意見はもつともだ。そこで」

皆の反応に満足したのか、自信に溢れた顔に不適な笑みを浮かべて、

「これは代表としての提案だが――」

これから一年、戦友となる仲間たちに野性味満点の八重歯を見せ、

「――FクラスはAクラスに『試召戦争』を仕掛けようと思う」

Fクラス代表、坂本雄二は戦争の引き金を引きました。

第三話：引き金を引く時（後書き）

本当は他の方に倣って教卓破壊で切ろうとも考えたのですが、長さについて意見をもらいたくてあえて切らずに投稿しました。

夏樹「シュレ猫としては他の人に倣ってもいいかなって思ったんですよ？」

でも、今書いているDクラス戦が美春登場までで2000字を超えるんだもの。OTZ

夏樹「ああー、それじゃ一巻分だけでものすごい話数になりそうだもんね」

感想や意見お待ちしています。

夏樹「これからもよろしくお願いします」

第四話：勝利へのピース（前書き）

Lyricall様、まあ様、歪曲詩様、糖分摂取魔様、さかさまテ
ルテル様、感想ありがとうございます。

今回はFクラスの戦力紹介編です。

夏樹「それでは第四話始まります！」

第四話：勝利へのピース

ほとんどのクラスメイトにとってAクラスへの宣戦布告は現実味の乏しい提案にしか思えなかった。

『勝てるわけがない』

『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』

『姫路さんがいたら何もいらない』

『ああ、姫路さんと神谷さんという二輪の花があれば十分だ』

当然のごとく教室から不満の声が上がります。……一部変な声が上がりましたが、気にしないことにします。

でも、皆の言葉も至極当然なことで、試召戦争とはテストの成績に応じた強さを持つ召喚獣を用いて戦いを行うのです。よって、テストの点数が非常に重要なものと成ります。

しかし、AクラスとFクラスの点数は文字通り桁が違います。正面からやりあった場合、相手次第ではこちらが四、五人で一人に戦いを挑んでも負けてしまうかも知れません。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

圧倒的な戦力差を知りながらも、もっちは宣言しました。

『何を馬鹿なことを』

『できるわけないだろう』

『何の根拠があつてそんなことを』

否定的な意見が教室中に響き渡ります。

確かにそんな宣言だけで納得できるような甘い戦いじゃありませんよね。

「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃っている」

そんなもっちーの言葉を受けてクラスの皆が更にざわつきます。

根拠がある？ 私も何人かの好カードは思いつきますが、そこまで決定的でしょうか？

「それを今から説明してやる」

得意の不敵な笑みを浮かべ、壇上から皆を見下ろすもっちー。

「おい、康太。畳に顔をつけて姫路と夏樹のスカートを覗いてないで前に来い」

「……………！！（ブンブン）」

「は、はわっ」

必死になって顔と手を左右に振り否定のポーズを取る康太と呼ばれた男子生徒、むっつー。

ひめひめがスカートの裾を押さえて遠ざかると、むっつーは顔についた畳の跡を隠しながら壇上に歩き出しました。その際、私のほうに少しだけ恨めしそうな視線を向けてきたのでニヤリと笑みを返します。去年のクラスメイトを舐めないことだよ、むっつー」

「土屋康太。こいつがあ有名な、寡黙なる性識者だ」
ムッリーニ

「……………！！（ブンブン）」

土屋康太という名前はそこまで有名じゃありません。しかし、ムツリーニという名前は別です。その名は男子生徒には畏怖と畏敬を、女子生徒には軽蔑を以って挙げられます。

ちなみに私は軽蔑はしていませんが呆れてはいるので、彼は私の呼び名法則の数少ない例外です。私は普通親しい異性の友達は苗字をベースにした渾名で呼ぶんです。しかし、彼とは仲がいいんですが、あの覗きにはうんざりなので例外措置です。

えっ、渾名を元に渾名をつけたのかって？ 違いますよ。むっつーの由来はムツリーニと同じく『ムツリスケベ』です。同じ祖先から鯨になったか陸上生物になったかみたいな違いですね。

『ムツツリーニだと……？』

『馬鹿な、ヤツがそうだというのか……？』

『だが見ろ。あそこまで明らかな覗きの証拠を未だに隠そうとしているぞ……』

畳の跡を手で隠している姿がとても哀れです。……友人として少し恥ずかしいです。

「姫路のことは説明する必要もないだろう。皆だってその力はよく知っているはずだ」

「えっ？ わ、私ですかっ？」

「ああ。ウチの主戦力だ。期待している」

確かにひめひめ程頼りになる戦力はいないよね。

『そうだ。俺達には姫路さんがいるんだっ た』

『彼女ならAクラスにも引けをとらない』

『ああ。彼女さえいれば何もいら ないな』

……さつきからひめひめにラブコールを送っているのは誰なん でしょう？

「木下秀吉だっている」

秀吉くんは学力ではあまり名前を聞かないけど、他の事で有名な んですよね。演劇部のホープであることとか、おそらくAクラスに いるであろう双子のお姉さんのことで。

『おお……！』

『ああ。アイツ確か、木下優子の……』

でも、そういう方面の情報は試召戦争に関係ない気がするんだけ ど……せっかく上手く土気が上がってるんだから言わないほうが いよね。……たぶんもっちゃんって詐欺師に向いてるんだろうな。

「そして、神谷夏樹だ」

えっ、私ですか？

『か、神谷さん……？』

『おい、彼女そんなに有名だったか？』

『神谷さん、失言ワンモアプリーズ』

ほら、皆もなんで私が呼ばれたのか分からずに困ってるじゃない ですか。……一人変なのがいたけど。

「ふっ、お前らが知らないのも無理はない。何せこいつは今まで爪を隠してきた上、このFクラスにも手を抜いてわざと入ってきたくらいに強かな奴だからな」

ちよつと！ 私は意図的に学力をいじったことはないよ！？ 今回英語の名前を書かなかったのが、今までの人生で唯一の成績操作らしい操作だよ！？

「こいつはな、英語に関してはAクラス級の実力を持ち、特に通常の英語に関しては超Aクラス級の得点保持者なんだよ。」

「なにっ！ Aクラス級の教科が二つも！？」
「しかも片方は超Aクラス級だっ！？」

二科目だけAクラス並じゃあ、全教科がAクラス級の人たちに勝てるわけないでしょ！

「更に言うなら、一年の一時期噂になった『数学の女帝』とはこいつのことだ」

「なっ、数学の女帝！？」

「一年の最初の間試験の数学で霧島翔子をほぼダブルスコアで負かしたヤツだろ！？」

「その後全然噂を聞かないと思ったら、実力を隠していやがったのか！」

やめてえー！ やめてよ、もっちー。そんな聞いてて寒くなるよ
うな恥ずかしい異名で私を呼ばないで。自分で名乗ったわけじゃないのに私が寒い奴みたいじゃん。それにそのテストだったままたま調子がよかつただけで、頼りにされても困るよ。

そんな私の苦悩を無視して戦力紹介は進んでいきます。

「当然俺も全力を尽くす」

『確かになんだかやってくれそうな奴だ』

『坂本って、小学生の頃は神童とか呼ばれていなかったか？』

『それじゃあ、振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良だったのか』

『実力はAクラスレベルが三人もいるってことだよな！』

っ！？ いつの間にか私がAクラスレベルに数えられてる！？

私は英語だけがAクラス級で総合成績はせいぜいCクラスレベルだよ！

だけど、この高まった士気を下げるようなことを言う勇氣は私にはありませんでした。ダメな私を笑ってください。

「それに、吉井明久だっている」

……シン――

教室に静寂が広がりました。

第四話：勝利へのピース（後書き）

夏樹「うう、酷いよもちー。あんな恥ずかしい異名を紹介するなんて。おかげでAクラス並の実力だと勘違いされちゃったじゃん」

でも、噂が本当なら総合成績はギリギリAクラスの最低ラインを超えるでしょ？

夏樹「だから、あれは偶然だよ」

ちなみに次は夏樹の振り分け試験の結果を投稿したいと思います。

夏樹「設定じゃないの？」

本編で明らかになってからどんどん設定が更新されていくってかっこよくない？

夏樹「ふう、仕方ないなあ。そんなわけで私や召喚獣の外見がいたら設定の項を作って、そのページはどんどん編集していくそうです」

まあ、設定は本編を見ていれば読む必要のないページになるはずですよ。

夏樹「これからもよろしくお願いします」

第五話：宣戦布告（前書き）

さかさまテルテル様、糖分摂取魔様、まあ様、試験結果への感想ありがとうございます。

いやあ、驚きました。割り込み投稿だと最終更新日時が変わらないんですね。昨日、夏樹の試験結果を投稿して初めて知りました。

夏樹「新しいことって、失敗しながら覚えていくものだし、そういうこともあるよ」

まあ、そうだね。では、Dクラスへの宣戦布告始まります。

夏樹「始まります！」

第五話：宣戦布告

限界まで高まった士気が一気に下がります。

もっちー、貴様。あつきーを才気扱いにするなら私が訂正しても問題なかったじゃないか！ 雰囲気を読んで損したよ。

「ちよつと雄二！ どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！ 全くそんな必要はないよね！」

『誰だよ、吉井明久って』

『聞いたことないぞ』

「ホラ！ 折角上がりかけていた士気に翳りが見えてるし！ 僕は雄二たちとは違って普通の人間なんだから、普通の扱いを——って、なんで僕を睨むの？ 士気が下がったのは僕のせいじゃないでしょう！」

まったく、あつきーの言う通りだよ。あつきーを弄りたいのは分かるし、もう諦めたけどTPOはわきまえてよ。

「そうか。知らないようなら教えてやる。こいつの肩書きは『観察処分者』だ」

……更に落としちゃうの？

『……それって、バカの代名詞じゃなかったっけ？』

「ち、違っつよっ！ ちよつとお茶目な十六歳につけられる愛称で」

あつきー、その言い訳は無理があるよ。

「そうだ。バカの代名詞だ」

「肯定するな、バカ雄二！」

「あの、それってどういうものなんですか？」

優等生であり、観察処分者とは対極に位置するひめひめは観察処分者がどういふものか分からずに小首をかしげている。

「具体的には教師の雑用係だな。力仕事とかそういった類の雑用を、特例として物に触れるようになった試験召喚獣でこなすといった具合だ」

その通り、普通の召喚獣は特別な処理がされている床以外を触ることができないけど、あつきーの召喚獣は壁でも机でもボールでも普通の人間と同じように触ることができる。

「そうなんですか？ それって凄いですね。試験召喚獣って見た目と違って力持ちって聞きましたから、そんなことができるなら便利ですよ」

若干の羨望を込めた視線をあつきーに向けるひめひめ。確かにあつきー程度の点数でも召喚獣はかなりの力があって、やろうと思えば岩だつて砕ける。……やろうと思えばね。この制度はメリットばかりじゃないんだよ。

「あはは。そんなたいしたもんじゃないんだよ」

あつきーも観察処分者のデメリットを説明し始めます。

「皆と同じで先生の許可がないと召喚できないし、先生に都合よく使われるし、召喚獣の受けたダメージや疲れの何割かがフィードバ

ツクされるしね」

『おいおい。《觀察処分者》ってことは、試召戦争で召喚獣がやられると本人も苦しいってことだろ?』

『だよな。それならおいそれと召喚できないヤツが一人いるってことになるよな』

皆が口々にあつきーの無能っぷりを攻めています。フォローした方がいいのかな?

「確かにこいつ単体ならいても同じような雑魚だ」

「雄二、そこは僕をフォローする台詞を言うべきところだよな?」

あつきー、単体ならって言うてるんだから後半を待とうよ。

「だが、こいつがいることで神谷夏樹という戦力が最大限に生きる。この二人のコンビなら戦力的には姫路にも勝るとも劣らない」

確かにね。私の召喚獣とあつきーは最高に相性がいいから、多分試召戦争では私とあつきーは強力なニコイチコンビとして活動できると思う。

『何! むしろバカが神谷さんの足を引っ張るんじゃないか!?』

「とにかくだ。俺達の力の証明として、まずはDクラスを征服してみようと思う。皆、この境遇は大いに不満だろう?」

『当然だ!!--』

「ならば全員筆を執れ! 出陣の準備だ!」

『おおーっ!』

「俺達に必要なのは卓袱台ではない! Aクラスのシステムデスクだ!」

『うおおーっ!!--』

「お、おー……」

場の雰囲気には圧されたのかひめひめも小さく拳を作り揚げていました。

「明久には宣戦布告の使者になつてもらつ。無事大役を果たせ！」

……またあつきー弄りですか。

「……下位勢力の宣戦布告の使者つて大抵酷い目に遭うよね？」

「大丈夫だ。やつらがお前に危害を加えることはない。騙されたと思つて行つてみる」

行つたら本当に騙されますよね。

「本当に？」

「もちろんだ。俺を誰だと思つている」

私はあつきー弄りが趣味の（あつきー限定の？）いじめっ子だと思つている。

「大丈夫だ、俺を信じる。俺は友人を騙すような真似はしない」

じゃあ、あつきーは友人じゃないのかなあ？

「わかったよ。それなら使者は僕がやるよ」

「ああ、頼んだぞ」

何回も騙されてるんだからこんなんでも騙されないでよ、あつきー。
……あと一分経ったら追いかけてよ。

「騙されたあつきー！」

私は息を切らせたあつきーの後に続いて涼しい表情で教室に入る。

「やはりそうきたか」

「やはりってなんだよ！ やっぱり使者への暴行は予想通りだったんじゃないか！」

「当然だ。そんなことも予想できないで代表が務まるか」

「少しは悪びれるよ！」

「しかし、お前のその怪我の無さは予想外だったな」

「夏樹がDクラスが僕につかみかかった瞬間を写メにとつて、『先生！ 早く来てください。校内暴力です』って大声で叫んでくれたかったら逃げ出す隙もなくリンチだったよ」

「うち！ 夏樹め、余計なことを」

あつきーだって貴重な戦力なんだよ？ 大将なら、私情を挟まずにベストを尽くしてよね。

「吉井君、大丈夫ですか？」

「あ、うん。大丈夫。夏樹のおかげで殴られる前に逃げられたから」

あつきーを心配したひめひめがあつきーのそばに駆け寄っていった。

「吉井、本当に大丈夫？」

しまつちも心配なのか近づいていく。

「平気だよ。心配してくれてありがとう」

「そう、良かった……。ウチが殴る余地はまだあるんだ……」

「ああっ！ 突き飛ばされたときに変な打ち方をしたみたいで今になって死にそうな激痛が！」

……制服につかみかかられた時点で止めたからそんな事実はないけど、流石にそれを言う気はない。それよりもしまつち。その言葉は照れ隠し？ それとも本音？ どっちにしてもそんなんであつきーがしまつちを好きになるわけではないと少し考えれば分かると思うんだけど。

「そんなことはどうでもいい。それより今からミーティングを行うぞ」

もっちーは他の場所でミーティングをするつもりなようで、扉を開けて教室から出て行った。

「あの、痛かったら言って下さいね？」

そう言って、ひめひめは小走りにもっちーの後を追った。

「大変じゃったの」

秀吉くんがあつきーの肩を叩いて廊下に出た。だけど、そう思うならもう少し庇ってあげてもいいと思う。

「……………（サスサス）」

頬をさすりながらむっつーがそれに続く。

「むっつー。覗きの証拠の置跡ならとっくに消えてるよ?。」

「……………!! (ブンブン)」

「いや、今更否定されても、ムッツリーニがHなのは知ってるから」

私もあつきもむっつーの往生際の悪さに呆れるやら、感心するやら。

「……………!! (ブンブン)」

「……………ここまでバレバレなのに認めないのって変な意味で凄いよね、むっつー」

「……………!! (ブンブン)」

「——何色だった」

「水色と……………スパッツ」

即答でした。しかし、後半はなんか悔しげ。私はそんなむっつーを鼻で笑う。

「やっぱりムッツリーニは色々な意味で凄いよ」

「……………!! (ブンブン)」

そうして私たちももっちーを追って教室を後にした。

第五話：宣戦布告（後書き）

はい、今回四話でムツツリーニが悔しがっていた理由が出ましたね。

夏樹「去年一年間、しまつちよりはあつきーたちの近くにいたからね。むつつーへの対策はバッチリだよ」

明久が夏樹の召喚獣と相性がいい理由はDクラス戦の後半に発覚すると想います。

夏樹「これからもよろしくお願いします」

第六話：Dクラス戦へ向けて（前書き）

まあ様、さかさまテルテル様、糖分摂取魔様、感想ありがとうございます。

今回はお弁当フラグの回です。

夏樹「なかなかDクラス戦に入らないけど、ひめひめのお弁当はバカテスの笑いに必要なものだし、しっかり入れないとね」
では、第六話始まります。

第六話：Dクラス戦へ向けて

いろいろと雑談をしながら歩いていると、先頭のもっちーが屋上に通じる扉を開けて太陽の下に出ました。

「明久、宣戦布告はしてきたな？」

もっちーがフェンスの前の段差に腰を下ろしたので、私たちもそれに倣います。

「一応今日の午後に関戦予定と告げてきたけど」

「それじゃ、先にお昼ご飯ってことね？」

「そうなるな。明久、今日の昼ぐらいはまともな物を食べるよ？」

「そう思うならパンでもおごってくれと嬉しんだけど」

「えっ？ 吉井君ってお昼食べない人なんですか？」

あつきーの言葉にひめひめが驚きの声をあげる。

「いや。一応食べてるよ」

「……あれは食べていると言えるのか？」

もっちーのツツコミが入る。私もそれには同感です。

「何が言いたいのさ」

「いや、お前の主食って——水と塩だろう？」

……個人的に飲み物の時点で水は主”食”ではないと思う。

「きちんと砂糖だって食べているさ！」

「あつきー、そういう問題じゃないよ」

「あの、吉井君。水と塩と砂糖って、食べるとは言いませんよ……」
「舐める、が表現としては正解じゃろうな」

私はため息をつきつつ、あつきーに話しかける。

「しょうがないから、今日は私のお弁当を分けてあげるよ」

「あつ、ありがとう、夏樹！ 今、僕は君が女神に見える」

「め、女神なんて恥ずかしいからやめてよね。全く、お弁当くらいで大袈裟な」

…… あつきーの食生活なら大袈裟じゃないのかな？ 体験したことがないから分からないけど。まあ、とりあえず、

「1段分で大丈夫？」

「大丈夫！ 減多にないカロリー摂取の機会だからね、ありがたく頂くよ！」

あつきーは本当に嬉しそうな笑顔で答えます。…… 本気で親友の食生活の改善に乗り出した方がいいかもしれない。

「夏樹、親友だからって甘やかさなくていいぞ。そいつが飯代まで遊びに使い込む馬鹿なのが悪いんだからな」

「それは去年も同じクラスだったから知ってるけど……、かといって空腹で満足に実力出せないと困るし」

「それにしても、ただでさえ小食な女子のお弁当を1段分も食べるなぞ、傍から見たら最低な男じゃのう」

「…………… ヒモ人生まつしぐら」

「明久はダメ夫確定だが、逆に夏樹は良妻になりそうだな」

男友達の指摘にあつきーがうなだれています。

「あはは、私はそんなに小食って訳じゃないから大丈夫だよ？ 1
段分って言うのも3段のうちの1段だし」

一応少しでもあつきーをフォローしておきます。……できたかは
分からないけど。

「……あの、良かったら私がお弁当作ってきましようか？」
「え？」

もっちーの良妻発言を聞いて考え込んでいたひめひめが口を開きま
す。

「本当にいいの？ 僕、塩と砂糖以外のものを食べるなんて久しぶ
りだよ！ しかも、二日連続で食べられるなんて夢みたいだ」

随分安い夢だね。

「はい。明日のお昼で良ければ」

「よかったじゃないか、明久」

「うん！」

あつきー、とてもいい笑顔していますね。

「……ふーん。瑞希って随分優しいんだね。吉井だけに作ってくる
なんて」

なんだか面白くなさそうなしまっちの言葉。だったら自分でも作
ってくればいいじゃない。恋は積極的に攻めないとどんな結果にな
っても文句を言っちゃダメなんだよ？

「あ、いえ！ その、皆さんにも……」

「俺達にも？ いいのか？」

「はい。嫌じゃなかったら」

「それは楽しみじゃのう」

「……………（コクコク）」

「……………お手並み拝見ね」

ひめひめの分も考えると七人分か、流石に大変だよね。

「私の分は大丈夫だよ？ ひめひめ、私の食べる量とか知らないでしょ？」

「大丈夫です！ 育ち盛りの男の子がいるんですからいっぱい作ってきます（そんなこと言って吉井君に食べてもらうつもりですね。これ以上夏樹ちゃんにアプローチはさせません！）」

……………何かとんでもない誤解をされている気がする。

「分かった、じゃあひめひめの分を考えて量を減らして持ってくるよ」

「……………それなら、まあ。では、明日は皆に作ってきますね」

しまつちの妨害のせいとはいえ、七人分も作ることになってても嫌そうな顔をしないなんてひめひめは優しいね。

「姫路さんって優しいね」

あつきーも私と同じことを思っただらしい。

「そ、そんな……………」

「今だから言うけど、僕、初めて会う前から君のこと好き——」

「おい明久。今振られると弁当の話はなくなるぞ」

「——にしたいと思ってました」

……衝撃の事実。私の一番の親友は変態でした。

「明久。それでは欲望をカミングアウトした、ただの変態じゃぞ」

「明久。お前はたまに俺の想像を超えた人間になるときがあるな」

「だって……お弁当が……」

「私は分かっているから大丈夫だよ、よっしー？」

あつきーの肩に手を置き、私にできる最高の優しさを込めた瞳で見つめます。

「夏樹、本当は全然分かってないよね！ 何気に友人ランクが下がっているよ！？」

「さて、話がかなり逸れたな。試召戦争に戻ろう」

そうだね。あつきーをからかうのはこの辺にしておこうか。

「雄二。一つ気になったんじゃが、どうしてDクラスなんじゃ？」

段階を踏んでいくならEクラスじゃろうし、勝負に出るならAクラスじゃろう？」

「そういえば、確かにそうですね」

「まあな。当然考えがあつてのことだ」

もっちーが鷹揚にうなづく。

「どんな考えなの、もっちー？」

「色々理由はあるんだが、とりあえずEクラスを攻めない理由は

「簡単だ。戦うまでもない相手だからな」

「え？ でも、僕らよりはクラスが上だよ？」

「ま、振り分け試験の時点では確かに向こうが強かったかもしれない。けど、実際のところは違う。オマエの周りにいる面子をよく見てみる」

「美少女二人と女神が一人、馬鹿が二人とムツツリが一人いるね」

「誰が美少女だと！？」

「ええっ！？ 雄二が美少女に反応するの！？」

「……………（ポッ）」

「ムツツリー二まで！？ どうしよう、僕だけじゃツツコミ切れない！」

「女神って、それまだ続いてたの！？ 恥ずかしいからやめてよ！」

まったく、皆なんで「数学の女帝」といい、「女神」といい、そんな恥ずかしい単語を平気な顔して言えるのかな。私だったら恥ずかしくて絶対言えないよ。

「ええ！ でも、今の僕の立場じゃそれ以外に夏樹を形容する言葉はないし」

「まあまあ、四人とも落ち着くのじゃ」

いけない、いけない。私のせいであつきーまで混乱させてしまった。

「そ、そうだな」

「いや、その前に美少女で取り乱すことに対してツツコミ入れたいんだけど」

私も女神発言で取り乱してたから無視したけど、普通におかしいよね。もっちーって脳に障害でもあるのかな？

「ま、要するにだ」

コホン、と咳払いをして再開するもっちー。……あっきーのツッコミは無視なんだ。

「姫路に問題がない今、正面からやり合ってもEクラスには勝てる。Aクラスが目標である以上はEクラスなんかと戦っても意味が無いってことだ」

「？ それならDクラスとは正面からぶつかるって難しいの？」

「ああ。確実に勝てるとは言えないな」

「だったら、最初から目標のAクラスに挑もうよ」

「初陣だからな。派手にやって今後の景気づけにしたいだろ？ それに、さっき言いかけた打倒Aクラスの作戦に必要なプロセスだからな」

「それにね、あっきー。私たちの相性がいいとは言っても実際に戦闘するのは初めてなんだよ？ 私たちのコンビがFクラスの主戦力の一つになるんだからここで連携の練習をしておかないと」

っ！？ 何か今猛烈な寒気が。それにひめひめとしまっちがなんか怖い。……私、変なこと言った？

「確かにな。夏樹の召喚獣は癖が強すぎるから敵味方共にいきなりの対応は難しいだろう」

「あ、あのー」

ひめひめにしては大きな声だね。どしたの？

「ん？ どうした姫路」

「えっと、その。さっき言いかけた、って……吉井君と坂本君は、

前から試召戦争について話し合ってたんですか？」

「ああ、それか。それはついさっき、姫路の為にって明久に相談されて——」

「それはそうと！」

もっちーの言葉を遮るように大声を出すあつきー。良かったね。ひめひめにはギリギリ聞こえてないみたいだよ。聞こえていた方が良かったかもしれないけど。恥ずかしがるあつきーを見てクスリと笑う。

「さっきの話、Dクラスに勝てなかったら意味がないよ」

「負けるわけがないさ」

あつきーの心配を笑い飛ばすもっちー。

「お前らが俺に協力してくれるなら勝てる。いいか、お前ら。ウチのクラスは——最強だ」

やっぱりもっちーは口が上手だね。根拠もないのに自信が溢れてくるよ。

「いいわね。面白そうじゃない！」

「そうじゃな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」

「……………（グッ）」

「が、がんばります」

「私も全力を尽くすよ」

「そうか。それじゃ、作戦を説明しよう」

そして、私たちはもっちーの語る勝利のための作戦に耳を傾けました。

第六話：Dクラス戦へ向けて（後書き）

次はいよいよDクラス戦突入です。

夏樹「いよいよ、私の活躍が」

まだですよ。次は明久と美波がメインで、君の活躍はその次か更に次です。

夏樹「なんで!？」

だって、美春のキャラをしっかりと出しとかなないといけないじゃない。それだと、結構文の量が多くなるんだよ。

夏樹「仕方ないな。その後はしっかりと活躍させてよ？」

夏樹の戦闘が近づくにつれ、一步一步と処刑台に近づいている気分です。

夏樹「だね、私の召喚獣の設定に批判が来るかも知れないし」

まあ、とにかく。今後も温かい目で読んでいただけると幸いです。

第七話：懐かしくも嫌な視線（前書き）

Lyricall様、直井刹那様、まあ様、由里様、感想ありがとうございました。

夏樹「祝♪PV10000突破あー！」

第六話を投稿した日にPV10000を突破しました。これもご愛読くださっている皆さんのおかげです。ありがとうございます！

夏樹「でもさ、その嬉しい出来事の後に投稿するこの話は無駄に長上に、私がちょっとしか出てなくて、原作の描写を少しいじっただけの情けない話なんだよね」

うつ、でも美春のキャラを出すにはやっぱり明久視点を入れないといけないし、一応それを利用して君の外見の描写も少し入れてはいるんだよ？

夏樹「はあー。という訳で今回は原作通りの展開で面白みがないかも知れませんが、温かい目で見ていただければ幸いです。それでは第七話、始めますっ」

第七話：懐かしくも嫌な視線

「採点をお願いします！」

隣でひめひめがテストをどんどん終わらせていくのをしり目に私は時間をめいっぱい使ってテストを解いていきます。

ひめひめは途中退席で全てのテストが0点だし、私はFクラスに入るために英語を無記名で提出したからそれらの補給試験を行って点数を回復させなければなりません。

私もひめひめみたいに短時間で数をこなせばいいんだけど、私は召喚獣の特性上相性の良いテストでも、いや、相性の良いテストだからこそ制限時間を余すことなく使用して少しでも点数を稼がなければならぬのです。

点数を稼いでる間に全滅したら意味がないのは分かっているけど、今は仲間の力を信じます。がんばってね、あつきー。

S i d e 明久

「吉井！ 木下達がDクラスの連中と渡り廊下で交戦状態に入ったわよ」

ポニーテールを揺らしながら同じ部隊の島田さんが駆けてきた。

モデル体型で綺麗なのに、似たような体型で美人系の夏樹に比べてどこか女性的な魅力に欠ける。一体何が足りないんだろう。

「ああ、胸か」

「アンタの指を折るわ。小指から順に、全部綺麗に」

まずい。なんか怒らせたっぽい。

「そ、それよりホラ、試召戦争に集中しないと！」

現在前線にいるのは秀吉率いる先攻部隊で、そことFクラスの間辺りに僕らの中堅部隊が配置されている。一応部隊長になっている以上は僕には部隊の皆を導く義務がある。ここは気を引き締めないと！

前線の戦闘の様子を聞き取って戦場の雰囲気を感じよう。

『さあ来い！ この負け犬が！』

『て、鉄人！ 嫌だ！ 補習室は嫌なんだっ！』

『黙れ！ 捕虜は全員この戦闘が終わるまで補習室で特別講義だ！』

『終戦まで何時間かかるか分からんが、たつぷりと指導してやる』

『た、頼む！ 見逃してくれ！ あんな拷問耐え切れるきがしない』

『拷問？ そんなことはしない。これは立派な教育だ。補習が終わるころには趣味が勉強、尊敬するのは二宮金次郎、といった理想的な生徒に仕上げてやるっ』

『お、鬼だ！ 誰か、助けっ——イヤァァ——（ボタン、ガチャ）』

なるほどね、大体わかったよ。

「島田さん、中堅部隊に通達」

「ん、なに？ 作戦？ 何て伝えんの？」

夏樹がない今、僕の指示はただ一つ。

「総員退避、と」

「この意気地なし！」

島田さんのチョキが僕の目に突き刺さる。

「目を覚ましなさい、この馬鹿！ アンタは部隊長でしょう！ 臆病風に吹かれてどうするのよ！」

その覚ますべき目が激痛でそもそも開かない！ そんな台詞はグーかパーで殴った後にして欲しい！

「いい、吉井？ ウチらの役割は木下の前線部隊の援護でしょう？ アイツらが戦闘で消耗した点数を補給する間、ウチらが前線を維持する。その重要な役割を担っているウチらが逃げ出したりしたら、アイツらは補給ができないじゃない」

島田さんがやけにもっともらしいことを言う。

そうだよな。僕達の働きでこの戦争の結果が決まると言っても過言じゃないし、夏樹に頼り切るんじゃないくて、夏樹が来る前に少しでも敵の数を減らしてやるってくらいの覚悟じゃないと。

君はなんて男らしいんだ、島田さん。なぜだか涙が止まらないよ！
（あと激痛も）

「ごめん僕が間違っていたよ。補習室を恐れずにこの戦闘に勝利することだけを考えよう」

「ええ。それに、そこまで心配することもないわ！ 個別戦闘は弱いかも知れないけど、これは戦争なんだから多対一で戦えば良いの

よ」

その通りだ。点数じゃ負けているけど、それだけで戦争の結果は決まらない。僕らなりのやり方で勝てる可能性を探すんだ！

「そうだね。よし、やるぞ！」

「うん。その意気よ、吉井！」

拳を挙げる僕達。大丈夫、夏樹や姫路さんがまだでも僕らならやれる！

と意気込んでいると、島田さんのところに報告隊がやってきた。

「島田、前線部隊が撤退を開始したぞ！」

「総員退避よ」

さっきと言っていることが全然違う！ 僕は殴られ損じゃないか！

「吉井、総員退避で問題ないわよね？」

大いに問題があるように感じるのは僕の気のせいに違いない。

「よし、逃げよう。僕らには荷が重すぎた」

「そうね、ウチらは精一杯努力したわ」

Fクラスに向けて方向転換すると、振り返った先に本陣にいるはずの横田君がいた。

「ん？ 横田じゃない。どうしたの？」

「代表より伝言があります」

横田君がメモを見ながらハキハキとした声で告げる。

「『夏樹はもう少し時間がかかる。そして——逃げたらクロス』」
「全員突撃しろーっ！」

戦場に向かって全力でダッシュする。
すると、前方からこちらに向かって走ってくる美少女を発見。

「明久、援護に来てくれたんじゃない！」

ああなんだ。秀吉じゃないか。なんていうか、いつ見ても可愛い……。

「秀吉、大丈夫？」

「うむ。戦死は免れておる。じゃが、点数はかなり厳しいところまで削られてしまったわい」

「そうなの？ 召喚獣の様子は？」

「もうかなりヘロヘロじゃな。これ以上の戦闘は無理じゃ」

「そつか。それなら早く戻ってテストを受け直してこないと」

「そうじゃな。全教科を受けている時間はなさそうじゃが、一、二教科でも受けてくるとしよう」

そう言うや否や、秀吉と前線部隊に配置された生徒は教室に向かって走り出す。出陣したときより数が少ないのは補習室送りになったからだろう。

「吉井、見て！」

隣を走る島田さんが叫ぶ。なんだ？

「五十嵐先生と布施先生よ！ Dクラスの奴ら、化学教師を引っ張ってきたわね！」

見ると二年生化学担当の五十嵐教諭と布施教諭が渡り廊下にいた。連中は立会人を増やして一気に片をつけるつもりらしい。

「島田さん、化学に自信は？」

「全くなし。60点台常連よ」

うーん、流石はFクラス。お世辞にもよい点数だなんて言えないな。

「よし、五十嵐先生と布施先生に近づかないよう注意しながら学年主任のところに行こう」

「高橋先生のところね？ 了解！」

既に戦闘が行われている渡り廊下で目立たないように隅へ移動する僕と島田さん。

皆、見るがいい。これが中堅部隊隊長と副官の勇姿だ！

「あつ、そこにいるのはもしや、Fクラス的美波お姉さま！ 五十嵐先生、こつちに来てください！」

「くっ！ めかったわ！」

Dクラスの一人に島田さんが見つかったしまった。化学担当の五十嵐教諭を伴ってこちらにやって来る。マズい。こつちも召喚獣を出して応戦しないと、二人揃って一撃で補習室送りだ。

「よし。島田さん、ここは君に任せて僕は先を急ぐよ！」

「ちよつ……！ 普通逆じゃない！？ 『ここは僕に任せて先を急げ！』 じゃないの？」

「そんな台詞現実じゃ通用しない！ それに、その人が来てから懐かしくも嫌な感じがして一刻も早く離れたいんだ！」

彼女とは初対面なはずなのになぜだろう。

「よ、吉井！ このゲス野郎！」

「お姉さま！ 逃がしません！」

「くつ、美春！ やるしかないってことね……！」

五十嵐先生から１０メートル以上離れてからゆっくりと島田さんの様子を伺う。既に呼び出されていた相手の召喚獣に応じるように島田さんもそちらを見据えて声を出す。

「——試獣召喚サモンっ！」

そして、軍服姿でサーベルを持ち、体長８０センチほどの『デフォルメされた島田美波』といった感じの召喚獣が姿を表した。

「お姉さまに捨てられて以来、美春はこの日を一日千秋の想いで待っていました……」

「ちよつと！ いい加減ウチのことは諦めてよ！」

いよいよ戦闘が始まる。

「ところで島田さん、お姉さまって——」

「嫌です！ お姉さまはいつまでも美春のお姉さまなんです！」

「来ないで！ 私は普通に男が好きなの！」

「嘘です！ お姉さまは美春のことを愛しているはずですよ！」

「このわからずや！」

……なんだか、島田さんが遠い。そして、僕の中の警戒アラームの音量が大きくなった気がする。

「行きます、お姉さま！」

二人の召喚獣の距離が詰まり、いよいよ戦闘が始まる。

「はあああつ！」

「やあああつ！」

二人の気合が廊下に響く。

それぞれの召喚獣が武器を構えて正面からぶつかり合い、力比べが始まった。

「こ——のっ！」

「負けません！」

見ている方まで力が入りそうな鏖迫り合いを繰り広げる二人の召喚獣。

「島田さん！ 向こうの方が点数が高いんだから、真正面からぶつかったら不利だ！」

「そんなこと言われなくてもわかってるけど、細かい動作はできないのよっ！」

直後、均衡が崩れて、力負けした島田さんの召喚獣が武器を取り落とした。

「ここまでですっ！」

「くうっ！」

そのままの勢いで島田さんの召喚獣が押し倒される。その頭上には参考として二人の戦闘力（点数）が浮かび上がっていた。

Fクラス 島田美波 化学 53点

VS

Dクラス 清水美春 化学 94点

島田さん、サバ読んでたな。本当は60点にすら届いてないじゃないか。

「さ、お姉さま。勝負はつきましたね？」

刀が島田さんの召喚獣の喉元に突きたてられる。腕や足を刺された程度なら点数が減るくらいだけど、首や心臓をやられたら即死して、補習室行きだ。これは下手に動けない。

「い、嫌あつ！ 補習室は嫌あつ！」

島田さんが取り乱す。当たり前だ。僕だって嫌なもの。

「補習室？ …… フフッ」

楽しそうに笑いながら、清水さんが島田さんの手を引っ張る。

あれ？ 清水さん、そっちにあるのは保健室ですよ？

「ふふつ。お姉さま、この時間ならベッドは空いていますからね」
「よ、吉井、早くフォローを！　なんだか今のウチは補習室行きより危険な状況にいる気がするの！」

そうだろうね。僕もそんな気がするよ。でも、

「殺します……。美春とお姉さまの邪魔をする人は、全員殺します」

ごめん、僕にソコに飛び込む勇氣はない。清水さんの視線に体が無意識に逃避行動をとろうとする。あの視線は僕が中学校のころに何度も浴びてきた視線と同質のものだ。なんで今まで気付かなかったんだろう。……気付きたくなかったんだろうなあ。

夏樹は友達として付き合ってみると、天真爛漫で子供っぽい性格とコロコロ変わる表情で可愛いという印象を受ける。しかし、165cmオーバーの長身と整った顔立ち、切れ長の目という見た目のせいで黙っていると男の僕から見ても非常にカッコいい。そのうえ、夏樹はしっかりした性格で誰にでも優しく、面倒見が良いから中学時代は同じ年や年下の、特に同性のファンがたくさんいた。

そんなカッコいい女性の隣に平凡な男に過ぎない僕が立っているのが気に食わないらしく、下級生の女の子の何人かから嫉妬の視線を向けられ続け、その視線に敏感に反応するようになってしまった。

しかも、清水さんの視線はその何人もの視線を集めて凝縮したような強さを持つ。そんな人に歯向かうなんて僕にはできない。よって、僕にできるのは、

「島田さん、君のことは忘れない！」

「ああつ！ 吉井！ なんで戦う前から別れの台詞を！？」
「邪魔者は殺します！」

島田さんの召喚獣の手足に攻撃を加えて動けなくすると、今度は敵がこっちにやって来た！ 僕は一切手を出す気が無いのにつ！

「吉井、危ない！ ——^{サモン}試獣召喚っ」

と、脇から割り込んできた声。か、彼は——クラスメイトの須川君！ ありがとう！ 君がまるで救世主のように見えるよ！

Fクラス 須川亮 化学 76点

VS

Dクラス 清水美春 化学 41点

須川君の召喚獣が敵を切り倒す。

清水さんがさっきの戦闘で消耗していたから須川君が簡単に勝つことができたみたいだ。

「島田、大丈夫か？」

「ええ、助かったわ須川君。本当にありがとう。補習の鉄じ——西村先生、早くこの危険人物を補習室へお願いします！」

「おお、清水か。たつぷりと勉強漬けにしてやるぞ。こっちに来い」

島田さんと違って止めを刺された清水さんが鉄人に連行されていく。

「お、お姉さま！ 美春は諦めませんから！ このまま無事に卒業できるなんて思わないでくださいね！」

とても、危険な台詞を残し、清水さんは補習室へと連行されていた。……っていつかその台詞、宿敵に放つみたいじゃないか。君は本当に島田さんが好きなのかい？

いろいろな意味で危ない戦いだった。

「吉井」

「島田さん、お疲れ。とりあえず一度戻って化学の試験を受けてくるといいよ」

「吉井」

「さ、須川君、行こう。戦争はまだまだこれからだ」

「吉井いつ！」

「は、はいつ！」

「……ウチを見捨てたわね？」

「……記憶にございません」

流石は戦場だ。殺気がヒシヒシと伝わってくる——ただし、後ろにいる島田さんから。

「……………」

「……………」

しばしの沈黙。なんだか、とても居心地が悪い。

「死になさい、吉井明久！ 試験召——」^{サモ}

「誰か！ 島田さんが錯乱した！ 本陣に連行してくれ！」

冗談じゃない！ あんな危険人物と同じ部屋に閉じ込められるなんて真っ平だ！

「島田、落ち着け！ 吉井隊長は味方だぞ！」

須川君が島田さんを羽交い絞めにしてなだめる。ありがとう！
やっぱり、君は救世主だったんだね。

「違うわ！ コイツは敵！ ウチの最大の敵なの！」

……否定できない。けど、最大の敵は僕よりもさっきの危険な娘
だと思う。

「す、須川君、よろしく」

「了解」

「こら、放しなさい須川！ 吉井！ 絶対に許さないからね！」

「は、早く連れて行って！ なんかその禍々しい視線だけで殺され
そうだ！」

なんてことだ。さっきの清水さんって娘とほとんど変わらないじ
やないか。……なんだ、結局どっちを選んでも結末は同じだったん
じゃないか。

「ちよつと、放し——殺してやるんだからぁーっ！」

物騒な台詞を残していったが、ひとまずの身の安全は確保できた。

「よし、とにかく秀吉たちが補給をしている間、前線を維持するん
だ！ 一歩も進ませないように！」

怒号や悲鳴が飛び交う廊下で大声を振り上げる。ここからが僕らの
正念場だ！

第七話：懐かしくも嫌な視線（後書き）

はい、切りどころが分からなかったので、前書きで言った通り今までで一番多い文量となってしまいました。申し訳ありません。

夏樹「今回は9割以上あっきーの話じゃない！ 私はいつ活躍するの！」

夏樹の活躍は次の次になり、次のお話は原作の文は一切使わない予定です。

夏樹「やっとオリジナルな展開を入れられるね」

次のお話でもまだ夏樹は戦闘しませんが、その次にはしっかりと夏樹も戦線に加わりますので、今後もしよろしくお願いします。

第八話：あのバカ共が！（前書き）

まあ様、直井刹那様、糖分摂取魔様、感想ありがとうございます。

今回は原作にはなかったオリジナルのシーンです。原作にない展開は考えるのは原作参考より大変ですけど、執筆はいちいち原作を見直さなくていいので楽ですね。今回の話は大分執筆速度も速かったです。

夏樹「まだ、私の戦闘始まらないの？ みなさん待ちくたびれているんじゃない？」

一応今回は雄二をしつかりとした軍師として書くために使いました。だって原作の彼、後になるほど普段は周りに翻弄されて策士キャラが薄くなっていくんだもの。

夏樹「ですので、もっちーが今回のお話では立派に軍師をやっています」

それでは第七話始まります。

第八話：あのバカ共が！

「『神父はジャン・ヴァルジャンがいつの日か改心できることを信じていたため』って」

私は今、現代国語の補給試験を受けている。……無記名だったのは英語の試験だけなのになぜかって？ その理由を知ってもらうには数十分前にあったことを話さなくてはならない。

——数十分前——

「夏樹。お前がFクラスに入るために英語を無記名で出したことは知っているが、現国と数学はどうだったんだ？」

私の英語の試験が終わったのを見計らってもっちーが尋ねてきました。

「えっと、数学はまずまずで、現国は相性最悪だったよ」

聞いてくる意味は全く分かりませんでした。無視するというのも酷いと思うので正直に答えました。

「まあ、現国はあの問題ならそうだろうな。よしっ！ 折角だ。数学と現国の試験も受けていけ。もしかしたら振り分け試験より相性が良いかも知れんからな」

それを聞いた私は多分ものすごいしかめっ面をしていたと思います。……見れないから確認しようがなかったけど。

今は少しでも早く戦場に行かなければならず、そのために隣の席のひめひめはハイペースで試験を解いているのに、私に英語以外の試験もさせる意味が分かりません。相性最悪だった現国ならまだしも、まあまあだった数学をDクラス戦のために受ける意味があるとは思えません。そんなことをしている間にも戦争は大詰めに……、

「……もっちー。なんだかんだ理由をつけて私をDクラス戦に出さない気？」

「なんでそう思っただ！？」

もっちーは明らかに驚いた表情をします。そして、心外だと言いたげな感じが口調にも表れる。でも、私にそんなのは通じません。たぶん、今言った二つが終わっても他の科目をだしにして私をこの教室に留めておくつもりでしょう。

「ダウト。バレても良いって思っている程度の嘘なら、少し表情を見ていればそれが嘘か本当かは分かるよ」

まあ、本気で観察していれば大抵の嘘は見破れるんですけど、言う必要はないですね。

「ふっ、まあな。別にお前なら話してもいいと思っていたから否定はしない。ちょっと、こっちに来い」

もっちーに手招きされ、教室の隅の方に二人で移動します。

「なんで私をDクラス戦に出したくないのさ。次にAクラスと戦うまでにあつきーとの連携を練習しなきゃいけないし、他の皆も私の召喚獣の特性を知っとなきゃダメでしょ？」

「お前は他言するような奴じゃないし、お前が言う通りどうせバレても良いからはつきり言うが、次の相手はAクラスじゃない。加えて言うなら、そもそもAクラスとクラス単位で戦う気はない」

「はい？」

もっちーの言っている意味が分からない。私たちの最終目的はAクラスのはずだし、クラスで戦争をしないでどうやって試召戦争をする気なのだろうか。それに、もっちーは私の質問に答えているようで答えていない。百歩譲って最終目標としてAクラスを狙わないにしても次がDクラスより上のクラスであることは間違いない。だったら、ここで連携の練習をするべきというのは変わらない。

「意味が分からないって顔だな」

「そりゃそうでしょ。最終目標を変えるにしても、やっぱりここで練習は——」

「バカを言うな。最終目標を変えたりはしない。俺の狙いはあくまでAクラスだ」

「もっちーの考えが全然分からないよ。それと私がDクラス戦に出ないのとの関係があるのさ」

「正直に言っと、お前の召喚獣はギリギリまで隠しておきたい。Aクラス確実であり、学年中で有名な姫路の存在はどうせ明日には全クラスにバレる。隠し玉として使えるのは今日だけだ」

確かにそうだ。今日のうちにひめひめがないことがAクラスで話題になり、そのことが学年中に広がるのにそんなに時間はかからないだろう。

「だが、お前の召喚獣は初の召喚獣演習でバグって突然消えてから周りなんて聞いても問題は解決したとしか言わず、その後はお前だけ別カリキュラムになっただろう。だから、元Cクラスと元Dク

ラスの奴以外はそもそもお前の召喚獣が特別だと言うことを知らないし、お前の召喚獣の特性を知っているのは元Dクラスでも俺達4人だけだ」

もっちーの言う通りで私の召喚獣は初めて召喚したときにおかしな現象を起こし、その問題は一応落ち着いたけど、とある事情と原因究明のため私だけ別カリキュラムの授業を受けていたし、休日に何度か学園長に呼ばれて実験をしたこともある。……もちろん休日は研究アシスタントのアルバイト扱いで謝礼はもらってるよ？

「だから、そんな謎の召喚獣の存在を土壇場で知っても対策なんて立てられない。むしろ混乱するだけだ。そうなれば、色々と交渉しやすくなる。だから、今回はお前の戦闘を見せるのは避けて、次のクラスのお前は前と明久のコンビをメインに戦略を立てるつもりだ」

なるほど、下位クラスだと侮っていたところにひめひめ以外にも強札が、それも規格外な札があると分かれば戦略は立てにくいよね。それも戦争の前日にギリギリで分かったんじゃないか。でも、出し惜しみしてここで負けたら意味がないと思うんだけど。

「大丈夫だ。姫路の準備が整うまで時間稼ぎに徹して戦闘していれば問題ない。まあ、変ないざこざで戦場が乱れれば分からないが、いくらFクラスでも戦争中に関係のない問題を起こすような、そんな救いようなバカはいないだろう」

私の不安を察したのかもっちーが微笑みながら説得してきます。そうだね。皆を信じてこのDクラス戦だけじゃなくて、打倒Aクラスっていう最終的な目標を見据えてがんばらないと。

——回想終了——

と、言うわけで私は皆を信じて試験に徹しています。既に数学は終わらせ、解答をもらっているのですが、振り分け試験よりかなり手ごたえを感じました。今やっている現国にしてもかなり相性がいいです。これなら最高点を大幅に更新できるかも。

『——放しなさい！ 私は戻って吉井を殺さないといけないの』

『まずい、島田が錯乱している』

『落ち着け、島田。今は戦争中なんだから仲間割れは——』

『おい、島田が止まらねえよ。もう1人くらい手伝ってくれ！』

……なんだろう。廊下がものすごく騒がしい。いや、騒がしいの自体は戦争中だから仕方ないけど、ここは本陣なんだからまだマシなはずだし、明らかに戦争とは関係ない内容な気がする。

「夏樹！ 試験はどんな感じだ！」

様子を見に行ったもっちーが慌てて教室に戻ってきた。

「坂本くん！ 試験中です。あなたが神谷さんと話すなら神谷さんはカンニング扱いになりますよ」

「くっ！ だったら夏樹。これはあくまで俺の独り言だ。適当に聞き流してくれ。どうやらウチには救いようのないバカ共がいたようだ。島田が暴走してそれを押さえるのに補給試験を受けようとしていた奴が何人か出て行っちゃって補給が遅れそうだ」

えっ？ 一体しまっちは戦争中に何をやってるのさ。仮にも一部

隊の副官なんだからしつかりと責任もって行動してよ。

「だから、現国はなるべく早く切り上げてお前も戦線に加わってくれ！ 畜生！ こうなりゃ、確実性は落ちるが元々の作戦だけでいいくしかねえ」

「わ、分かった。今もらった用紙の半分は漢字の問題だから、それだけ埋めたら採点にまわすよ」

「っ！？ 今すぐに……いや。それでいい。だが、なるべく急いでくれ！」

「オーケー！ 飛ばしていくよ」

そして、既に試験が終わって採点の順番を待っていた人の列がどんどん短くなり、ようやく私の試験の採点が始まった。一応、私の試験終了と採点を待っているうちにしまっちはなんとか落ち着いて須川君とともに戦場に戻っていた。しっかりやってくれるといいんだけど……。

「はい。これで神谷さんの採点は終わりましたよ」

「ありがとうございます！」

私は慌ててお礼を言うとFクラスの教室を飛び出した。……そういえば、少し前に戦場にいったはずの須川君が教室に入ってきて、もっちーと何か話していたけど、あれは一体なんだったんだろう？ いや、今はそんなことは気にせずに戦場に急がなきゃ！

「もう少ししたら俺も援軍を連れて合流するが、それまでお前が戦線を維持しろ！ こうなったらお前の強さを思いっきり見せ付けてウチのクラスの士気を存分に高めてやれ！」

「了解！ 待つてるからね、代表♪」

私はもっちーの言葉を背に受けて戦場へと駆け出します。

——そして、FクラスとDクラスの戦場に最悪にして最弱の召喚獣が解き放たれた。

第八話：あのバカ共が！（後書き）

今回の話は人によっては無駄だと思われるかも知れませんが、自分が雄二の立場なら少なくともBクラス戦までは夏樹を隠すのでこのような話にしました。

夏樹「最後の引き、なんかカッコつけすぎて寒くない？」

次の話の切り方次第では夏樹の召喚獣の強いところしか出せないから、ちゃんとデメリットもあるってことを書いておきたい。

夏樹「今回の引きは皆さんどう思いました？こういうひき逃げっぽいやり方は寒かったでしょうか？」

今後よろしくお願いします。

第九話：試獣召喚！（前書き）

まあ様、糖分摂取魔様、直井刹那様、感想ありがとうございました。

夏樹「更新だぁー」

君は元気が良いね。

夏樹「だって、ようやく私の活躍だよ？　どうしてもいいけど、シュレ猫はなんで元気がないのさ」

……どうでもいいんだ。まあ、アレだよ。今回君の召喚獣のオリジナル設定が出るから処刑台に立った気分なんだよ。批判が来ないかとか批判がなくても呆れてるんじゃないかとか。

夏樹「考えすぎだって、皆さんそんなに厳しくないよ」

それと、今回の話は放送から雄二の合流までの時間など少し原作から変化して、そうした間隔が原作より短くなっています。ご容赦ください。

夏樹「それでは第九話始まりますー」

第九話：試獣召喚！

『塚本、このままじゃ埒があかない！』

『もう少し待っている！ 今数学の船越先生も呼んでいる』

よし、無事戦場に到着しました。しかも、相手は数学の先生を呼んでいるらしいし、Fクラスに運が向いてきたね。

ピンポンパンポン《連絡致します》

ん？ 何、これ？ えっと、この声は須川君だね。一体何をする気なんだろう。

《船越先生、船越先生》

えっと、先生の呼び出しかなあ？ 戦争中に何でそんなことするの。……それに、折角数学は結構いい点数が取れたんだけど、その数学担当の船越先生をどこに呼び出すの？

《吉井明久君が体育館裏で待っています》

はいい？ なんでここであっきーの名前が出てくるのさ。

《生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》

な、なんてことをしてるんですか！ あの婚期を逃してついに生徒達にまで迫るようになった船越先生ですよ！ なんて酷いことをするんですか。

しかも、しかも、今回の数学は自信を持って見せられるくらいにはいい点数が取れたのになんでそれをさげちゃうんですか。

……須川君が単独で思いついたとは思えないから、誰か助言者がいるよね。あつきーを弄るのが好きで、尚且つ頭が回る人物。あはっ、該当者は一人しかいませんね。1個目なら何人かいますけど、2個目も同時に満たすのはFクラスにはもっちゃいけません。

となると、指示したタイミングだけど。それは私が採点を待っているときじゃないよね。もっちゃーは私が数学がそれなりにできたことを知っているのになんで船越先生を遠ざけたの？ 私の数学を隠したいとか、私の採点が終わるタイミングを読み違えたなら仕方ないけど、もしもあつきー弄りが目的ならあなたも救いようのないバカの仲間入りだよ。

まあ、みんなが私のモットーがどんなものか忘れたのならもう一回教えてあげないとね。私は普段はあくまで忠告で言ってるだけだから本当に実行するのは珍しいんだよ？

「須川あああああつきー！」

まあ、「悪意には悪意を」というモットーの再教育は後に回すとして、今は戦争に集中しなくちゃね。なので、私は叫んでいたあつきーに近づきます。

「あつきー、あつきー」

「なにっ！ って、夏樹！？ 随分遅かったけど、何かあったの？」
「うっん。私の方は何の問題もなかったよ。むしろ問題はこっちだと思っただけど、……なんか戦争に関係ないざこざあった？」

「……滅相もございません」

思いつきり私から目をそらすあつきー。暴れていたのがしまつちな時点で相手はあつきーだと思っていたけど、やっぱりね。まあ、今はそれを責めても仕方ないし、早速戦闘を開始しますか。

とはいってもこの科目じゃあ私達のコンビの最大限の実力は発揮できないし、初見の相手なら私ひとりで十分だから、ここで中途半端にコンビの実力を見せるのはよくないよね。

「あつきー、私はあつちの化学フィールドを受け持つから、総合科目は任せたよ。上手く指示を出して少しでも戦死を減らして」

「あつ、夏樹！ だったら僕も化学フィールドの方が――」

「大丈夫、私達コンビの活躍は決着寸前にドーンと見せて驚かせてあげよう」

総合科目フィールドはあつきーに任せて、私は化学フィールドに飛び込みます。化学は自信がないけど、相手は5人くらいしかないし、みんなの消費具合を見たらどうにかなりそうな点数でした。

「布施先生！ 現在このフィールドにいる全てのFクラス生徒の代わりに神谷夏樹が全Dクラス生徒の勝負を受けます」

試召戦争では対戦を申し込まれた後に召喚を行わないと敵前逃亡扱いで補習室行きになってしまいます。しかし、一度召喚を行えば召喚フィールド内に他の自軍生徒がいて、その生徒が勝負を肩代わりした場合に限りフィールドを出ることが可能となります。

「Fクラスみんな！ このフィールドはちよつとの間私が受け持つから、みんなは少し外で待ってて。全員の点数を半分近くまでは減らしてみせるから、私が指示したらまたフィールドに戻って止め

をお願い！」

『うおおー！ 神谷さん、めっちゃカッコいいです！』

『男前です。これからは姐さんって呼ばせてもらいます』

『姉御！ 後はよろしく頼みます！』

ちよっ！？ 誰よ、姐さんとか姉御とか言ってるのは！ 私はそんなキャラじゃないし、止めはあなた達でさしてって言うてるですよ！

…… 不満はあるけど、愚痴ってもしようがないよね。

「^{サモン}試獣召喚！」

Fクラス 神谷夏樹 化学 85点

私の足元に幾何学的な模様が現れ、召喚獣がその姿を現します。黒いズボンを穿き、白いベストの上に背中側の裾が長く先が二つに分かれた上着を着て、手には上品そうな白い手袋を付けています。私が普段背中まである髪をうなじのところでもとめているのに対し、召喚獣は同じ長さの髪をポニーテールにしているという違いこそありますが、その姿はデフォルメした私といった感じです。ちなみに私の点数もきちんと頭上に表示されていますよ。

…… ですが、なぜこの装備なのか。百歩譲って鎧でないのはいいでしょう。実際あっきーの召喚獣は改造制服ですし。でも、いくらなんでも男性用正式礼装（燕尾服）はないでしょう？ 私はれっきとした女の子なんですよ！ もっと可愛い装備がよかったですよ！

『おい、なんだあいつの召喚獣の装備』

『あんな装備見たことあるか！？』

フィールドにいた他の人たちも騒いでいます。ただ、彼らが注目しているのは召喚獣の服装ではなくその手に握られた物体。

『竹笛じゃねえか。あんなモンでどうする気だ！？』

うん！ 戦場にも服装にも見事にミスマッチだね、フィールドにいた生徒達は私の召喚獣の武器を見て考え込んだり、呆気にとられたりしていて召喚獣を操作することを完全に忘れています。……Dクラスの人たちはそれで良いけど、Fクラスのみennaまで同じ有様って言うのはどうなのでしょう。ここは活を入れるためにも大声を出します。

「ほら、Fクラスみんな！ 折角Dクラスの召喚獣の動きが止まっているんだからさっさとフィールドから出て行きなさい！！」

『す、すみませんでした、神谷さん！』

『今すぐ出て行きます、姉御！』

『あつ、お前らいつまでぼーっとしているんだ。Fクラスの奴らが逃げちまったじゃないか』

…… 本当に姉御っていうのはどうにかならないんでしょうか。

私はFクラスみんながフィールドから出たのを確認すると、Dクラスの人たちに対してできるだけ余裕を持った笑みを浮かべ、召喚獣に指示を送ります。

その指示を受けた私の召喚獣が竹笛を構え、吹き口を唇に触れさ

せる。そして、悪魔の演奏が始まります。勿論私の召喚獣に物理干涉能力はないのであくまで召喚獣が吹く真似をしているようにしか映りませんが、その演奏は確実に空気以外の何かを震わせています。傍目には何も起こらず2秒ほどが経ったでしょうか。急に演奏を始めたことは勿論、何も起こらないことに困惑してDクラスの人たちは手を出しあぐねています。

でもね、フィールドをしっかりと見ましようよ。変化は確実に訪れているんですよ？

Fクラス 神谷夏樹 化学 85点↓81点

まあ、私の点数ですから気付きにくいのでしょうかね。ほら、ぼーっとしている間に悪魔の演奏が効果を現しますよ？ さあ、更に4秒が経ちました。

Fクラス 神谷夏樹 化学 81点↓73点

VS

Dクラス 鈴木一郎 化学 92点↓88点

Dクラス 笹島圭吾 化学 99点↓95点

Dクラス 中村修二 化学 82点↓78点

Dクラス 倉田公江 化学 84点↓80点

Dクラス 遠山信吾 化学 103点↓99点

『はあ？ なんて攻撃も受けてねえのに俺の点数が減ってるんだよ！』

『ちょっと、あんたの召喚獣だけじゃないわ。私の召喚獣もよ！』

『おい、俺らみんな同じように点数が減ってるぞ！』

おお、よくこの短時間でみんな同じ速度で点数が減ってるのに気

付きましたね。でも、そうして騒いでいる間にも悪魔の演奏は続いていますよ。はい、もう9秒追加ですっ」

さらに演奏が9秒続いたことにより私の点数は18点減り55点になってしまいました。が、Dクラスの人たちも全員が9点減少しています。

これこそが私の召喚獣の特性。私の召喚獣が演奏している間、私の召喚獣は1秒毎に点数を消費することで、フィールドにいる他の召喚獣に元々持っている防御力を無視してその半分の点数分のダメージを与えます。

『おい、アイツの召喚獣が演奏してから点数が減りだしただろ、だったらアイツを戦死させれば』

『おっしゃー、覚悟しろやFクラス！』

16、7秒の相談の末、相手の一人が私の召喚獣に飛び掛ってきます。ですが、1人しか攻撃してこないなんてダメダメですね。どうせ、40点を切っている召喚獣だからと油断したんでしょうが、それは大きな間違いです。

私の召喚獣は40点を切っているとは思えない速度で、何も考えずに突進してきた相手をひらりとかわして演奏を続けます。

これが特殊な攻撃法を持つが故の性質で、私の召喚獣は一度演奏を始めるとその演奏が止まるか、ダメージを受けるまで演奏開始時のパラメーターから変化しません。よって、85点の召喚獣の速度を持ってすれば、6、70点しかない召喚獣のがむしゃらな攻撃をよけるのはわけありません。

『よしっ！ 姐さんの援護だ。試獸召喚^{サモン}』

Fクラスの1人がフィールドに飛び込んできて、私がかわしたDクラスの生徒に止めを刺します。……なんてことを！

「バ、バカ！ 私が指示を出すまで待つててくださいよ！」

相手の生徒は大振りをして体勢を崩していたためにすぐに倒すことができたが、私が怒鳴っているうちに更に3秒が経ちます。

Fクラス	神谷夏樹	化学	39点↓33点
Fクラス	福村幸平	化学	69点↓68点
VS			
Dクラス	鈴木一郎	化学	62点↓59点
Dクラス	中村修二	化学	52点↓49点
Dクラス	倉田公江	化学	54点↓51点
Dクラス	遠山信吾	化学	73点↓70点

『えっ！？ なんでっすか！？ 普通こういう攻撃は敵だけにダメージを与えて、味方は平気って感じでしょ？』

「バカ！ だったらあなた達を下げた意味がないでしょ！ この攻撃がそんなに都合のいい攻撃なはずがないじゃない！ 放射状に広がる音でどうやって狙いを定めるのよ！」

ですが、口論をしているうちに更に11秒。そろそろ頃合ですね。後3秒ほどで演奏を止めるよう召喚獣に命令を送り、フィールド外に待機していたクラスメイトに指示を送ります。

「さあ、みんな。もう相手の点数はFクラス未満の人がほとんどだよ！ 一気にやつつけちゃえっ！」

口論にかかった11秒とその後演奏させ続けた3秒、更に始めに効果が現れるまでのタイムラグ分の2秒をあわせた16秒分の点数、つまり16点がDクラスの点数から引かれます。ここまで減らせばウチのクラスが負けようがありません。だって、一番点数の高い人でも54点ですよ？ 私の指示でフィールドになだれ込んだFクラスの人たちは残っていた4人のDクラス生に止めをさし、補習室送りにしてしまいました。あっ、きーももっ、ちー率いる援軍と合流できたし、これで見事任務完了です♪

……召喚獣の操作に集中していて良く見ていないのですが、あっ、きーに任せた総合科目フィールドでは霧島さんのスカートがどうか、島田さんがどうか、消火器の噴出音とが聞こえ、拳句にスプリングクラーまで発動していたのですが一体なんだったんでしょうか？

第九話：試獣召喚！（後書き）

夏樹「やったあー、大活躍うー」

とうとう出してしまった。えーっと、夏樹の召喚獣の特性はどうだったでしょうか？ 自分では気付きにくいんですが、時間と点数のレートが高すぎるとかありますか？

夏樹「そいつた忠告がありましたら書いていただけると嬉しいですよ」

一応ダメージとして与える点数が大きくなるほど夏樹の点の減りも早いのですが、ダメージが大きすぎる。または、ないでしょうが少なすぎる場合は指摘ください。忠告いただければもう少し練り直そうと思います。私はチートは嫌いなので、夏樹の召喚獣が強すぎるという事態は避けたいので。

夏樹「一応、次のお話では私の召喚獣の最弱の部分、つまり欠点が判明します」

夏樹の設定に呆れず、温かい目で見守ってくださいと幸いです。これからもよろしく願います。

第十話：ニコイチ（前書き）

まあ様、Lyric al様、糖分摂取魔様、由里様、柏崎せもぼぬめ様、感想ありがとうございました。

第十話の投稿です。

夏樹「今回は随分と更新ペースが速くない？」

……君の設定は批判が来る可能性のある綱渡りだからね。もういつそのこと全部の設定を明らかにしちゃおうと思って。

夏樹「処刑のときは少しでも早い方がいいってこと？ 殊勝な心がけだね」

一応君の召喚獣の基本的な設定は認めてもらえたけど、残りの分がね。

夏樹「では、私の召喚獣の設定が全て明らかになる第十話、始めます」

第十話：ニコイチ

うーん、化学フィールドの味方を助けられたのはいいのですが、少し困りましたね。化学フィールドは私がしつかりと最初の位置に保っていたのに対して、総合科目フィールドは徐々にFクラス側に下がりながら合流したので、総合科目フィールドにいた人たちは援軍と合流できたのですが、私達化学フィールド組は援軍と切り離されてしまいました。

このままでは私達はさっきまでFクラスを追っていた人たちとDクラスの援軍とで挟み撃ちにされてしまいます。どうするべきか考え込んでいるともつちーが余裕を持った顔でDクラスの援軍の方を指差します。

その指の先を目で追ってみるとそこには数学の木内先生が。なるほど、痺れを切らしたDクラスが採点要因の木内先生を立会いに連れてくるのを予想して、船越先生を他の場所に移したんですね。私が1人で殿をつとめられる状況し、且つ補給に戻っていた敵もおびき出すためにタイミングを計算していたんですか。流石は代表♪ご褒美としてお仕置きするかどうかはあなたの運を天に任せてあげますね。

「みんなは布施先生を連れて援軍と合流！ 援軍との間に何人かDクラスの人がいるけど、援軍と協力して駆逐するくらいの勢いで行っちゃいなさい！」

『分かりました！ 姐さん』

『でも、姉御は1人で大丈夫なんですか？』

姐さんとか姉御とかの呼び方は勘弁して欲しいけど、みんなの心

配はとても嬉しいです。でも、今回のテスト、立会人が木内先生、相手は所詮Dクラス、これだけの条件が揃っていても負ける可能性は全くありません。

「私の心配は良いからさっさと行って」

私はそういつと同時にDクラスの援軍に向かって走り出します。

「木内先生、Fクラス神谷夏樹がここにいるDクラス全員に勝負を挑みます」

「許可します」

「行つくよおー。試獣召喚！^{サモン}」

サモンの掛け声で私の足元に燕尾服を着た召喚獣が現れます。でも、さっきと違い――

『あれ、夏樹さんの召喚獣の楽器がさっきと違うくないか？』

『ああ、さっきは竹笛だったよな』

そう、先ほどとは違い私の召喚獣はヴァイオリンを手にしています。これは私の召喚獣に起きたバグに関係する現象です。私の召喚獣の武器、というか楽器は点数に応じて変化し、基本的に高得点になるほど服装に相応しくはなりますね。……まあ、竹笛からヴァイオリンに変わってもメリットはそれほどないんですけどね。

『はあ？ バカのFクラスがこの人数相手に1人で勝てると思ってるのかよ』

『身の程ってモンを教えてやろうか？ 試獣召喚^{サモン}』

ふうっ、Fクラス相手だからって酷い罵倒だね。こんなか弱い乙女にそんなことを言えるなんて性格が悪いです。でも、そういう

罵倒は私の点数を見てからの方が良いですよ？

Fクラス 神谷夏樹 数学 352点

VS

Dクラス 7人 数学 平均103点

『げえ！ 何だありや。Aクラス上位並の点数じゃねえか！』

『なんでそんな奴がFクラスにいんだよ！？』

『はっ！ 見たか、てめえら！ しかもなあ、姉御はFクラスに入るために手を抜いたから本当の実力はこんなもんじゃねえんだよ！』

『数学の女帝を舐めんな！』

『何！ 数学の女帝だと！ まさか、あの女がそうなのか！？』

やめてえー！ ここまで『数学の女帝』なんて恥ずかしい名前を叫ばないでえー！ しかも、中堅部隊だったみんなは知らないだろうけど、私は数学を受けなおしてこの点数なんだよ？ そんなこと言われたら「数学の試験を受けなおした」なんて知られるわけにはいかなくなっちゃうじゃない！

「ほら、そんなところで野次つてないでさっさと撤収！」

取り合えず文句を言うのは後回しにして、指示を出します。今は戦争中。戦争に集中しないとね。……私は戦争中に他のことに気をとられるおバカさんに非ず。

そして、私の召喚獣がヴァイオリンを構える。さあ、悪魔の演奏の第二幕が始まりますよ。そして、召喚獣が右手に持った弓がヴァイオリンの弦を震わせます。さっきよりテンポを上げますからのんびり構えていると置いていきますからね？

『安心しろ！ どうせ1秒に1点しか減らないんだ。落ち着いて7人で取り囲めば問題ない』

総合科目フィールドからチラ見していたのか。外野が指示を飛ばします。そんな言葉で安心するおバカさんにはこれから混乱してもらいますかね？ 演奏を始めて10秒が経ちました。それにより、私の点数は342点になってしまいましたけど、Dクラスの召喚獣たちは全員16点のダメージを受けています。

『おい、どこが1点なんだよ！』

『てめえ！ 卑怯な攻撃してんじゃねえよ』
『いくぞ！』

混乱して全員で取り囲むことも忘れ、2人ほど飛び掛ってきます。でも、そのタイミングもバラバラ。何がしたいのでしょうか？

「お客様方」

私はおどけた口調でからかい、演奏を続けさせながら召喚獣を飛び上がらせます。

「演奏中の奏者への乱暴は——」

先に飛び込んできた召喚獣の横腹に右足で蹴りを入れ、その足を支点にして半時計周りに体を回転。続けて飛び掛ってきた召喚獣の腹部に後ろ回し蹴りを叩き込みます。

「——マナー違反ですよん」

2体の召喚獣はフィールドの端まで吹き飛びます。

『おい、大丈夫かよ！ 300越えの召喚獣の攻撃なんか食らったら！』

『やべえー、補習室は嫌だあー』

『あれっ？ お前の召喚獣の点数の減り、俺の召喚獣と一緒にじゃねえか？』

『マジだ！ まともに蹴りを食らったのに全然減ってねえぞ！』

……これが私の召喚獣のもう一つの性質。いえ、欠陥です。私の召喚獣は他の召喚獣に触れること自体はできますし、攻撃を加えることで体勢を崩すことはできます。しかし、どんなに点数差が大きくても、殴る蹴るなど通常の召喚獣ならダメージを与えられる行動によって相手の点数を減らすことができないのです。

よって、確かに多人数を相手に全体攻撃を行えると言うのは私の召喚獣の強みですけど、たった1人しかない状況でも点数を犠牲にして放つ全体攻撃でしか点数を削れないという欠陥でもあるんです。

まあ、その辺は代表であるもっちーの采配に任せましょう。頼りにしてるからね、もっちー♪

その後、50秒という時間はあっという間に過ぎていきました。そもそも、時間とともに速度を減じていく召喚獣が連携も取らずがむしゃらに突っ込んできたところで300点台後半の召喚獣を捕らえることはできませんよ。そして、数学フィールドにいたDクラスの人たちはにしもーに補習室に連行され、両軍ともに撤退が完了していたために廊下には私1と木内先生だけが取り残されました。…少しここで指示が来るのを待ってましようか。

ふむ、あれから10分ほど経って下校時間になったせいかな廊下にも人が増えだしましたね。どうしましょうか。遠藤先生辺りを呼んだ後に下校する生徒にまぎれてDクラスに近づいて蹂躪しますかね？ それとも、やっぱり指示が来るのを待った方がいいのでしょうか。

そんなことを考えているともつちーが部隊を引き連れてやってきました。

「もつちー、随分早く戻ってきたね。補充はいいの？」

「ああ、お前が思いのほか倒してくれたおかげだな。総合科目で点数を消費した奴は教室に残してきたが、1,2教科しかダメージがない奴が結構いたから、そいつらを連れて今頃のんびりと補給試験を受けているであろうDクラスを一気に叩く！ お前の活躍で士気も大分高まったからな。その勢いを無駄にする手はない」

「分かった。教科の采配は任せたまよ、代表！」

「とりあえず、Dクラス代表の平賀は文系だからな。近くに現国と古典の教師がいるはずだ。今回の現国なら問題ないだろう。……だが、間違っても古典の教師に近づくなよ？」

「勿論！ そんなことになったら即終了だもん」

その後、私たちはDクラス近くまで進軍し、数人をDクラスに飛び込ませる。これで平賀くんを反対の扉から廊下に出す作戦だったんだけど、相手にも補給試験を受けなくても戦える人がそれなりにいたみたいで、平賀くんは近衛部隊と数人の生徒とともに廊下に出てきた。うーん、意外に残っていたね。

教室に飛び込ませた人員は挟み撃ちされないようにDクラスを見張っていてもらわなければならないので、廊下に残っていた私達だけで何とかしないと。

みんなが近衛部隊の何人かとそれ以外を引き付けてくれているうちに、後ろの様子を確認しながら私は平賀くんに近づきます。丁度現国の竹内先生の方が平賀くんに近いです。チャンスは今です。

「竹内先生！ Fクラス神谷が——」

「Dクラス玉野美紀、サモン試獣召喚」

『その他、近衛部隊も受けます。サモン試獣召喚』

くう、やっぱり近衛部隊しか召喚してくれませんか。しかも、120点近くの近くの相手が4人もいるのは私1人では荷が重いですね。ですが、泣き言は言いませんよ。

「サモン試獣召喚！」

そして、こんどはフルートを手にした私の召喚獣が現れます。

Fクラス 神谷夏樹 現代国語 181点

やっぱり、試験時間の三分の二以下しか使えなかったのが痛いですね。

『みんな、アイツ攻撃を食らったってダメージはないんだから強気で行けば大丈夫だ！』

やっぱり、私の召喚獣の通常攻撃力が0なのがバれていますね。今までの相手と違い比較的落ち着いています。そして、フィールドの端で演奏を始めた私の召喚獣に向かって4人がほとんど同じタイミングで飛び掛ってきます。しかも、上手く隙間をなくしていますね。これでは演奏を続けながらよけるなんて至難の業です。だから、

私は微笑み、こう口にするのです。

「助けてえー、ダーリン」

「^{サモン}試獣召喚！」

私の声と同時にフィールドに飛び込む生徒が一人、改造制服を着たその生徒の召喚獣は思わぬ援軍に対応できなかった正面の召喚獣に木刀で突きを入れ、その隣の召喚獣の足を払って転ばせます。そうして私の召喚獣は大きく開けた道を悠々と進み、残る召喚獣はさつきまで私がいたところで味方同士で衝突してしまいました。

「夏樹、そんな呼ばれ方すると午前中の野太い声の大合唱を思い出すから止めてよ」

「あらあら、あつきーは可愛い女の子に『ダーリン』って呼ばれて嬉しくないの？」

「夏樹にそんな気がないのは知ってるからね。そもそも、親友に言われても違和感を感じないよ」

この戦争でようやく同じフィールドに立った私達は軽口を叩きあいます。でも、その間も召喚獣に指示を出すことは忘れずに私は先ほどあつきーが突き飛ばした召喚獣が起き上がるのを見計らってあつきーの方に蹴り飛ばします。足払いで無様に転んでいた召喚十二止めを刺していたあつきーは私が蹴り飛ばした召喚獣の胸に思い切り突きを叩き込み戦闘不能にします。これで後2人。ちなみに演奏を始めて26秒、あつきーが飛び込んだのは今から15秒前。それで、今残っている召喚獣の点数があつきーが飛び込んだ後からどうなっているかというと、

Fクラス	神谷夏樹	現代国語	159点↓129点
Fクラス	吉井明久	現代国語	65点

V S

Dクラス	玉野美紀	現代国語	111点↓96点
Dクラス	遠藤幸作	現代国語	114点↓99点

そう、これこそが私の召喚獣とあつきーが相性抜群だという理由です。実は私の召喚獣は演奏によって召喚獣にダメージを与えているのではなく、正確には召喚獣と試召システムのリンクを利用してシステムにジャミングのようなことを行い、それがダメージとなっているのです。

そして、観察処分者の試召システムは通常の試召システムとは別領域で動いています。よって、通常の召喚獣のためのジャミングデータは観察処分者の召喚獣にとっては何の苦にもならず、あつきーだけが私の演奏下でも点数の消費を気にすることなく落ち着いて行動することができのです。私の召喚獣が相手に確実にダメージを与え、私の演奏を止めようとする不屈き者は魔法使いを守る騎士のようにあつきーが対処してくれます。

どんな防御も無視してダメージを与える私と、その悪魔の演奏の中をむしろその演奏に守られるかのように動き回るあつきー。まさにお互いが最初から組み合わさることが決まっていたかのようなニコイチコンビですよね。私達コンビなら十分にAクラスに対抗できるカードになる自信があります。現に今だって操作技術で上回るあつきーが時間と共に点数が減っていく残り2人の近衛部隊も補習室送りにしてしまいました。

さて、平賀くんは……うつ！ これ以上の追撃は無理です。なぜなら、平賀くんは今古典の向井先生の近くにいますからね。まあ、こちらの弱点を晒す必要はないのでここは余裕の演技でもしますか。

「さて、あつきー。折角の試召戦争なんだからクラス全員の力で勝ちたいよね」

「えっ？ どうせなら僕達だけで――」

私はあつきーの胸元をつかみ引き寄せます。

「やっぱりー。クラスで一丸となつてなにかを目指すっていうときに仲間はずれはいけないと思うのぉー。そういう信頼関係が弱点の補い合いに繋がるんだよ」

「そ、その通りですね。夏樹様（そ、そうか夏樹の古典は）」

全く、こいつは私の古典の成績を覚えていないのかしら。まあ、一般論に偽装することで私の考えも伝えたいし、打ち合わせも穩便に終わったので私達は声をそろえて彼女を呼びます。

『それじゃあ、ひめひめ（姫路さん）。後はよろしく』

平賀くんは『何を言っているんだこの馬鹿共は？』というような表情をしています。

「あ、あの……」

そんな彼の後ろから、申し訳なさそうにひめひめが肩を叩きました。

「え？ あ、姫路さん。どうしたの？ Aクラスはこの廊下は通らなかったと思うけど」

平賀くんは未だに現状を理解していないようです。まあ、当たり前ですね。ひめひめがFクラスだなんて普通は誰も思いませんし。

しかし、そんな彼にひめひめはもじもじと体を小さくしながらもし
っかりと言い放ちます。

「Fクラスの姫路瑞希です。えっと、よろしくお願いします」

「その……Dクラス平賀君に古典勝負を申し込みます」

「……はあ。どうも」

「あの、えっと……さ、試獣^{サモン}召喚です」

Fクラス 姫路瑞希 古典 326点

VS

Dクラス 平賀源二 古典 114点

そして、勝負は一瞬でつきました。

第十話：ニコイチ（後書き）

夏樹「今回も結構長かったね」

本当は数学の対決とその後を分けてもよかったんだけど、いい加減ニコイチコンビの登場を先延ばしすぎかなと思って。

夏樹「でも、これで私の召喚獣とあつきーが相性のいい理由まで出たし、後は審判を待つただけだね」

一応、明久の設定にアニメ版の方を混ぜています。前回も言いましたが、シュレ猫はチートが嫌いなのですが、一人で書いているところのくらは大丈夫かなという線引きが難しいんです。なので、強すぎるなど感じた方はご指摘ください。

夏樹「指摘していただければ、それを活かしてしっかりと設定を練り直します」

あと、早めに設定について意見をもらうためにストック分を考えず投稿しましたので、次話はこれから書き始めます。なので、更新ペースが今までより少し遅くなると思いますが、ご了承ください。

第十一話：悪い手はこれ？（前書き）

Lyric al様、糖分摂取魔様、まあ様、柏崎せもぼぬめ様、ヘタレな道化師様、感想ありがとうございました。そして、PV2000、ユニークアクセス3000突破です。読んでくださっている皆さん、本当にありがとうございます。

第十一話の更新です。時期的には戦後交渉なのですが、夏樹は戦後交渉に参加しません。

夏樹「まあ、私が居ても変化はないしね」

今回、今まで見せたことがない夏樹の一面が現れますが、皆さんの反応が怖いような楽しみなような。

夏樹「今回モブキャラも出したしね」

では、第十一話始まります。

第十一話：悪い手はこれ？

『うおおーっ！』

Dクラス代表の平賀くんが討ち死にしたという報せを聞いたFクラスの勝鬨かちどきとDクラスの悲鳴が混ざり、耳をつんざくような大声が校舎内を駆け巡りました。

「凄えよ！ 本当にDクラスに勝てるなんて！」

「これで畳や卓袱台ともおさらばだな！」

「ああ。あれはDクラスの連中の物になるからな」

「坂本雄二サマサマだな！」

「やっぱりアイツは凄い奴だったんだな！」

「坂本万歳！」

「姫路さん愛しています！」

代表のもっちーを褒め称える声がいたるところから聞こえてきます。

さっきまでもっちーがいたところを見ると、もっちーはがっくりとうなだれるDクラス生徒たちの奥でFクラス みんなに取り囲まれていた。

「あー、まあ。なんだ。そう手放して褒められると、なんつーか」

頬をポリポリと搔きながら明後日の方向を見るもっちー。普段褒められなれていないから恥ずかしいのかな？

「坂本！ 握手してくれ！」

「俺も！」

もはや英雄扱いですね。まあ、あの酷い教室から自分達を解放した立役者だからあながち間違いでもないのかな？

ん？ あつきーがもっちーのところに駆け寄っています。あつきーも握手するんですかね？

「雄二！」

「ん？ 明久か？」

もっちーが振り返りました。あつきーはそこに颯爽と近づき、

「僕も雄二と握手を！」

そう言ってもっちーに向けて手を突き出します。って！ あのバカは包丁なんか握りこんで何やっているんですか！ 私ともっちーの距離は結構離れていて、しかもその間にはDクラス生徒とFクラス生徒の塊がありました。私は人ごみを掻き分け二人に近づきます。

「ぬおおっ！」

私が近づくより早くもっちーがあつきーの手首を押さえつけます。ほっ、よかった。安心した私はスピードを緩めます。

「雄二……！ どうして握手なのに手首を押さえるのかな……！」

「押さえるに……決まってるだろうが……！ フンッ！」

「ぐあっ！」

もっちーがあつきーの手を捻りあげたことであつきーは持っていた包丁を取り落とします。これでいよいよ危険はなくなりましたね。まあ、もっちーの命の危険は去りましたし、もう止まっても問題ないでしょうかね？ 歩きながらそう考えている間にも二人の会話は続きます。

「雄二、皆で何かをやり遂げるって、素晴らしいね」

「……」

「僕、仲間との達成感がこんなにもいいものだなんて、今まで知らな関節が折れるように痛いっ！」

もっちーが捻りあげる手の力を強めたようです。……ちよつとかわいそうですけど、あのくらいの報復はもっちーの当然の権利ですね。

「今、何をしようとした」

「も、もちろん、喜びを分かち合うための握手を手首がもげるほどに痛いっ！」

「おい。誰かペンチを持ってきてくれー」

丁度人垣を抜けていた私は全速力で二人に近づき、それぞれの手首を掴み、引き剥がします。

「す、ストップ！ 僕が悪かつ——夏樹？」

「どうした夏樹？」

私はその問いかけに答えずに笑顔でもっちーに質問します。

「ねえ、もっちー。ペンチを使って一体何をしようとしていたの？」
「簡単なことだ。そいつを使ってこのバカの生爪を剥があだただだ」

！ 夏樹！ 力を緩めろ、掴まれたところがめちゃくちゃいてえ！」

もっちーの答えを途中まで聞いた私は笑顔のまま、もっちーの手首を掴む力を強めます。

「な、夏樹！ ありが手首が潰されるように痛いっ！」

「あつきー。友達に刃物を向ける悪い手はこれ？」

私の行動を勘違いして感謝しようとしていたあつきーの手首も、もっちーの手首と同じ位の力で握ります。

「もっちーも。手首を捻りあげて少しは仕返ししたんだから、後は1、2発殴るくらいで済ませとこうよ。生爪をはがすなんてしたら拷問になっちゃうじゃない。ダメだよ？ 友達に拷問なんて」

「たたたあ。か、勘違いするな、夏樹。俺はこいつを友達だと思ったことは一度もないだaaa！ 手首を外に向けるな！ 手首だけじゃなくて肘にまで激痛があ！」

もっちーの手首を握っていた手を前に伸ばすことで、もっちーの肘から先が体の外を向くようにします。

「それならどっちにしてもダメだよな？ 友達に対して友達じゃないなんて言うのもダメだし、本当に友達じゃないなら赤の他人に日常的に暴力とかもつとダメ。私はあれは友達同士のじゃれあいだと思ってるから今まで二人に注意しなかったんだよ？」

まあ、もっちーの方はこれでいいとして次はあつきーですね。もっちーの手を元の位置に戻して、あつきーの方に顔を向けます。

「あつきー。ダメじゃない。友達に刃物なんか向けちゃ」

「で、でも、夏樹！ 雄二がさっきの放送の指示を！」

放送？ ああ、そういえば。となると、あつき
ーにももっちーに仕返しをするだけの理由はあったんですね。

「まあ、確かにこの件にはもっちーにも責任があるね」

「そ、そうでしょ？ だから——」

でも、流石に包丁はやりすぎです。

「あただだあ！ 肘があっ！ 夏樹、ストップ、ストップ。肘が悲
鳴を上げてるう！」

「だとしても、それについても1発ぶん殴るとか素手でやりなさい
！ 別にあの放送で死ぬわけじゃないんだから」

そういつて、あっきーの手首を掴む手はもっちーとは逆に手前に
引き寄せ、あっきーの腕ももっちー同様に体の外を向くようにしま
す。

「ほら、二人ともお互いに悪かったって分かったでしょ？ だつた
ら、ごめんなさいって謝って、お互いに今回のことは水に流そうよ」

「そんな！ 高校生にもなってそんなの恥ずかしいよ」

「そうだ！ 今時、お互いにごめんなさいなんてできるか！ 小学
生の理論じゃねえんだぞ」

「小学生の理論だろうが、仲直りにごめんなさいが必要なのは変わ
らないでしょ。むしろ、変にプライド持ってこじれる大人の意地の
方がおかしいの。..... なんなら、仲直りの握手もさせるよ？」

「雄二！ 包丁で刺そうとしてごめん！」 「明久！ 生爪を剥ごう
として悪かった！」

流石に握手までさせられるのは耐え切れなかったのか、二人同時に謝罪をします。その言葉を聞いた私はようやく二人の手首を開放します。

「ううう。雄二のせいで酷い目にあつた」

未だにグチグチ言っているあつきを一睨みしますが、もっちーの放送が発端なのは事実ですし、愚痴りたくはなりませんよね。

「いつてえ。おい、夏樹。お前に掴まれたところに跡ができているんだが、どんな握り方したんだ」

「えっと、ただ全力で握っただけだよ？」

「……ちなみにお前の握力は？」

「んー。私は握力はどっちも40前後だったかな」

「夏樹。どう考えてもそれは一般女子高生の握力じゃねえぞ」

「うーん。小学生のころはしょっちゅう家の手伝いで雑巾がけやってたからその影響かな？ それはそうと、ダメじゃないもっちー！

あんな放送指示したら！」

「ふつ、あの放送は俺達の勝利に不可欠だったんだから仕方ないだろう。Fクラスの生徒として勝利のためならあのくらい我慢して当然だ」

ん？　なんか私の求めた答えと違うような？

「まあ、いいや。ってことはもっちーも勝利のためなら多少の被害は我慢するんだね？」

「当然だ！」

まあ、実際はそんなつもりはさらさら無いんでしょうけどね。――応言質はとりました。

「とは言ってもな、明久。戦争に無関係なことで同じようなことをしたら殺すぞ」

何か考え込んでいたあつきーが分かりやすいくらいがっかりします。

私達がそんなやり取りをしていると平賀くんが近寄ってきました。戦後交渉のことかなあ？ 別に私が戦後交渉で役に立つことはないし、ここにいないくて良いよね。

「もっちー。私は用事があるからもう抜けるね」

「ああ。明日教室を間違えるなよ。英語の回復試験の後に話したとおりだからな」

（よし！ どうやって夏樹をここから外すかが問題だったが、こいつは好都合だ）

「分かってるって」

私からあつきー、あつきーから周りの人に情報が漏れるのを防ぐために詳しい作戦は聞いていないけど、少なくともAクラスを落とすまで設備交換はしないとは聞いていました。なので、戦後交渉でどんな交換条件を出すのかは分からないけど、大筋は分かっていますから、もっちーと平賀くんの交渉内容については一切気になりません。なので、私は目的の人物を探しにいきます。まだ下校していませんと良いんですけど。……そういえば、私が抜けるって言うてもっちーがちよっと嬉しそうになったのは何でだろう？

3年生のクラスを尋ねるのは初めてだから少し緊張しますね。それにしても先輩はどのクラスでしょうか。先輩の去年のクラスは知っているのですが、2年から3年への進級時も振り分け試験があるので意味がないですよ。まあ、そう変化しているとは思えないので中堅クラスのCかDを尋ねてみますか。

「すみません。私は2年の神谷という者なのですが」

「あら？ 2年生が3年のクラスに何の用なのかしら？」

「ええと、新野先輩はこのクラスにいらっしゃいますか？」

「ええ、すみれならこのクラスよ。すみれー！ 後輩の子が会いにきているわよー」

「あつ！ ありがとうございます」

私はまずCクラスを尋ねてみました。そこで、入り口近くにいた女の人に先輩がいるかたずねたんですが、その人は態々先輩を呼んでくださいました。てっきり、ウチの中堅クラスみたいに下の人たちを見下すんじゃないかと思っていたので、拍子抜けです。……失礼なこと考えて申し訳なかったな。

「えー、だれですかあー。ああ、夏樹ちゃんじゃないですか。久しぶりですねえ」

目的の人物である新野すみれ先輩が入り口近くにやってきました。

「新野先輩、お久しぶりです」

「んー？ 夏樹ちゃんそんな呼び方でしたっけ？ ああ、友達がいるからって気を使う必要はないですよ。いつも通りすみすみ先輩って呼んでもらわないと調子が出ません」

「え、えっと、大丈夫でしょうか？」

私は新野先輩を呼んでくれた先輩の方を見て尋ねます。

「くすつ、随分礼儀正しい子ね。二人は知り合いなんでしょ？　なら、私に構わずいつも通り話していいわよ。そ、それにしても、すみすみ先輩って、あ、あんた後輩にそんな風に呼ばれてたの？」

「い、いえ！　よ、呼んでいたのは私だけで」

「これは夏樹ちゃん特有の渾名ですからねえ。でも、夏樹ちゃんが名前を使った渾名をつけるのはとても仲の良い相手だけなんですよ」

「あら、羨ましいわね。それで、すみれに何の用事で来たの？」

「あつ！　すみすみ先輩。放送室を使いたいんですけど、機材の使い方を教えていただけませんか？」

「そのくらいいいですよー！。今から使いますかあ？」

「い、いえ。使うのはもう少し生徒が下校してからなんですけど。」

流石に先輩に残ってもらうのは悪いので、使い方を教えてもらったらなんとかします」

もう少し生徒が減らないと噂が広まりすぎて流石にかわいそうですからね。

「じゃあ、私が操作してあげるの、もう少し待ってましようか」

「そんな！　先輩だって忙しいのに申し訳ないです」

「夏樹ちゃん、機械苦手じゃないですか。下手にいじって壊されても困りますし、私も久しぶりに夏樹ちゃんと話したいですしねえ」

「じゃあ、ウチのクラスで話していったら？」

もう一人の先輩が微笑みながらクラスの中を指差し、提案してくる。

「だ、大丈夫です！　他の皆さんに申し訳ないですから」

「大丈夫よ。残っている人たちも部活に行ったり、塾に行ったりし

てもうすぐ教室に誰もいなくなるから」

「で、でも、」

「それに、私もあなたと話してみたいと思ったし」

「と、言うわけで。ようこそおー、3年C組へ」

「で、では、し、失礼します！」

そうして、私はすみすみ先輩に手を引かれて教室に入りました。そのあとはすみすみ先輩ともう一人の先輩と1時間半くらいお話していたんですが、もう一人の先輩のからかい混じりの質問に失礼がないようにと気をつけて返答していたので、自分が何を話したか覚えていません。……いろいろ、恥ずかしいこともしゃべった気がします。

第十一話：悪い手はこれ？（後書き）

今回、新野すみれ（アニメDVD特典に登場）を8割以上オリキャラ化して登場させてしまいました。

夏樹「でも、キャラが大分違うんじゃない？ 学年も3年とは限らないし」

そもそもあの人が私語を話したのは最後の一言だけだし、情報もないから書こうとしたらほぼオリキャラになるんだよ。ちなみに夏樹の知り合いの先輩として新野すみれを書きましたが、放送室を使うためだけの設定で今後出す予定は無かったり。それと、この新野すみれはイメージと違って違和感があるといった場合はイメージを教えてくれれば後で修正しておきます。

夏樹「あと、すみすみ先輩の友達の名前さえない先輩も同じくすみすみ先輩を呼ぶためのだけのキャラで今後の登場予定はないそうです」

一応新野さんはミニコーナーで出演予定なんだけど、皆さんの反響が大きければ常夏とか小暮先輩レベルの本編への出演は考えようかなと思います。

夏樹「万が……億が一、彼女達に出演をなんてきたらどうするの？ 全く話を考えてないどころか先輩達の設定もフワフワなんですよ？」

まあ、そのときはモブだった先輩に関してはアンケートでどんなキャラが面白いか聞こうかな？

これからもよろしくお願いします。

第十二話：ごめんなさい！（前書き）

ヘタレな道化師様、糖分摂取魔様、Lyrical様、直井刹那様、
感想ありがとうございます。

今回も本編には全くないオリジナルな話となっています。

夏樹「まあ、こうしてオリジナルな展開を入れるせいで進みが遅くなる可能性もありますが、やっぱり原作との差別化がないとつまらないですし」

今回のお話は夏樹の性格なら絶対にはずせないイベントとなっています。ちなみに、前話の「放送？」が気になった方、ここでその理由が明らかになります。

夏樹「では、第十二話始まります」

第十二話：ごめんなさい！

明久 side

Dクラスとの試召戦争が終わり、僕は雄二と一緒に家に帰ろうとしていたんだけど、その帰り道で教科書を卓袱台の下に置いたままだったのに気付いて学校に戻ってきたんだ。そしたら、誰もいないと思った教室には姫路さんが残っていて、一僕にとつての不幸の手紙^{レター}を書いているところを見つけたんだよね。

戦後交渉の後も雄二と熱心に話しこんでいたし、多分手紙の相手は雄二だと思う。なんであんなゴリラなんかを姫路さんが好きになったのか全く理解できなかったけど、好きな人のことを語る姫路さんはとても魅力的で邪魔をすることなんて考えられなかった。

あのゴリラが姫路さんに相応しいとは思えないし、雄二のことが心の底から羨ましく、且つ妬ましいと思ったけど、姫路さんの想いは叶って欲しくて僕は、

「その手紙、いい返事が貰えるといいね」

と、自然に応援して、姫路さんを見送っていた。

さてと、誰も居ない教室に居てもしょうがないし、さっさと教科書を鞆にしまって帰ろうかな。そういえば、夏樹は用があるって言って校舎に入っていたけど、一体何の用だったんだろ？

でも、雄二も言ってたけど夏樹に用事があって本当に良かったな。

夏樹はあれで結構、……いや、かなり真面目だからDクラスに交換条件としてエアコンの室外機を壊させるなんて提案には物凄く反対しただろうし。実際、雄二にもDクラスに壊すタイミングの指示をするまでは絶対に夏樹には話すなって釘を刺されているしね。しかも、そのことについては夏樹以外の全クラスメイトに念入りに説明してるし。

……でも、クラスの勝利のためとはいえ、夏樹だけ仲間外れみたいでなんか嫌だな。

よしっ！ Aクラスとの試召戦争が終わったら今までのお礼と仲間外れのお詫びを兼ねて僕のおごりで夏樹と一緒にどこかに遊びに行こう。

うっ、でも今月はもう仕送りが残り少ないんだよね。……うん、夏樹に前借して遊びに行つて、来月分の仕送りから夏樹に二人分払おう。御礼する相手に前借なんて普通やらないけど、夏樹なら許してくれるよね。

ピンポンパンポーン《連絡いたします》

丁度教科書を鞆に閉まったところで放送が鳴った。一体なんだろう？ もう部活をやってる生徒くらいしか残ってないし、新学期初日のこんな時間に部活向けの放送なんてあるのかな？

《船越先生、船越先生》

ゲッ！ 放送部の新野先輩が挙げた名前はあの船越女史のものだった。今もまだ体育館裏で待ってるんだろうな。見つからないうちにさっさと帰らないと。

《2年F組の須川亮くんから伝言を預かっています》

あれ？　なんでここで須川君の名前が出てくるんだろう。気になった僕は教室を出ようとした足を止め、放送に耳をすます。

《先ほどは勇気が出ず、吉井明久の名前を騙って呼び出しなどして済みませんでした。しかも、それでも勇気が出ず、先生を待たせてしまいました》

そう言えば夏樹って新野先輩と仲がいいって言ってたし、もしかして僕を助けるために放送を頼んでくれたの？　やっぱり夏樹を表現する言葉は女神以外思い付かないよ。

《でも、もう逃げたりしません！　10分後2年F組の教室に来てください。そこで今度こそ僕の想いを伝えます》

ってえ！？　何Fクラスに呼んでるのさ！　まあ、夏樹は僕が教科書を取りにきたことは知らないから僕が鉢合わせになりそうだったのは完全に偶然だから仕方ないけど、須川君はもう帰っちゃったから船越先生は結局また待ちぼうけだよ！？　夏樹ってそんな悪戯をする性格じゃないでしょ？

僕は夏樹の真意が分からないので、隣の空き教室で待機することにした。すると、5分後くらいに10分が待ちきれなかった船越先生がFクラスに入っていくのが見えた。そして、その3分後夏樹がFクラスに入っていくのを見た僕は廊下に出て、扉の隙間からFクラスの中を覗いた。

「あら？　あなたは確か神谷さん？　私は須川君に呼ばれてきたん

「ただ、彼がどこに居るか知らないかしら？」

入ってきたのが目的の人物でなかったことに落胆した船越先生が夏樹に須川君の所在を確認する。

「本当に申し訳ありませんでした！」

その言葉を聞いた夏樹は額が膝に付きそうなくらい深く頭を下げた。いきなり謝罪された船越先生はわけが分からず、戸惑った表情を浮かべている。

「さっきの放送は船越先生にここにいらして欲しくて私がお願いしたもののなんです」

明久side終了

「……一体どういふつもりであんな放送をしたの？」

私の言葉を受けた船越先生は少し不機嫌そうにしています。確実に私の行動に怒っているのでしょう。でも、その怒りは当然のことです。我々Fクラスが甘んじて受けなければならないものです。

「昼間の呼び出しは私たちの代表が船越先生を戦場に行かせないために指示した偽情報なんです」

「そ、そんな！　じゃ、じゃあ、吉井君が男女の大事な話があるつていふのは！？」

「代表が考えた嘘です。こんな乙女心を弄ぶような最低な行為が謝ったくらいで許されるとは思いません。ですが、どうしても謝罪し

ておかなければならないと思っていたんです。本当にごめんなさい！」

私は一瞬上げた頭を元の位置まで下げて、再び謝りました。船越先生の怒りへの恐怖と自分のクラスがこんな最低なことをしてしまったという恥ずかしさで先生の顔を見ることができません。

「あ、あなた達！」

「こんなことで完全に謝罪になるとは思えませんが、せめてものお詫びに私のおじを紹介させてください」

「お、おじ？」

「あつ、正確には父の従兄弟でまだ30代半ばなんです。す、すみません！ やっぱり、ダメですよ。こんなあつちがダメだからこつちだなんて考えは」

先生の疑問の声に答えるために顔を上げると先生は物凄く真剣な顔をしていて、その迫力に私は三度頭を下げます。

カツ、カツ、カツ

音に気付いて視線を上げると、船越先生が足早に近づいてきます。その視線は私の体を射抜くほどに鋭く、足がすくんでしまいました。

私の前まで来た先生は真剣な表情のまま、素早く手を上げます。続く衝撃に怯えて私は思わず目を瞑ってしまいます。

ガシッ！

しかし、私が恐れたような衝撃が頬や頭にくることも無く、右手が何かに包まれたような感触を伝えてきます。恐る恐る目を開ける

と私の右手を両手で握った船越先生の姿が。

「本当なの？」

「は？」

主語のない質問に思わず間抜けな答えを返してしまいました。

「だから、あなたのお父様の従兄弟を紹介してくれるって話は本当なの？」

「え、ええ。ただ、恋愛は当人同士の相性ですから。私にできるのはおじに先生を紹介して、二人が対面する席をセッティングするくらいなので、あまりお力にはなれないかも知れませんが」

船越先生のあまりの気迫に怯え、少し仰け反ってしまいましたが、しつかりと質問には答えることができました。

「それでいいわ。会いさえすれば大丈夫。絶対その人好みの女になつてみせるわ。で、どういった方なの？」

「りゅ、龍ちゃんですか？ えっと、本名は金城龍一で、37歳で背は結構高めですね。身内目線ですが、顔もそんなに悪くないと思います。ただ、就職運が悪いのか40手前なのにフリーター生活なんです、それでは流石にダメですかね？」

「大丈夫よ！ 私の給料があれば彼がアルバイトでもどうとでもなるわ！ だけど、いいの？ 自分で言うのもなんだけど、私は結構なオバサンよ。なのに、こんなオバサンに身内を紹介したりして？」

「えっと、さっきも言った通り就職運が悪くて不況の煽りをモロに食らってはいますけど、結構仕事のえり好みで逃した仕事もいくつかあるんですよ。そのせいで、姉さん女房がお尻を引っぱたいでも就職させなきゃダメかなって叔母さんなんかも言っていましたから、それに私にできるのはあくまで紹介だけで確実に結婚するって決ま

「たわけじゃないですし」

船越先生が顔をうつむかせてフルフルと震えています。一体どうしたんでしょうか？

「ありがとう、神谷さん！ いえ、夏樹ちゃん。私、生徒にここまで思ってもらったことなんて一度も無いわ。絶対あなたの親戚になつてみせるからね！」

「そ、その。がんばってください。私も龍ちゃんの好みを教えたりとか少しは協力できますので、上手くいくように応援しています」

「夏樹ちゃんはなんていい子なの！ こんないい子がウチの学校にいたのになんで今まで気付かなかったのかしら。……でも、本当に惜しいわ。なんで夏樹ちゃんは女の子だったのかしら。この子が男の子だったら絶対に逃がさなかったのに（ぼそっ）」

ブルウツ！

な、なんか、今、聞き捨てならない言葉が聞こえた気がするんですが。なんか春なのに寒気も止まりませんし。一体なんなのでしょう。………どうでもいいけど（良くない気もしますが）なんとなく私を女に産んでくれた両親に感謝したくなりました。

「まあ、良いわ。学校生活で困ったことがあったら何でも言いなさい。私にできるだけのことは何だつてしてあげるから」

「ありがとうございます。あ、でしたら明日の放課後に頼みたいことがあるんですがよろしいでしょうか。……すみません。言われてすぐをお願いでは、流石に図々しいですよね」

「気にしなくて良いのよ。私が何だつて言えつて言っただけだから。で、どういった内容なの？」

私は船越先生の耳元に口を寄せて小声でお願いの内容を説明します。

「そ、そんなことがお願いなの？ 随分変わってるわね？」

「だって、船越先生の乙女心を傷つけてそのままなんて酷いじゃないですか」

「え、もしかして、私のため。こ、こんな素敵ないとこ姪を持てるなんて私はなんて幸せなのかしら！ 夏樹ちゃん。安心してその後のフォローも叔母さんがしっかりとやってあげるから」

「そ、そんな、申し訳ないです」

「いいのよ。可愛いとこ姪のためなんだから。あと、夏樹ちゃんももつと砕けた口調で話していいのよ。なんたって親戚なんだから」

……先生。それはあくまでも可能性の一つで、まだ確定していませんよ。ということは絶対に龍ちゃんを逃がさないつもりですね。

「で、では、龍ちゃんとの出会いの席は後日連絡いたしますので、私はこれで失礼します」

「ええ、楽しみにしてるわ。夏樹ちゃん、また明日ね」

「あつ、忘れるところでした。先生、ささやかな復讐としてこんなのはどうですか——」

明久 side

夏樹と船越先生のやり取りを見ていた僕は流石に心が痛んだ。そうだよね。生徒に単位を盾にしてまで交際を迫るのは問題だけど、裏を返せばそれだけ結婚に真剣ってことだもん。そんな人に偽のラブレターで呼び出してからかうイジメみたいなことをするなんて許

されないことだね。

うん！ 今月のお小遣いはもう少ないけど、きちんと今月分から夏樹と遊びに行くときの代金を払おう。クラス全員のために謝ってくれたんだからそのくらいいいよね。いざとなれば代表の責任でことで雄二から搾り取ればいいし。

「……ぶつ、そ、それにしても夏樹は凄い仕返しを考えるね。くっ、くくく」

僕はさっきまで居たFクラスの隣の教室に入ってから声を殺して笑うけど、声を完全に抑えることはできなかった。多分、夏樹の台詞に嘘はなくて、本人はそれほど酷い仕返しだとは思ってないんだろうな。夏樹は無自覚でなんて残酷なことするんだろう。

明日、事が起こるまで笑いをこらえていられるかな。

第十二話：ごめんなさい！（後書き）

今回のお話はどうだったでしょうか？ 夏樹の性格上乙女心を踏みにじった後にフォローを入れないなんていうことは考えられません。

夏樹「当たり前じゃない。もっちーと須川君ったら本当に最低だよ」

そして、放送？のはてなマークやその後の沈黙の理由はお分かり頂けましたね？ ぶっちゃけ、夏樹は船越先生のことはかりで明久への影響までは考えていませんでした。その証拠に以前の話のどこにも「明久が」可哀相という描写はない筈です。

夏樹「うーん。船越先生へのフォローばかりで、あっきーも船越先生の毒牙にかかりそうだってことまでは考えてなかったよ」

まだまだ、夏樹のキャラが掴めるほどの話数もないですし、使いたい方がいるかは分かりませんが、一応、夏樹の使用許可を出しておきます。ご一報くだされば、ご自由にコラボなどに使っていただいてもかまいません。というか使っていただけると嬉しいです。正直私も他の方の書かれる夏樹を見たいですし。

今後もしよろしくお願いします。

第十三話：無自覚な悪魔（前書き）

今回はこの小説を投稿する前にプロローグの前に設定集を割り込み投稿しました。まだまだ、情報は少ないですが、夏樹が版權キャラなら誰に一番近いかを書きました。後書きのアンケートに答えていただける方はせめてもの参考にしてください。

夏樹「今回はDクラス戦の後の朝の風景です。前回私が計画したさやかな悪戯が明らかになります」

夏樹はこう言っていますが、自分としてはかなり残酷な処刑だと思います。

夏樹「お昼のエピソードもいくつかに分けそうで、なかなかBクラス戦に進みませんが温かい目で見守ってください」

それでは、第十三話始まります。

第十三話：無自覚な悪魔

翌朝、家でちよつとしたトラブルはありましたが、いつもの通り学校に行き、私は古典の教科書を開きます。古典は私の最大のウィークポイントですからね。テストの前に少しでも悪あがきをお願いします。

しばらくして遅刻ギリギリの時間にあつきーが登校してきました。その顔はともほがらかで今日がテスト漬けであるという大変さなど微塵も感じさせない表情です。

「おう明久。時間ギリギリだな」

「ん、おはよう雄二」

もっちーに話しかける際も今まで一度ももっちーに向けたことのない笑顔です。空腹でとうとうおかしくなっちゃったのかな？

「明久、何か変なもの……食う余裕がある筈ないな。とうとうバカをこじらせて脳がおかしくなったか」

「やだなあー。雄二いー。そんなことあるわけないじゃないかあー」

「マジできもいぞ、明久。だが、そんなことより昨日の後始末はいいか」

「雄二。夏樹にあれだけ注意されたのにまた同じ過ちを繰り返すはずないじゃないか。それに、昨日の僕はどうかしていたんだよ。あの程度のことですぐ大切な友達を殺そうとするなんて。ああ、今日の僕はいつもより周りの人たちに優しくできそうだよ」

「もういい。それ以上しゃべるな。マジで鳥肌が立ってきた」

もっちーが顔をしかめ、腕をさすりながら言い放ちます。傍で聞

いている私も正直気持ち悪いと思った。そりゃあ、友達同士仲良くするのがベストだけど、あの二人はそんな関係になりえないことは理解しているし、あつきーがもっちゃんを大切な友達だなんて本心で思っていないようなことを打算のない笑顔で言っているのがありえない。

「それに、俺の始末じゃなくてだな」

「一体何が言いたい――」

「吉井っ！」

「ぐぶあっ！」

あつきーの言葉がしまつちの拳で遮られました。私はため息とともに立ち上がり、しまつちを羽交い絞めにします。

「は、放しなさいよ、夏樹！」

しまつちは随分といきり立っているね。昨日の続きかな？

「ほら、落ち着いてよ、しまつち。昨日、一体何があったのさ」

「聞いてよ！ 吉井ったら私を見捨てただけじゃ飽き足らず、消火器のいたずらと窓を割った件の犯人に仕立て上げたのよ」

酷い頭痛がします。両手を使ってしまつちを羽交い絞めにしていなければ右手で頭を押さえているところです。

「あつきー、そんなことしたの？ 見捨てたことについては戦争をやる以上補習を受ける危険性は考慮すべきだからそんなに問題じゃないけど。ダメだよ？ いたずらの責任を人に擦り付けちゃ。それに、しまつちも。時間的に考えて後の二つは私が戦場に入ってからのことだよな？ じゃあ、補習室行きにされそうなのを見捨てただ

けであんなに暴走したの？ ダメじゃん。そのくらいで戦争を放り出しちゃ」

「違うわ！ 補習室なんかよりもっと危険なところに連れて行かれそうなのよ！」

？ にしむーがそんな変なところに連れて行くとは思えませんが、一体何があったのでしょうか？ まあ、だとしても私がすることは一つですね。

「あつきー。ちゃんと反省して、しまつちに謝らないとダメだよ！」

「うう、島田さん、ごめんなさい」

「謝って済む問題じゃないわよ！ あんたのせいで彼女にしたいくない女子ランキングがあがつちゃったじゃない！」

……ウチの学校にそんなのあったんだ。初めて知りました。でも、しまつち。多分私の予想だけど、今回のことがなくても相当上位にランクインしてたんじゃない？ だって、あつきーに関節技かけてるしまつち、物凄く怖いもん。

「まあ、本当は夏樹を振り払ってでも掴みかかっているんだけど」

ねえ、しまつち。普通の人にはさつき鼻血が出るほど強く殴った時点で終わらせていると思うよ。

「アンタにはもう充分罰が与えられているようだし、許してあげる」

「うん。さつきから鼻血が止まらないんだ」

「いや。そうじゃなくてね」

「ん？ それじゃ何」

「一時間目の数学のテストだけど」

しまつちがとても楽しそうに、心から楽しそうに告げます。

「監督の先生、船越先生だつて」

ああ、良かったですね。船越先生。今度授業があつたときにも
と言つておきましたが、早速仕返しの機会が来ましたよ。まあ、乙
女心をもてあそんだんですからこのくらいの罰は受けませんとね。

「う、嘘！ は、早くどうかして対策を練らないと」

あつきーが酷く慌てた態度をとりますが、はつきり言つてバレバ
レです。注意深く観察するまでもありません。しまつちもあつきー
の反応が予想と違つたためにいぶかしげな目であつきーを見ていま
す。実際、あつきーの性格なら脱兎のごとく逃げると思ふんですが
ねえ？

「吉井、アンター体どうしたの？ 船越先生が怖くないの」

「そんなことないよ。怖いに決まつてるじゃないか！」

いや、あつきー。物凄く白々しいよ。もしかして、あつきー。噂
を聞いたのかな？ でも、時間ギリギリに来たあつきーが聞いている
とは思えないんだけど。そう考えていると、廊下から一人の生徒が
飛び込んできます。

『おい、須川！ Eクラスで噂が流れていたんだが、お前、船越先
生に告白したんだつて！？』

『は？ いや、俺は——』

『マジか！ 須川、お前どんだけ女に飢えてんだよ』

『あの船越女史まで守備範囲とは恐れ入ったぜ』

『だから、俺はそんなことしてねえよ』

ああ、やっぱり。部活熱心なEクラスを中心に噂が流れていましたね。流石に噂にしてみましたのは申し訳ないですけど、体育館裏では誰が聞いているか分からないのであーいった話をするわけにはいきませんし、確実に先生を呼び出すにはあの放送しかありませんでしたし、仕方のないことだったのです。悪戯のダメージは少し大きくなるかも知れませんが、せめて少しでも広まらないように帰宅部の人が完全に帰るまで待つてからの放送にしたんだから、多めに見てくださいね。

「は？　どういうことなの？　なんでいつの間にか船越先生の相手が吉井じゃなくて須川になっているのよ？」

「さ、さあ？　僕も何でかさっぱり分からないよ」

……やっぱり、あつきーは事情を知ってますね。笑顔が隠しきれませんよ。まあ、別に知られて困る情報ではないのでいいですけど、もしかして私と船越先生の話をどこかで聞いていたのでしょうか？

教室中が須川君が船越先生に告白したという噂の真偽で騒いでいると、一時間目の予鈴が鳴り、船越先生が入ってきました。あつきーは必死に笑いを押し殺そうとしています。事情を知っているならそうでしょうね。

「テストを始める前に、須川君」

船越先生が須川君に声をかけます。声をかけられた須川君は少し怯えた表情をしています。

「あなたの気持ちは嬉しいんだけど、先生、どうしても須川君をそ

ういう対象としてみるができないの。だから、あなたの気持ち
は受けられません。ごめんなさい」

『す、須川の失恋記録が更新された』

『しかも、その相手は船越先生だとおー！？』

『誰が振つても当たる。いや、それどころか避けたバットに当たり
に来るようなボールだぞ』

『一体誰なら付き合ってくれるんだよ』

『流石非モテ王の名は伊達じゃねえな』

『う、嘘だあぁー！』

叫び声とともに須川君は教室を飛び出していきました。その顔は
とても悲しく、痛ましげで、大粒の涙が溢れていました。

ちよつとした悪戯のつもりだったのに、あんなに悲しむなんて。

……少し、……ううん、かなり失敗しちゃったかな。軽はずみ
なこととして本当にごめんね、須川君。

ちなみに、隣の席のあつきーはお腹を抱えて大笑いしていました。
まあ、昨日のことを考えれば気持ちには分かるけど、あれだけ悲しん
でいたんだから、笑わないでいてあげようよ。

「な、夏樹。な、ナイスアイデアだったよ」

あつきーが笑いながら私に声をかけてきます。すると、その声を
聞いたもっちゃんが私に問いかけてきます。

「なんだ。今のは夏樹の入れ知恵だったのか？」

「う、うん。ちよつとした悪戯のつもりだったんだけど、あんなに
ショックを受けるなんて。酷いことしちゃった」

「大丈夫だよ、夏樹。須川君はフラレ慣れてるから、このくらいの

傷はすぐに治るよ」

「今回の傷は致命傷だったと思うけどな」

致命傷と言いつつもこのクラスの精神的打たれ強さをすでに昨日1日で把握したのか、もつちーも苦笑します。そんなわけで、気持ち悪いことや個人的に考えさせられることもありましたが、私達の朝的一幕はほのぼのと過ぎていました。

しかし、このときの私は想像もしていなかったのです。この日のお昼にはあつきーやもつちーが生死に関わる危機に、私が乙女の尊厳をかけた勝負に直面するなんて。

第十三話：無自覚な悪魔（後書き）

夏樹「ちよっと、やりすぎちゃったかな？」

私はかなりやりすぎたと思うよ。「もうやめて、須川君のライフはゼロよ！」ってヤツ？

アンケートなんですが、実はこの数話後に夏樹にコスプレをさせたいと思っているんですが、

夏樹「ちょ、私そんなこと聞いてないよ!？」

だって、言っていないし。その衣装のアンケートをとりたいなど。

候補は？婦警服？キャビンアテンダント？その他

選択肢でお分かりのように、シユレ猫はコスプレの知識が薄いので衣装が全然思いつかなくて困っているのです。夏樹にはスカートが短く、且つかっこいい女性に似合うコスプレをさせたいのですが、そういったコスプレにはどんなものがあるでしょうか？ どうか、知恵をお貸してください。

それでは、これからもよろしく願いします。

第十四話：夏樹と瑞希のお弁当（前書き）

まあ様、糖分摂取魔様、柏崎せもぼぬめ様、直井刹那様、由里様、感想ありがとうございました。

デザートを食べるところまで書き終わったのですが、そこまでだけで7000字弱あるので2つに分けて投稿します。

夏樹「この日のエピソードって下手すると戦争より長くなるんじゃない？」

そうかも知れない。多分、この日のエピソードはDクラス戦より長くなってしまう。

夏樹「まあ、戦争よりも日常の方が私がいる影響が大きいかも知れないしね」

そして、今回は雄二視点から物語が始まります。今回のエピソードはこの視点が一番面白いので。それでは十四話始まります。

第十四話：夏樹と瑞希のお弁当

雄二side

「よし、昼飯でも食いに行くぞ！ 今日にはラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにすつかな」

俺は勢いよく立ち上がり、明久達^{バカ}を昼飯に誘う。バカは当然として秀吉やムツリー二もテストの疲れが出ているようで、まだ立ち上がらない。俺はテストによる疲れなんてないんだが、頭を悩ませている事態があった。まあ、代表が不安な表情をしていては士気に影響があるからそんなことはおくびにも出さんが、こりゃ隊編成をしつかり考えないと次の戦争はまずいな。まったく、俺らはどんだけ運に見放されてんだよ。

「ん？ 吉井達は食堂に行くの？ だったら一緒にいい？」

「ああ、島田か。別に構わないぞ」

「それじゃ、混ぜてもらうわね」

「……………（コクコク）」

そこに島田がやってきて、食堂への同行を求めたが、別に何の問題もないのでそう答える。まあ、ムツリー二がうなずいているのは下心のせいもあるんだろうな。

「じゃ、僕も今日は贅沢にソルトウォーターあたりを——」

「あ、あの。皆さん……………」

明久達が立ち上がったところで姫路が声をかけてきた。

「うん？ あ、姫路さん。一緒に学食に行く？」

「あ、いえ。え、えっと……お昼なんですけど、その、昨日の約束の……」

明久が姫路を学食に誘うが、姫路はもしもじしている。一体どうしたんだ？ 俺がそう考えていると秀吉が口を開く。

「おお、もしやお弁当かの？」

「は、はいっ。迷惑じゃなかったらどうぞ」

おお、そついや昨日、姫路が俺達全員の弁当を作ってくるって言うたな。よく見ると姫路の卓袱台には4段に積まれた7寸（約21cm）重箱が置かれている。女子の食の細さを考えれば7人でも十分な量だろう。まあ、俺はちよつと物足りないが。

「迷惑なわけではないでしょ？ 全く、昨日約束したばつかなのに私以外全員忘れてるなんて」

そう言つて夏樹が近寄ってくる。ちなみに夏樹は汗をかいて暑くなったからと上着脱いで、肩に羽織っている。まあ、おそらく汗の原因は冷や汗だろうな。にしてもこいつ、本当にスタイルいいよな。上着を脱いだことでよく分かるようになった体型を一瞥していると俺の目が可笑しなものを捉えた。……なんだありや？ 俺は目をこすつて再確認するが、それでもさっきの光景は変わらない。

「なあ、夏樹。お前が手に持っているものはなんだ？」

「何つて、お弁当箱だけど？」

「……………俺には重箱に見えるんだが」

「やだなあ。重箱だつてお弁当を入れるのに使えばお弁当箱だよ。それにひめひめもお弁当を重箱に入れて持ってきてるじゃない」

「そうだな。その理論は正しい。だが、今回弁当を作ってくるのは姫路だけのはずだろ」

「う、うむ。確かにそうじゃな」

「えっ？ ひめひめの分を考えて減らすけど、私も持ってくるって言っただじゃない？」

「……………確かに言っではいた」

秀吉とムツツリー二も話に混ぜてくる。こいつらも夏樹の持ち物の異常に気付いたようだ。

「そうです！ 夏樹ちゃん。嘘について抜け駆けするなんて酷いです！」

「そうよ！ 夏樹がそんなことするなんて思わなかったわ！」

「い、一体なんのこと？」

姫路や島田まで加わって話が大きくなる。ここは俺が代表して分かりやすく質問してやるか。

「なあ、夏樹。姫路の分を考えて減らしたお前の分の弁当が5寸（約15cm）重で2段はおかしいだろ？」

「えっ？ 減らしたから2段なんだけど……………」

「夏樹はいつもこのお弁当箱だよ？」

夏樹と明久の答えを聞いた俺達の間には沈黙が流れる。

『はああ！？』

ありえねえだろ？ 減らして2段ってことは普段はあの重箱を3段食ってんのか。5寸の重箱で3段っていったら3人前はあるぞ。しかもそれを日常的に食ってるだど？

「お前ら、エイプリルフルはとっくに過ぎたぞ」

「う、うむ。そうじゃな。流石にそれだけ食べてその体型とは信じられんぞい」

「……………すぐばれる嘘は控えるべき」

「夏樹ちゃん。抜け駆けを許すのは今回だけですからね!」

「そうよ、次にこんなことしたらぼっきりとお仕置きしてやるんだから!」

「うう、ほんとなのにー」

夏樹がなにか言っているが、それを無視して話を続ける。

「それでは、折角姫路と夏樹が作ってくれたご馳走じゃし、こんな教室ではなくて屋上にでも行くかのう」

「……………そうするべき」

「ねえ、秀吉くん。なんで私のお弁当までみんなで食べることになつてるの?」

……………無視して話を続ける。さて、昨日がんばってくれた兵隊達に代表として少しは返さなくちゃな。

「そうか。それならお前らは先に行つてくれ」

「ん? 雄二はどこか行くの?」

「飲み物でも買ってくる。昨日がんばってくれた礼も兼ねてな」

「あ、それならウチも行く! 一人じゃ持ちきれないでしょ?」

すると、珍しく島田が気遣いを見せてくる。さては姫路と夏樹の積極性を見て焦ったな。それで優しい女をアピールして訳か。

「悪いな。それじゃ頼む」

「おっけー」

教室を出る前に俺は明久達に釘をさしておく。

「きちんと俺達の分をとっておけよ」

「大丈夫だつてば。あまり遅いと分らないけどね」

「そう遅くはないはずだ。じゃ、行ってくる」

そう言つて俺は島田とともに一階の売店に向かう。

雄二side終了

屋上に着いた私達はひめひめが持つてきたシートに座つて、もっちーたちを待つことにした。私は肩にかけていたブレザーを脇に畳んで置いておく。

「あの、あんまり自信はないんですけど……」

そう言つてひめひめは重箱の蓋を開けた。

『おおっ！』

男の子3人が一斉に歓声をあげた。から揚げやエビフライや卵焼き、エビチリにおにぎりやアスパラ巻きなど、定番メニューが重箱にぎっしりと詰まっている。これは確かにおいしそうだし、歓声をあげる気持ちも理解できる。

「それじゃ、雄二には悪いけど、先に――」

「……………（ヒョイ）」

あつきーが取るより先に動きの素早いむっつーがエビフライを掻っ攫っていった。そして、流れるように口に運び――

「……………（パク）」

バタン　ガタガタガタ

豪快に顔から倒れ、小刻みに震えだした。

『……………』

私達3人は顔を見合わせる。

「わわっ、土屋君!？」

ひめひめが慌てて、配ろうとしていた割り箸を取り落とした。

「……………（ムクリ）」

むっつーが起き上がり、

「……………（グッ）」

ひめひめに向けて親指を立てた。『凄く美味しいぞ』って伝えた
いんだろっなあ。

「あっ、お口に合いましたか？　良かったですっ。たくさんあるの
でいっぱい食べてくださいね」

むつつーの言いたいことが伝わったらしく、ひめひめは喜んだ。私はなんでひめひめが未だにガクガクと震えるむつつーの足に気づかないのか不思議でならない。そして、むつつーの言葉に気を良くしたひめひめは取り皿に1段の3分の2近くを取り分け、むつつーに差し出す。

「皆さんもよかったですらどんどん食べてくださいね。あつ、夏樹ちゃんも遠慮なくどうぞ」

ひめひめが私の方を見た隙を見計らってむつつーが恐怖で震える眼差しをあつきーと秀吉くんに向ける。しかし、二人がふいつと視線を逸らすと、むつつーは少し逡巡しゅんじゆんした後、意を決したように取り皿のお弁当をかきこんだ。

バタン シーン

……今度は震えさえ起きなかった。

第十四話：夏樹と瑞希のお弁当（後書き）

今回はとりあえずムツツリー二が倒れるところまでです。夏樹がいの影響でお弁当が増えて大変な事になりました。

夏樹「ええ、私のせいなの！？ それにしても、むつつー、大丈夫かな、心配だよ」

さて、残るお弁当は約3段ですね。一体どうなることやら。

これからよろしく願いします。

第十五話：お昼の攻防（前書き）

まあ様、糖分摂取魔様、感想ありがとうございます。そして、P
V30、000突破、ユニーク5、000今日中に突破予定です（
現在ユニーク4、993）。読んでくださっている皆さんのおかげ
です。ありがとうございます。

それでは姫路のお弁当編後半始まります。

第十五話：お昼の攻防

「ダメじゃないか、ムツツリーニいー。食べてすぐに横になっちゃ」
(秀吉、夏樹。あれ、どう思う?)

誤魔化しのために言葉の後に、ひめひめに聞こえないくらいの小さな声であっきーが聞いてくる。

(どう考えても演技には見えん)

(だよ。ヤバイよね)

(っていうか、むっつー生きてるの?)

(……今は気にしても仕方がないじゃろ。明久、夏樹。お主ら、身体は頑丈か?)

(正直胃袋に自信はないよ。食事の回数が少なすぎて退化してるから)

(私は逆に消化吸収能力が高すぎて危ないと思う)

私達は笑顔のまま相談した。そのかいあってひめひめは私達の驚愕に気付いていない。でも、本人のためにもここは心を鬼にして指摘しないと。

(ならば、ここは私に任せてもらおう)

(そんな、危ないよ)

(大丈夫じゃ。ワシは存外頑丈な胃袋をしていてな。ジャガイモの芽程度なら食ってもびくともせんのだ)

私が意を決している間に、男共は違う方向に決意を固めている。

(ちよっと、そんなことしなくてもひめひめに注意すれば)

（ダメだよ。それじゃ姫路さんが悲しんじゃうじゃないか！）
（うむ、流石に女子の泣き顔を見るのは忍びないからのう）
（後で知る方がもっと傷つくってば）

私達が小声でもめている中で、

「おう、待たせたな！　へー、こりゃ旨そうじゃないか。どれどれ？」

もっちー登場。

「あつ、雄二」

あつきーが止める間もなく素手で卵焼きを口に放り込み、

パク　ボタン——ガシャガシャン、ガタガタガタ

ジュースの缶をぶちまけて倒れました。

「さ、坂本！？　ちょっと、どうしたの！？」

遅れてきたしまっちがもっちーに駆け寄る。……これは本気でヤバイ！　もっちーとあつきーがアイコンタクトで会話しているのを見ながら、こいつらは無視して今度こそひめひめに注意しようと決意する。

「あ、足が……攣ってな……」

ひめひめを傷つけないようウソをつくもっちー。でも、ここで言っただけなのが本当の優しさだと思う。

「あはは、ダッシュで階段の昇り降りしたからじゃないかな」

「うむ、そうじゃな」

「そうなの？ 坂本ってこれ以上ないくらい鍛えられてると思うけど」

事情を知らないしまつちが不思議そうな顔をする。

「ところで島田さん。その手についているあたりにさ」

あつきーがビニールシートに腰を下ろしているしまつちの手を指さす。

「ん？ 何？」

「さっきまで虫の死骸があつたよ」

「ええっ！？ 早く言つてよ！」

「ごめんごめん。とにかく手を洗ってきた方がよいよ」

「そうね。ちよつと行ってくる」

そう言ってしまったちは席を立った。この野郎、余計なこと言わないように退場させたな。

「島田はなかなか食事にありつけずにおるのう」

「全くだね」

ジト目の私を無視して男3人が朗らかに笑う。その裏側では必死に作戦会議を行っている。だから、そんなことする前に言った方がいいって。

（明久、今後はお前がいけ！）

（む、無理だよ！ 僕だったらきつと死んじゃう！）

（流石にさっきの姿を見ては決意が鈍る……）

（雄二がいきなよ！ 姫路さんは雄二に食べてもらいたいはずだよ！）

（そうかのう？ 姫路は明久に食べてもらいたそうじゃが）

（そんなことないよ！ 乙女心を分かってないね！）

（いや、分かってないのはどちらかと言うとお前のことだ——）
（みんなが言わないなら私が言うよ）

「ひめひめ——」

明久 side

まずい。夏樹は結構ズバズバとものを言うから、このままじゃ姫路さんが悲しんじゃう。そう判断した僕はコーラの缶を手に取り、激しく振る。

「夏樹、喉乾いたでしょ。コーラ飲まない？」

「ひめひめ、この料理——っきゃ、冷た！」

そう言つて口を夏樹に向けて、一気にプルタブを開ける。それにより、勢いよく噴出したコーラに驚いた夏樹の言葉が止まる。よしっ、完璧だ。夏樹への対処を相談するべく2人の方を見ると、赤くなつた顔を横に向けている。

「白昼堂々、とんでもねえことしたな、この変態」

「う、うむ。いつかはやりおると思っておったが、まさか親友を毒牙にかけるとは」

二人に失礼な言葉を受けるが、意味が分からず、もう一度夏樹の方を見てみる。今の夏樹はブレザーを脇に置いているから、ワイシヤツの状態で、そこに頭からコーラを浴びたからシャツが透けて……

「夏樹、ごめん！ わざとだけど、わざとじゃないんだ！」

僕は思いつきり頭を下げる。違うんだ。コーラをかけたのはわざとだけど、シャツに関してはわざとじゃなくて。

僕の言葉を受けた夏樹は視線を下に下ろし、シャツの状態を確認した。すると、夏樹の顔がどんどん赤くなった。

「っ！ この、変態！」

その言葉とともに左頬に衝撃を受けた。あっ、ムツツリーニは姫路さんの料理を食べてK O寸前になったけど、僕は物理的にK Oしそうだ。

「な、夏樹ちゃん、早く着替えてこないと」

姫路さんが夏樹の胸元にブレザーを押し付けてから、屋上の扉に向かって夏樹の背中を押す。

「待って！ ひめひめ、せめて後2発。もっちーと秀吉くんに見られた分だけ殴らせて！」

……普段島田さんに殴られるのは理不尽なのが多いけど、流石に今回は完全に僕が悪かったな。せめてもの救いはムツツリーニがダウンしていたことだね。夏樹にとってもムツツリーニにとっても。

多分ムツリー二が後で知ったら血の涙を流して悔しがるだろうけど、実際に見たら命が危ないもん。

「ダメです！ 早く着替えないと見られちゃいますよ」

姫路さんは夏樹の背中を押すのに夢中でこちらの方に意識を向けていない。当たり前だ。夏樹は結構力があるから体の弱い姫路さんが対抗しようと思ったたら全力を出さないと。そして、姫路さんが夏樹に集中している今がチャンス。未だにそっぽを向いて油断している雄二の口の中いっぱいに弁当を押し込む。目を白黒させている雄二の顎を掴んで租借するのを手伝ってあげる。まだ2段分あるんだから、ここでダウンしてもらっては困る。姫路さんが夏樹が諦めて階段を下りていくの見送っているのを確認し、最後の段まで雄二の胃袋に押し込んだ。

「ふう、これでよし」

「お、お主存外鬼畜じゃな」

「ふう、ようやく夏樹ちゃんが落ち着いてくれました」

姫路さんがこちらに戻ってきた。

「お弁当美味しかったよ。ご馳走様」

「うむ、大変良い腕じゃ」

「あ、本当に早いですね。もう食べちゃったんですか？」

「うん。特に雄二が『美味しい美味しい』って凄い勢いで。今はお腹がいっぱい過ぎて首を動かすのも辛いんだって」

視界の隅で倒れている雄二は震えさえしていないので、フォローしておく。

「そうですかー。嬉しいです」

「いやいや、こちらこそありがとう。ねっ、雄二？」

雄二の体をゆすって意識を取り戻させながら話しかける。

「う……………う……………。あ、ありがとうな、姫路……………」

ヤバイ。目が虚ろだ。

その後僕たち3人は話題を逸らして世間話をした。余計なことを言って『また作ってきますね』なんてことにならないためだ。そして、ほのぼのとした時間が過ぎる。

「あ、そうでした」

姫路さんがポン、と手を打った。

「ん？ どうしたの？」

「実はですね、デザートもあるんです」

「ああっ！ 姫路さんアレはなんだ！？」

「明久！ 次は俺でもきつと死ぬ！」

雄二が僕の作戦を死ぬ気で止めにかかる。くっ、反応のいいヤツめ。

（明久！？ 俺を殺す気か！？）

（仕方がないんだよ！ こんな任務は雄二にしかできない！ ここは任せたぜっ）

（馬鹿を言っな！ そんな少年漫画みたいな笑顔で言われてもできんもんはできん！）

（この意気地なしっ！）

（そこまで言うならお前にやらせてやる！ さっきの弁当より量が少ないんだ、楽勝だろ！）

（なっ！ その構えは何！？ 僕をどうする気！？）

（拳をキサマの鳩尾に打ち込んだ後で存分に詰め込んでくれる！
歯を食いしばれ！）

（いやぁー！ 殺人鬼——！）

雄二が手を握り、あわや肉弾戦というところで、秀吉がすつと立ち上がった。

（……ワシがいこう）

（秀吉！？ 無茶だよ、死んじゃうよ！）

（俺のことは率先して犠牲にしたよな！？）

雄二が何か言っているが、気にしない。

（大丈夫じゃ。ワシの胃袋はかなりの強度を誇る。せいぜい消化不良程度じゃろう）

その後、姫路さんはスプーンを教室に取りに行き、その隙に秀吉がデザートを食べることになった。

「では、この間に頂いておくとするかの」

戦場に向かう戦士のように秀吉が容器を取る。僕らは秀吉に全てを託し、見守るしかない。そして、秀吉は容器を傾け、一気にかきこんだ。

「むぐむぐ。なんじゃ、意外と普通じゃとゴばあっ！」

また一輪、花が散った。命という名のはかない花が。

「……雄二」

「……なんだ？」

「……さっきは無理矢理食べさせてゴメン」

「……あの量はかなりきつかったが、わかってもらえたならいい」

自称『鉄の胃袋』は白目で泡を吹いていた。

その後、僕は夏樹にメールを打って、お茶を大量に買ってきてくれるように頼んだ。夏樹は姫路さんが悲しむのを気にせずにつきぱりと言おうとしたおかげで自分だけこのお弁当から逃げられたんだから、このくらいしてくれてもバチは当たらないと思う。僕はうまくお弁当を回避した夏樹が少し恨めしかった。

十数分後、夏樹は大量のお茶と菓子パンが入った袋を手にもって戻ってきた。……なぜか婦警姿で。いや、夏樹はカッコいいから凄く似合っているし、その証拠にムツツリー二は物凄い速さでシャッターを切ってるし、秀吉と雄二でさえ見とれているけどさ。夏樹、君に一体何があったんだい？

「夏樹、その格好は（キツ！）——……ごめんなさい」

夏樹に事情を聞こうとしたら思いっきり睨まれ、僕は反射的に謝っていた。夏樹のあんな怖い眼は初めて見た。

「明久に同意するのは癪だが、一体何がお前をコスプレに駆り立てたんだ？」

「う、うむ。非常に似合っており、魅力的だとは思っくんじゃが、

何も学校内でコスプレをせんでもよからう」

「夏樹ちゃん！　ずる過ぎます、そんな方法でアプローチするなんて……！」

「そうよ！　一体どれだけウチらをバカにする気……！」

雄二と秀吉がコスプレについて疑問を投げかけ、姫路さんとちよつと前に戻ってきた島田さんがなんだか分からない抗議をする。

「次——」

その言葉を受けて、夏樹は更に眼光を鋭くし、地獄の底から響いてくるような声を出した。

「次にこの格好について触れた人は男女問わず私と同じ苦しみを受けてもらうから」

そう言っただけ全員を睨みつけ、その視線に全員が押し黙る。もしも視線にこめられた怒りで人が殺せるなら、夏樹は僕ら全員を殺せていたと思う。……本当に着替えている間に何があっただろう。

第十五話：お昼の攻防（後書き）

はい。被害者の人数に関しては原作通りですが、雄二には原作よりも多く食べてもらいました。

夏樹「なんで私がコスプレしてんのさ！」

えつと、

？夏樹の性格なら注意する？注意して姫路の料理が直ると面白イベント減？夏樹退場？読者の方々に夏樹を贖罪して嫌なイベントから避けていると思われたくない？夏樹にも災難を与えなきゃ？コスプレという思考の末の結果です。

夏樹「ねえ、？と？の間に一体どんなとち狂った思考が入ったの？」

……自分でも分からない。一応次話は夏樹がどうして婦警姿になったのか明久たちの攻防の裏側で起こっていたことを書きます。

これからよろしく願います。

第十五・五話：半コラボ？——夏樹の災難（前書き）

柏崎せもぼぬめ様、まあ様、糖分摂取魔様、感想ありがとうございます。
ました。

前回の感想では夏樹のコスプレのインパクトが強すぎたせいか、3
段分の姫路弁当を詰め込まれた雄二には一切触れられませんでした
ね。折角体をはった（はらせた）のに哀れな。

さあ、今回は明久たちが屋上でほのぼのやっていた裏側、そこで夏
樹にどんなことが起きたのか。そこにスポットを当てます。

それでは十五・五話が始まります！

第十五・五話：半コラボ？——夏樹の災難

時は夏樹が屋上に戻ってきた二十数分ほどさかのぼる。

コンッコンコンコン

私は上着で胸元を押さえながら、保健室の扉をノックします。

「おう、入んなあゝ」

「し、失礼します」

漢気溢れる女性の声に促され、私は部屋の中に入ります。中に入ると今年から入った擁護教師の日高先生と保健委員の女子生徒が一人いました。日高先生はかなりスタイルがいい美人だから仮病で入り浸りそうな生徒ができそうだけど、新学期早々仮病を使って保健室に来ている生徒はいないようです。……男子生徒がなくて本当に良かったな。

「んあ？　じょーちゃん、どうしたい？　そんなずぶ濡れで」

「えっと、友達が間違えてジューズを零してしまつて」

「あらら、お前も災難だつたなあゝ。で、アタシは何をしたらいいんだ？」

「その、保健室なら予備の体操着があるだろうから貸して頂きたいなと」

「おう！　そんなことならお安い御用だ。体操着はアタシが出してやつから、じょーちゃんはそのカーテン閉めて、さっさとその服脱いどきな。いつまでも濡れた服着てつと風邪ひいちゃうぞ」

「ありがとうございます」

そう言われた私は手前のベツトスペースに移動し、カーテンを閉めた後濡れて肌に吸い付くシャツを脱ぎ始めました。カーテンの向こうでもカーテンを閉める音がする。先生が念のために窓のカーテンも閉めてくれているみたい。今年からの先生だからどんな先生か分からなかったけど、凄く気さくで優しくていい先生だな。

「っと、そうだ。じょーちゃんの名前教えてくんねえか？ 一応貸し出し簿に名前を書かんといかんのよ」

「あ、はい。神様の谷に夏の大樹と書いて神谷夏樹です」

その名前を聞いた日高教諭は貸し出し簿に当てようとしていたペンをピタリと止め、夏樹のほうに近づいていった。

「じょーちゃん、脱ぎ終わったらカーテンの隙間から脱いだブレザーとシャツを渡しな。クリーニングに出しといてやるよ」

「す、すみません。助かります。お代は後でお支払いしますので」

私は脱いだ服を日高先生に渡すと、カーテン越しでは見えないことを知りつつも頭を下げる。

「おうっ！ 子供がそんなこと気にすんなって。そのくらいアタシが出しといてやるよ。ちよっと、これクリーニングに仕上がり早めで出しといてくんねえか。釣りはバイト代ってことでいいし、伝票を扉にマグネットで止めてくれたら教室に帰ってていいかな」

そう言つて日高先生は保健委員の子に紙袋に入れた私の服を渡し、てお使いを頼みました。そして、ガチャリと響く施錠の音。

「い、いいえ。そんな申し訳ないです！ お代はきちんとお支払い

します」

「ハッハッハッ！ 噂通り真面目だねえ。ほい、服着る前にタオルでしっかり体拭いときな」

ベツトスペースのカーテンを開けて日高先生がタオルを差し出してくる。私は受け取ったタオルで体を拭きながら、今の話について日高先生に質問する。

「あ、あのー。噂ってどういうことでしょうか？」

「ここんとこ、職員室はアンタの噂で持ちきりだぜ？ Cクラスくらは楽に狙えたのに勉強するためにわざと最低クラスに行った前代未聞の生徒ってな。それに、船越先生が昨日のことについても朝から嬉しそうに話してたぜ。いやあ、話聞いたときから一度会ってみてえって思ってたんだよ」

「実際に会ってみてどうでしたか？ 全然個性が無くてつまらなかったでしょ？」

私が言うと日高先生はきよとした表情をする。

「個性がねえって、お前さん。本気で言ってるのか？」

「え、ええ。だから、キャラが濃すぎる友達の中でも個性が出るように他の人とは違う渾名を考えてがんばってますし、今だって目の前にいる先生の個性に喰われてますから」

「ちなみにどんな渾名をつけてんだ？」

「……坂本雄二だからもっちーとか、姫路瑞希だからひめひめとか、西村先生にしむーとか、仲のいい友達には苗字ベースで、先輩の新野すみれさんにはすみすみ先輩とか特別な友達は名前ベースでつけてます。あとは例外でムツリスケベな友達にむつつーとか」

「クッ、ハッハッハッ！ じょーちゃん、マジで面白いな。始めはただの行き過ぎた真面目ちゃんかと思っただが、ずいぶんと茶目っ気

もあるじゃねえか。あの西村先生を友達扱いする生徒なんてじょーちゃんくらいじゃねえか？」

「い、いえ！　べ、別に西村先生を軽んじているわけじゃなくて、去年１年間担任だったのにいつまでもよそよそしいのが嫌だったただけ」

「クツクツクツ、そんなに焦んなって。別に責めたわけじゃねえからよ。お前さん、面白いただけじゃなくて、他にも見所がありそうだな。よしっ、決めた！　じょーちゃんとアタシは今日から友達な」

「え、ええ！　急にどうしたんですか日高先生！？」

「つれねえなー？　夏樹っち。折角友達になっただから気軽に『さく』って呼んでくれや。あ、ちなみにさくってのはアタシの名前がサクヤだからだかな」

「うええ！？　いきなり特別な友達ですか？」

「なんだよ。アタシと特別な友達になるのは嫌なんか？」

「そ、そんなことはないですよ。いろんな人と友達になれるのは嬉しいですから。ただ、いきなりだから驚いただけ」

「おう。じゃあさっきも言ったように今日からアタシらは友達な！　よろしく頼むぜ」

「はい！　こちらこそよろしくお願いします」

「で、クリーニング代の代わりって訳じゃねえんだが、友達のよしみでちょっとお願い聞いてくんねえか？」

「私がお力になれることなら手伝いますよ。どの道クリーニング代は払うつもりですが」

「おお！　やつぱり夏樹っちは優しいねえ。お願いってのは体操着じゃなくてコイツを着てくんねえかってことなんだけど」

そう言つて、クローゼットから婦警服を取り出す日高先生。

ダッ！　バツ！（夏樹がシーツを体に巻きつけ、体操着を引っ掴んでドアに向かった音）

ガチャッ、ガチャガチャ（夏樹が開こうとしたドアが南京錠に阻まれる音）
パシッ、ズルズル（日高教諭が夏樹の腕を掴んでベットに引き戻す音）

「な、なんで私がコスプレしないといけないんですか！」

「だってよお、いつもコスプレしてくれてた造は違う高校に通ってるから最近寂しくって」

「寂しいなら話し相手でもゲームでも何でもいいですよね！」

「仲良くなつた女の子のコスプレが見たくなんのは常識だろ？」

「そんな常識は今まで聞いたことがないです！」

「それに、夏樹っちってウチの高校じゃ珍しいタイプの美人だろ？大抵、可愛い綺麗なが多くて。次点で色気ムンムンとかで夏樹っちみたいにかっこいいって美人は少なえじゃん。だから、夏樹っちみてえな美女のコスプレはかなり興味あんだよ。それに造はこういうカッコいいコスプレは似合わねえから着させたことねえし」

それを聞いた私は少し不機嫌になる。

「ん？ アタシなんか気に障ること言つたんか？」

「かっこいいって褒め言葉は好きじゃないんです。やっぱり女の子なんだからかっこいいよりは可愛いって言われたいです」

「夏樹っちは可愛い格好に興味あんのかい？」

「そ、そりゃあ。私だって女の子だから、似合うなら可愛い服も着てみたいですよ……」

「おお！ やっぱし、予想通り夏樹っちはキリッとした外見に反して、随分と可愛い性格してんのな。なおさら、コスプレさせたくないっちゃったぜ。安心しな、バッチリ可愛くしてやんよ」

「やつ、いいです。それに、明らかにその服装で可愛らしさは上がりませよね！？」

「分かってねえなあ。クール系の美少女が顔を赤らめて恥ずかしくってるのが最高に可愛いんじゃないか」

「そんなの一生分からなくていいです。いい加減に止めてください、日高先生！」

すると、日高先生は私をベットに座らせようとする手を止め、顔を俯かせる。

「やっぱ、夏樹っちはアタシと友達なんて嫌なんかあ。アタシが渾名で呼んでも夏樹っちは呼んでくんねえし」

それを見た私は罪悪感でいっぱいになり、とっさに謝罪するために口を開いた。そして、後にこんなに簡単に謝罪したことを死ぬほど後悔するのであった。

「そ、そんなことないです。さくが友達になってくれてとても嬉しいです。その、私にできることなら何でもするので機嫌を……はっ！」

そう、ついいつも通りの謝罪を行ってしまったのだ。

「そっかあ。おしっ！ 夏樹っちがコイツを着てくれたら許してやんよ。それと、次にまた日高先生っていったらコスプレ追加だかな」

そう言つて、日高先生は私をベットに倒し、スカートに手をかける。

「ちょ、何スカート下げてるんですか！」

「んあ？ だって、スカート下ろさなきゃ着替えさせられねえだろ。」

って、なんだあ、夏樹っちスパッツなんて穿いてんのか。ダメだぜ、折角スタイル良くて色っぱいんだからこんな色気のねえもん穿いてちや。っーわけでこんなもんは没収なあ」

「だ、ダメです！ それは脱がさせません！ 百歩譲ってコスプレは許したとしても、別に下着まで見せるわけじゃないんだからスパッツでいいじゃないですか！」

私は必死にスパッツを押さえ、日高先生が下ろせないように抵抗する。少なくとも腕力で押し負けるつもりはない。

「んー、随分強情だな。まあ、そんな風に照れてるのも可愛いんだが、そんな生意気な夏樹っちにはこうだ」

そう言うつと日高先生は片手で私のブラのホックをはずし、肩紐をずらしてくる。それに抵抗するために私は片手でホックを直し、もう片手で肩紐をずらされるのに抵抗するしかない。その間に日高先生は片手だけで器用にスパッツを脱がしてくる。

「ちよつ、ひだ、……さく！ なんでこんなに手馴れてるんですか！？」

「んあ？ いやー、ウチの造もメイド服とかフリフリにコスプレさせようとしたら抵抗するからな。この程度の抵抗にはもう慣れたんだよ」

「み、身内の女の子にもこんな風に強引にしてるんですか！」

「いやあ？ 造は男の娘だぜ」

「男の子になんて、もっとダメです！！」

ああ、顔も見たことのない造くん。もし会えたならあなたとはあつきー並みの友達になれそうです。結局、造くんに想いをはせて現実逃避をしている間に日高先生はスカートを穿き変えさせ、ブラに

手をかけていました。まずい、放心している場合じゃなかった。

「なんでブラまで脱がすんですか。盗撮カメラとかあるかもしれないんだから、これは絶対に脱がさせません！」

「安心しな。随分と巧妙に隠されてたが、んなモンは着任してすぐに全部外しといたかな。まったく、どこのスパイか知らんが、アタシの城を覗こうなんてふてえ野郎だぜ」

……いえ、スパイじゃなくて私の友人です。

「それでも、脱がす必要性はないですよね！？ 私はそこまでコスプレにこだわるつもりはないですよ！？」

「いや、アタシや造がすんならこだわるが、流石に初心者の夏樹っちにまで押しつけねえって。そうじゃなくてだな、濡れたブラのまんまじゃ着替えた意味がねえだろ？」

うつ、確かにそうです。日高先生の言葉に納得した私はブラ（…コスプレ用の水着？）を受け取って、日高先生に背を向けてそれをつけました。次に日高先生の方に振り返ったときが勝負の始まりです。乙女の尊厳にかけて、絶対に負けません（コスプレしません）！

結果、日高先生は最凶でした。あの子の私の抵抗も空しく、あっという間に婦警服に着替えさせられました。何とかポージングの要求は却下できたし、写真撮影だけは防ぎましたが、完全に私の負けです。今後、絶対にこの人に対してはうかつな事は口にしないことを固く誓いました。

着替えが終わった後に携帯を確認すると元凶あっきーからお茶を買ってきて

て欲しいというメールがあり、それを見た瞬間、私は携帯をぶち折りたくなりました。まあ、怒っても仕方なかったので、ひとまず怒りは納めましたかね。

結局、この格好で購買に行くのは恥ずかしいので、悪いとは思いましたが船越先生に頼んで買ってきてもらいました。その際、買い物リストに菓子パンを追加しておきましたよ。多分、ひめひめのお弁当を食べなかった人が私のお弁当を狙うでしょうからね。……本当は惣菜パンも欲しいんですが、流石に売り切れでしょうし。

船越先生から食料を受け取った私は周りに気を配り、覗きに備えながら、屋上を目指しました。この学校に入学して以来最大の羞恥です！

第十五・五話：半コラボ？——夏樹の災難（後書き）

はい！　今回は糖分摂取魔さんの作品「バカとのんきと召喚獣」より日高先生にゲスト出演していただきました。……ちゃんと糖分摂取魔さんにはメールで許可をとりましたよ？　糖分摂取魔さん、どうでしたか？　きちんと日高先生を再現できていたでしょうか？

今回の試みが糖分摂取魔さんのファンの方や良識的な方に怒られないかは不安ですが、コスプレ好きな保健の先生を作って日高先生に似てしまうくらいならお借りしようかなと思ひまして。糖分摂取魔さんのお許しがいただけるなら、今後の葉月ちゃんレベルの出演は考えています（それが無理でも後2、3話お貸しく下さい、どうしてもやりたいイベントがあるので）。

良識派の皆様、夏樹にコスプレさせようとしたらこのくらいパワフルなキャラでないといけないので、マナー違反かも知れませんが、糖分摂取魔さんの許可がいただけた場合の日高先生の出演には目を瞑ってください。日高先生がいれば夏樹のコスプレ回数は激増しますので。

今回のことで見放されないか不安ですが、今後もしよろしく願います。

十六話：これが本当のお弁当タイム（前書き）

糖分摂取魔様、まあ様、L y r i c a l様、柏崎せもぼぬめ様、感想ありがとうございます。

まだ、夏樹のお弁当は手付かずなので、今回も完全なオリジナル話です。

夏樹「随分執筆に時間かったね。オリジナルの方が筆が早いつて言ってたのに」

書き始めると早いんだけど、この時期は忙しくてね。それに、書いた後も原作を参考にしていない分どうしても「これでいいのか？」って不安になるから、投稿に尻込みするし。

夏樹「シユレ猫にそこまで高尚なものは求められてないと思うけど」

……………それは分かってるけど、なんか悔しいな。悔しいから、コスパレ回を増やしてやる。

それでは十六話始まります！

十六話：これが本当のお弁当タイム

私はお弁当を食べる前にむっつーのデジカメを没収し、私のコスプレ画像のデータを消した。むっつーは激しく抵抗したし、血の涙を流さんばかりに悔しがったが私の知ったこっちゃない。多分隠しカメラから写真をおこせるだろうけど、目の前にコスプレ写真が入ったカメラがあるのに放っておくのはいい気分じゃないですしね。

風呂敷をといているときにあっきーが物欲しそうな目で見てきた。
……このお弁当が欲しいんでしょうか？

「……あっきー、このお弁当が欲しいの？」

「う、うん。姫路さんのお弁当は雄二がほとんど食べちゃったし」

あっきーがそういうと、もっちーが射殺さんばかりにあっきーを睨み付ける。みんなの目が無ければ今すぐに殺戮が起こりそうになるほど、あっきーはもっちーに全部押し付けて何とかしたんだ。だったら、ほとんどの人がお昼抜きつてことか。予想通りだね。菓子パンを買っておいてよかったです。でも、あっきーはなあ。そもそも、このコスプレは元を辿ればあっきーが原因ですからね。そんな人に気を使うのもバカらしいです。

「私は菓子パンでいいから、私のお弁当はひめひめのお弁当で満腹にならなかった人たちでつまんでいいよ。ただし、あっきーはダメね」

「そ、そんなあー。夏樹のお弁当は美味しいから僕だって食べたいよ」

もっちーに処理させたということはあっきーは何も食べていない

ということですから、そんな状態でみんなが目の前で美味しそうにご飯を食べるといふのは辛いですね。でも、ここは心を鬼にして

「……一品だけなら可」

……まあ、あつきも悪気があったわけではないので、一口も食べさせないのは可哀想ですね。

「やはり、夏樹は友達には厳しくなりきれんようじゃのう」

「ああ、まったく。こんなバカを氣遣う必要はねえのにな」

今も辛そうにお茶を飲んでいる秀吉くんと大分回復しているもっちーがツツコンできますが、私だって怒るべきときは本気で怒りますよ。それはともかく、無理かも知れませんが、一応二人にも勧めておきます。倒れるようなお弁当だけじゃあ流石にねえ？

「秀吉くんともっちーも余裕があるなら食べてもいいよ」

「気持ち嬉しいんだが、流石にこれ以上は食えん」

「うーむ、わしは軽めのおかずを少し頂こうかのう」

全員に声をかけたところで、お弁当を開きます。

『おおっ！』

ひめひめのお弁当を開けたときのような歓声が上がります。

私のお弁当箱にはミニハンバーグやミートボール、シュウマイ、煮物など、和洋中さまざまなおかずと炊き込みご飯のおにぎりが入っていました。

「そ、それではいただきますね」

「ウチももらうわよ。坂本が欲張ったせいで全然食べてないもの」

「うっ！（お、美味しいです。この味に負けないためにちもつと工夫をしないと）」

「うう。（何よ。こんなお弁当作られたら作りにくくなるじゃない。今度はウチが作ってこようと思ったのに）」

ひめひめとしまつちがそれぞれ箸をのばし、二人とも一口食べた瞬間固まります。一体どうしたんだろう？ 少し落ち込んでいるようにも見えろけど。ひめつちが恐ろしい思考をしていそうで不安にはなりましたが、何か触れるべきではないと感じた私はあつきに問いかけます。

「あつきーはどれを食べるの？」

「うーん、カロリーの高いハンバーグとかも捨てがたいけど、やっぱり煮物かな。夏樹の一番の得意料理だし」

そう言っあつきーが煮物を口に運びます。私の一番の得意料理と聞いて女子2人だけでなく、男子3人も煮物に手をつけます。おなかいっぱいのもちーも興味を引かれたみたい。

「……………」

「……………美味」

「おっ、確かにこりや美味しいな」

「うむ、かなりの腕前じゃ」

女性陣は先ほど同じように難しい顔をしてますけど、男性陣はめいめいに褒めてくれます。そんななか、あつきーは難しい顔をして考え込んでいます。もしかして、お弁当のことに気付いたんでしょか。

「ねえ、夏樹。このお弁当、もしかしてはるかさんが作ったの？」
「なんでそう思ったの？」

「いや、始め見たときもいつものお弁当が和食ベースなのに洋食とかが多くて違和感があったんだよ。だって、夏樹は洋食とか中華系は練習中で自信が無いって言ってたじゃない。だから、料理上手なはるかさんが作ったんじゃないかって少し疑ったんだ。で、煮物を食べたらず夏樹の味と全然違うから確信したんだよ」

私が作ったんじゃないと聞いてひめひめとしまつちが少し明るくなります。そんなに私が作った料理が嫌なのかな？ それにしてもあつきーがしっかりと私の味を覚えていたとは驚きです。普段めつたに食事しないだけあって、たまに食べる食事はしっかり味わってるんですね。

「へー、煮物で確信したんだ。よく分かったね」

「そりゃ分かるよ。だって、夏樹は和食に限って言えばはるかさんよりずっと上手なもの」

あつ、2人がまた落ち込みだした。……一体何なのよ。

「でも、夏樹がはるかさんに頼むなんて珍しいね？」

「実は昨日のうちに料理は用意したんだけど、あいつが私の部屋の目覚まし勝手に止めてて、起きたときには詰める時間さえなかったんだよ。まったく、勝手に妹の部屋に入るなっつての」

「ははは、はるかさんらしいね」

「そのせいで、あいつが勝手に詰めた分をどうすることもできなくて、あいつが渡したお弁当をそのまま持ってきたの。おにぎりだけは昨日私が準備した炊き込みご飯だけど、それ以外ははるかさんが勝手に作って勝手につめたものだよ」

「きっと、昨日の戦争で疲れてる夏樹を気遣ったんだよ」

「いや、あいつはさっさと和食以外も作れるようにならないと女子として失格だってバカにしたいんだよ」

「そんなことないと思うけど」

あつきーがはるかのことを擁護しますが、あつきーはあいつの本性を知らないからそんな風に言えるんだよ。私がそんな風に不満顔をしていると、私の和食はもっと美味しいと聞いたみんなが競っておにぎりに手を伸ばします。

「ちょっと腹が苦しいが、一つもらうぞ。（むぐむぐ）マジだ！

煮物とは比べ物にならねえくらいうめえ！」

「ほう、どれどれ。むっ！ これは本当に絶品じゃ！」

「……………驚愕の美味さ！」

「……………（ずーん）」

「夏樹は和食に関しては天才的だもんね」

「……………あつきー、やめて。私、天才って言葉大嫌いなんだ。だって、最大の侮辱だもの」

「ご、ごめん、夏樹。うっかりしてた。本当にゴメン！」

男子3人が私のご飯を褒めてくれたのはとっても嬉しかったけど、あつきーの天才という評価に少しイライラしてきて、菓子パンを食べるペースを速めます。最初は私の「天才が嫌い」という発言に怪訝な顔をしていたみんながそのことも忘れて驚きの表情で見えてきますが、一体なんなんですかね？

「一体どうしたのさ？」

「いや、夏樹。もう8個目だろ？ よく入るな」

「このくらいなんでもないよ」

「弁当の話は本当だったんじゃない。それでその体型とは驚きじゃの

う」

「うつ、もしかしてみんな大食いの女の子とか嫌い？」

「いや？ いいんじゃないか？」

「うむ、健康的で微笑ましいぞい」

もしかしたら、秀吉くんが引いてるんじゃないかと不安になったけど、あまり気にしていないようでもよかった。でも、やっぱりもう少し食べる量を減らした方が可愛いのかな？ 私がそんなことを考えているとひめひめが勢いよくまくしたててきます。

「夏樹ちゃん、ずるいです！ そんなに食べてるのになんでスマー
トなんですか。」

「え？ むしろ、お昼にこのくらいしつかりと食べないとどんどん
体重が落ちていくんだけど……」

「あんまりです！ 夏樹ちゃんばかりずるすぎます！」

「ウチもそのくらい食べれば胸にいくのかしら」

この2人さつきからおかしいよ。不安になった私はあつきーに視線で助けを求めます。

「あはは、姫路さんも島田さんも落ち着いてよ。夏樹って小さい頃
おばあちゃんに育てられたせいで量の多い食事に慣れてるんだよ。
そのうえ、楽器の演奏が趣味だから、毎日欠かさず運動してて一日
の消費カロリーが多いしね」

「ん？ 夏樹がばあさんに育てられたってのは初めて聞いたぞ」

「言ってなかったっけ？ 私のお父さんは音楽家で、お母さんは画
家でさ。2人とも海外を中心に活動してほとんど日本にいないん
だよ。それで、私は小さいころから田舎のおじいちゃんのところ
で育てられたんだ」

「なんと！ 夏樹はこの育ちではなかったのか」

「うん、中学校に入る少し前におばあちゃんが死んじゃったから、その時にもうこっちで一人暮らししてたはるかと一緒に住むことにしたんだよ」

「なるほどな、通りでそこまで品行方正になるわけだ」

「まあ、特においしいちゃんが礼儀に厳しい人だったから」

「その割にははるかさんは自由に生きてるよね」

「あ、あのー。さっきから気になっていたんですが、吉井君は夏樹ちゃんの家族と面識あるんですか」

「そうね。さっきからはるかについて随分詳しくそうだし」

「一応中学からの親友だし、何度も会ったことはあるよ」

「っていうか、一緒にお風呂入ったこともあるんだから結構仲いいんじゃない？」

「そんな！ 吉井君がそこまで進んでいたなんて！」

「吉井！ そんなの不潔よ！」

「うええ！ 2人ともどうしたのさ」

「意外じゃのう。てつきり、夏樹が一番近いと思っておったんじやが」

「船越先生に振られて荒れてる須川に教えておくか。面白いモンが見れそうだ」

「……………明久、風呂での様子を詳しく」

どうしてあつきーがはるかとお風呂に入っただけでこんな風になったんだろう。あつきーのほうを見てもわけが分からないといった顔をしている。…………あつ、もしかして。

「ねえ、みんな。はるかかってどんな人を想像してる？」

「む？ お主の姉上ではないのかのう？」

「ち、ちがうよ！ はるかさんは夏樹のお兄さんだよ！」

『はああ！？』

やっぱり、みんなはるかの性別を勘違いしてたんだ。通りで話がかみ合わないわけだよ。

「ね、ねえ。普通はるかつて女の名前よね？」

「だ、だと思えますけど」

「い、いや。紛らわしいのは確かだが、遙遠よっえんの遙とかなら十分男の名前だ」

「兄貴は春の華って書いて春華だよ」

「……………それは明らかに女の名前」

「なるほど、こいつのネーミングセンスの無さは親譲りか」

「ちよつと！？　いくら私でも本名はしっかりと性別にあった文字を選ぶからね？　あんな人たちと一緒にしないで！」

あつきー以外の全員が納得したみたいなお顔をしている。実際、あつきーは以前にそう確信したから改めて納得するまでもないだけだし、この場にいる全員が私にネーミングセンスが無いと思っている。この評価はなんとしてでも否定しないと。

その後、必死に説明したけど、誰一人として私の言い分を信じてくれなかった。全然そんなことないのに。酷いよ、みんな。

十六話：これが本当のお弁当タイム（後書き）

書いてて普段より会話分の比率が多くて不安でしたが、何とか書き上げました。

夏樹「詳しく書いた地の文くらいしか長所が無いのに？」

うつ！ 仕方ないじゃない。これ以上地の文入れると逆におかしくなるし。

夏樹「ふーん。シュレ猫がそれでいいならいいけどさ」

今回は食事中の会話として夏樹の家族についてちらつと触れてみました。やっぱり家族構成はさりげなく出すべきだと思って。さり気なかったかは不安ですが。次の更新はBクラスへの宣戦布告になる予定です。

では、これからよろしくお願いします。

第十七話：最強クラスを討ち取るために（前書き）

柏崎せもぼぬめ様、まあ様、L y r i c a l様、蒼 龍一様、マロ様、アス力様、感想ありがとうございます。

前回の更新から大分あきましたがやっと更新です。

夏樹「今回は時間かかったね」

やっぱりこの時期はいろいろ忙しくなるからね。

夏樹「原作を参考にしているから余計にね」

うん、それでは予告通りBクラスへの宣戦布告までをお送りします。

夏樹「第十七話、始まります」

第十七話：最強クラスを討ち取るために

「まあ、夏樹のネーミングセンスはどうでもいい。それよりも明日のBクラス戦についてだ」

もっちーがそう言って話を切り替えます。でも、私にとっては物凄くどうでもよくないことなただけ。くう、絶対後で撤回させてやるからな。

「あれ？ 坂本。次の目標はBクラスなの？」

「ああ。そうだ」

しまっちの問いかけにもっちーがなんでもないように答えます。まあ、私は既にもっちーから聞いていたから驚きはないんですけどね。ですが、他のみんなは初めて聞く情報なので困惑しています。

「どうしてBクラスなの？ 目標はAクラスなんでしょう？」

「正直に言おう」

あっきーの問いかけに対してもっちーが神妙な面持ちになります。

「どんな戦力でも、うちの戦力じゃAクラスには勝てやしない」

「えっ？ 夏樹の召喚獣を使えばかなりの人数を倒せるでしょ？」

そうでなくても、霧島さんと近衛部隊の召喚獣を僕たち並の点数に削れるだろうし」

「そうね。夏樹の召喚獣なら相手がどんなに立派な装備でも関係ないし」

あっきーがもっちーの意見に反論し、しまっちが同調します。確

かに、私の召喚獣は防御力を無視した攻撃をフィールド全体に行うことができますからそれなりの武器にはなるでしょう。頼ってくれるのは嬉しいけど、もう少し考えて発言して欲しかった。もっちゃんも同じように呆れたような顔をしています。

「あのなあ、明久。お前は夏樹の召喚獣を過大評価しすぎだ。夏樹の召喚獣は攻撃が強力すぎて弱点が霞むが、本来はデメリットだらけで試召戦争に向かない召喚獣なんだよ」

「なんでさ。あんな反則じみた攻撃があるのに」

「はあ。お前でも分かるように説明してやる。まず1つめに攻撃の燃費が悪いことだ」

もっちゃんが発言と同時に指を1本立てた。

「夏樹の召喚獣は曲による攻撃時に倍の点数を消費する。つまり、相手がAクラスともなれば1回の戦闘でその教科が戦死寸前になるということだ」

化学の時の私がいい例ですね。みんながうなずくのを確認しても、うちーがもう1本指を立てます。

「2つめに曲による攻撃しかできないこと。相手が少ないときには点数任せで倒した方が効率がいいが、コイツは相手がどんなに弱くても、どんなに少なくても点数を消費して倒さなけりゃいけない」
「そっか、例えるならどんな状況でも極大魔法しか使えないってことだね」

「まあ、使るのが魔力じゃなくて体力だから余計に厄介だが、あなたが間違いないな」

「そして、3つめが味方を巻き込むことだ。そうなると夏樹は必然的に一人で演奏をしながら多人数による攻撃をよけ続けなければな

らない。なんたつて、一発でも食らうとその点数のパラメーターに変わっちまうからな」

「え、でも、僕の召喚獣には効かないんだし、Dクラス戦みたい僕が組めば――」

「明久。お前はAクラス5、6人に囲まれても夏樹を守り続けられるのか？」

「僕だつてそのくらい」

「無理じゃろうな。ましてや、近衛部隊相手なら一瞬で終わる光景が容易に想像できるぞい」

「うん。私もあつきーにそこまでは求めてないよ」

「夏樹！？」

あつきーが騒いでいますが、私は戦略に私情は挟みませんから。もっちーも私同様あつきーを無視して説明を続けます。

「最後に、これが最も重要なんだが夏樹がAクラスに対抗できる教科が少ない。基本的には英語くらいしかまともな武器が無い状態だからな」

「あれ？ 坂本。夏樹は数学も得意なんじゃないの？ Dクラス戦ではそれで何人も倒したんだし」

「いや。コイツの数学は点数のバラつきがでかい。実際、振り分け試験のときは200点台前半だったしな。普通の戦闘ならまだしも夏樹の能力を使うことを考えたらその程度の点数は何の役にも立たん」

男子達は私の成績状況を知っているだけあつて、もっちーの言葉に頷いています。

「確かにそれじゃあ厳しいかも知れませんが」

「それじゃ、ウチらの最終目標はBクラスに変更ってこと？」

しまつちがもつちーに尋ねています。BクラスだってAクラスほどではないけどいい設備なのでみんなも同じように考えているみたいです。まあ、私も同じことを考えましたしね。でも、もつちーはAクラスに特殊な方法で挑むって言ってたけど。

「いいや、そんなことは無い。Aクラスをやる」

「雄二、さっきと言っていることが違うじゃないか」

「クラス単位では勝てないと思う。だから一騎打ちに持ち込むつもりだ」

なるほど、そうすればクラス全体の戦力が劣っていても少しは勝機がありますね。でも、一体どうやって？

「一騎打ちに？ どうやって？」

あつきーも私と同じ疑問を抱いたようです。

「Bクラスを使う」

「明久。試召戦争で下位クラスが負けた場合の設備はどうなるか知っているな？」

「え？ も、もちろん！」

この野郎。ウソつきましたね。表情でバレバレですよ。すると、ひめひめがあつきーに耳打ちします。うん、やっぱりひめひめは優しいね。

「設備のランクを落とされるんだよ」

「……まあいい。つまり、BクラスならCクラスの設備に落とされるわけだ」

「そうだね。常識だね」

どの口がそんなことを言うのでしょうか？ もっちーも心なしかいラついています。

「では、上位クラスが負けた場合は？」

「悔しい」

「ムツツリーニ、ペン「もっちー？」チはいらないな。拳骨で十分だ」

「全く。昨日も言ったけど友達に拷問なんてダメだからね？」

もっちーは本当に反省しているのかな？

「相手クラスと設備が入れ替えられちゃうんですよ」

ひめひめがフォローに入ります。あっきーももっとしっかりしないと。

「つまり、うちに負けたクラスは最低の設備と入れ替えられるわけだね」

「ああ、そのシステムを利用して、交渉する」

「交渉、ですか」

「Bクラスをやったら、設備を入れ替えない代わりにAクラスへと攻め込むよう交渉する。設備を入れ替えたならFクラスだが、Aクラスに負けるだけならCクラスの設備で済むからな。まず上手くいくだろう」

「ふんふん。それで？」

「それをネタに交渉する。『Bクラスとの勝負直後に攻め込むぞ』といった具合にな」

「なるほどねー」

確かにいい案だと思うし、交渉次第では高確率で一騎打ちに持ち込めるかもしれない。でも、それ以前に気になることがある。

「もっちー。仮に一騎打ちに持ち込めたとしても勝てる人がいるの？ ひめひめでも五割を切るだろうし、知っての通り私の数学を頼られても困るよ」

「そのへんに関しては考えがある。心配するな」

何か不安は残りますけど、ここは代表であるもっちーを信じましょう。

「とにかくBクラスをやるぞ。細かいことはその後に教えてやる」

「ふーん。勝算があるならいいけど」

あつきーも一応納得したようです。

「で、明久。今日のテストが終わったなら、Bクラスに行って宣戦布告して来い」

この男はまたですか。

「断る。雄二が行けばいいじゃないか」

「やれやれ。それならジャンケンで決めないか」

「ジャンケン？」

まあ、それなら公平ですかね？ もっちーがなにか企んでなきやいいですけど。

「よし、負けたほうが行く、で良いな？」

もっちーの言葉にあっきーが頷きます。

「ただのジャンケンでもつまらないし、心理戦ありでいこう」

心理戦？ それって、次に出す手を言って混乱させるってやつで
すかね？ あっきーも笑顔になっていますし、それでいいみたいで
すね。

「わかった。それなら、僕はグーを出すよ」

「そうか。それなら俺は——お前がグーを出さなかったらブチこ
もっちー？」……のめす」

「行くぞ、ジャンケン」

「わああっ！」

パー（もっちー） グー（あっきー）

一応もっちーにブレーキはかけたんですけど、それでも混乱して
しまったみたいですね。

その後、あっきーがかたくなにBクラスに行くのを拒んでいます。
簡単に騙されないように成長したみたいで本当によかったです。友
達の成長が我がことのように嬉しいとは驚きですよ。

「それなら今度こそ大丈夫だ。保証する」

そんなあっきーをもっちーがまっすぐな目で見ています。

「なぜなら、Bクラスは美少年好きが多いらしいからな」

「そっか。それなら確かに大丈夫だねっ」

あつきーは本気でもっちーの言葉を信じている見たいです。えっ！？ 折角成長したと思ったのに、こんなに簡単に騙されないでよ。返して！ さっきの私の感動を返して！

「でも、お前不細工だしな……」

もっちーのため息にあつきーが憤慨します。だから、あつきー。乗せられてるってば！

「失礼な！ 365度どこからどう見ても美少年じゃないか！」

「5度多いぞ」

「実質5度じゃな」

「二人なんて嫌いだっ」

そう言っであつきーは屋上から逃げ出しました。……最後のテストは早めに切り上げようかなあ。

——宣戦布告後、明久Side——

「……言い訳を聞こうか」

僕はBクラス生徒の暴行で千切れかけた袖を手で押さえながら雄二に詰め寄った。くう、今回は夏樹が助けに来てくれなかったし、散々だよ。

「予想通りだ」

「くきいー！ 殺す！ 殺し切」はい、はい、怪我人が無理しない

の「ぐえっ」

雄二に殴りかかるうとしたら、後ろから襟を掴まれた。声からすると夏樹だろうけど、止めるにしてももう少し方法を考えて欲しかった。おかげで首が絞まったじゃないか。

抗議をしようと振り向くと、予想通り夏樹がそこにいた。ただし、さつきとは違ってナース服で。本日2回目だけど、一体君に何があったんだい？ 心なしかイライラしてるし、さつき、襟を掴んできたのはそのせいなのかな？

「夏樹その服は「ほらあ、さつきと座る。治療ができないでしょ」ああ、うん」

夏樹に促されて畳に胡坐をかく。夏樹は僕の正面に座ると、手に持っていた救急箱を隣に置いて、中から消毒薬と湿布、包帯を取り出した。コスプレに関してはもう諦めたのか昼食中のような不機嫌さは少ない。

そのせいか表情が穏やかで、なんていうか、その、可愛い。夏樹に恋愛感情を持たない僕でさえ顔が赤くなるほどに可愛いのだから、他のみんなは陥落寸前だった。そんな夏樹の様子を見ると、夏樹は僕との間の床に消毒液を思いっきり噴霧した。

そして、両目を押さえて転がる友人。ムツツリーニ、夏樹がそういう気配に敏感なのは1年のときに分かっているだろうに。

「まったく、先生についてきてもらうとか、秀吉くんあたりに私と同じことをしてもらうとかすればこんなことにならなかったでしょ」

治療しながら、夏樹が呆れたように話しかけてくる。それに対して、反論しなくなった。

「そんなに言うなら夏樹が昨日みたいにしてくれれば」

「なあに？ あつきーは一生私に付いてて欲しいの？」

「そ、そういうわけじゃないけど」

「だったら私が手を貸しすぎるとあつきーが成長できないじゃない。1回Dクラスで経験したんだから、後のことは自分の責任だよ」

「うう、でもそのせいでこんなに怪我をしたんだし」

「私は子供の料理は包丁で手を切ってなんぼだと思ってるから。子供はそうやって失敗して、怪我をして危険なことを覚えていくんだからね。大きな子供にも同じ方法をとらなきゃ」

そう言って、夏樹は優しく笑う。って、僕は子供扱いされてるの？ まあ、それは置いておいて、夏樹は本当にしつかりしてるね。

これは将来いいお母さんになりそうだ。手当てが終わった後は、救急箱を保健室に返しに行く夏樹を見送って帰路に着いた。

そういえば、夏樹に手当てもらっている間、姫路さんが周りを警戒しながら見回していたけど、何だったんだろう？ それ以上見ているのがよくない気がして夏樹と世間話することで視界に入れないようにしたけど。……もしかして、昨日の手紙を置く場所を探していたのかな？

余談だが、夏樹のコスプレで集中力が低下することを恐れた雄二の命令でBクラス戦開始時の総合得点が振り分け試験の点数を大幅に上げたものは、ムツツリ商会の夏樹の写真（婦警エディション）が割引されることとなり、数人の生徒が点数を伸ばしたらしい。逆に多くのものは午前中の試験にもっと力を入れなかったことを死ぬ

ほど後悔したとか。

第十七話：最強クラスを討ち取るために（後書き）

はい！ 夏樹のコスプレ第二段です。

夏樹「ちよつと、酷いよ。今までの仕返しでこんなことするなんて」

勘違いするな。このナースコスは糖分摂取魔さんに日高先生の貸し出し依頼をする前から計画していたわ。仕返しはまた別の機会だよ。

夏樹「これで十分でしょう！」

まあ、夏樹のコスプレは置いておいて、今回は夏樹の召喚獣の冷静な分析を入れてみました。実際、夏樹の能力は元々戦争用の能力じゃないから強く見えるだけで、欠点だらけですからね。

あつ、それとラストでムツツリー二に対して行った消毒液目潰しは始めはお昼に醤油でやろうと思ったけど、夏樹のキャラじゃないので止めました。

夏樹「そうそう、食べ物を粗末にしちゃいけないからね。おじいちゃんが生きてたら思いっきり殴られるよ」

夏樹の祖父は本当に厳しい人なんです。

夏樹「次回は婦警服のとき同様に、5話扱いで、保健室で何があったかを書くみたいですけど、そんなの見たい人いるのかなあ？」

これからよろしく願います。

第十七・五話：夏樹の油断＋アンケート（前書き）

まあ様、蒼 龍一樣、高坂夕弥様、糖分摂取魔様、前回の話への感想ありがとうございます。そして、十七話まで読んでくださったって皆さん、更新が遅くなって申し訳ありませんでした。

夏樹「しかも、お待たせした久しぶりの更新が番外編のようなものというのは一登場人物として大変心苦しいです」

ぐ、ぐふっ。ま、まあ、それは自分でも自覚しているので本編の続きは近日中に更新します。実際、次の更新分はできていて今はその次を半分程度書き上げていますので。

夏樹「あまり良い出来とはいえない今回の話ですが、広いお心で読んでください」

では、第十七・五話始まりです。

第十七・五話：夏樹の油断＋アンケート

コンコンコン

「さくー、入るよー」

私は保健室の扉をノックしたのですが、いつまで待っても返事が聞こえてこないで、マナー違反だとは思いましたが勝手にドアを開けて保健室に入りました。さくならこの位じゃあ怒らないだろうし、むしろいつまでも扉の前で待っていた方が怒る気がします。

保健室の中を見回してもさくの姿はありませんでした。救急箱を借りに来たんですが、何かの用事で出かけてるのでしょうか？ まあ、鍵をかけていないということはそれほど遅くはなりませんよね。少しここで待っていきましょう。

そして、手持ち無沙汰な私が外の景色を見ようとすると、窓ガラスが私の姿を映していることに気がつきました。自分で言うのはどうかと思いますが、さくの見立ては正しく、確かにこの格好は似合っている気がします。そこで私はふと昼休みの出来事を思い出しました。

（「非常に似合っておるし、魅力的だとは思うんじやが、——」）

その言葉を思い出して少し顔が熱くなります。無理やり着せられたから思いつきり抵抗したけど、ねえさんの影響で婦警さんって結構憧れていたんですよ。ちょっと気分のよくなった私は少しだけ遊んでみたくなりました。

右手を握りこんだ後、人差し指と親指だけを伸ばし、いわゆる昔のチョキの形を作ります。そして、左手で右手首を掴み、その手を正面に持つてくると、

「バンッ！」 ガラッ

銃撃音を口で出して窓に写った自分に拳銃を撃つ真似をします。すると、それと同時に保健室の扉が開き、窓ガラスの私の背後に日高先生の姿が。恥ずかしさのあまり、私の顔がこれ以上ないくらい真っ赤に染まります。そして、私は油の切れた機械のようなギギギという擬音がなりそうなきこちなさで後ろを振り向きます。

「さ、さく……」

「……………」

どうしたんでしょうか？ さくは驚いた表情のまま微動だにしないのですが。

「えっと、さく、だいじょうぶ？」

「……かい」

「はい？」

「夏樹っち、今のもう一回！ 今度はしっかりと写真に撮るから！」
「い、嫌に決まってるでしょう！ 今の見られただけでも恥ずかしいのに、その上写真なんて冗談じゃないです！」

まったく、この人は一体何を考えているんでしょうか？ コスプレでさえ嫌々だったんだからポーピングなんてするはずがないってわかんと思うんですが。

私が断るとさくは目に見えて落ち込んだ風を装いますが、口は

明らかに笑みを浮かべています。何を企んでいるんでしょうか。

「仕方がない。すみれっち達にどうすれば夏樹っちがポーズをとってくれるか相談するしかねーな」

……はい？ なぜそこですみすみ先輩の名前が？

「……さく、なんでそんなに親しげにすみすみ先輩の名前を挙げるんですか？」

「んー？ すみれっちとはついさっきから友達だかな。夏樹っちの話聞いて予想はしてたけど、やっぱり面白い奴だったわ」

「はやっ！ なんでそんなに急いでコンタクトとってるんですか！？」

「はっはっは、ちょっとやりたい企画があつてその相談にな」

つく、まずいです。このまま放っておいたらすみすみ先輩にバレて、あの人にまでからかわれることに。……背に腹は変えられませんね。

「分かりました。……でも、写真を他の人に見せたら怒りますからね」

その後、私は何種類かのポーズを要求されて、数十枚の写真を撮り込みで撮られました。落ち込む私とは対照的なさくの嬉しそうな顔が非常に恨めしかったです。

「つと、夏樹っちは制服取りに来たんだよな。まだ終わってねえみてえだからちよつとだけ待っててくれや」

「あつ、それもあるけど実は救急箱を貸してほしくて」

「んあ？ 救急箱？ 夏樹っち、怪我でもしたんか？」

「たぶん親友がボロボロで宣戦布告から帰ってくるだろうからその手当て用に」

「あいよ、じゃあこれな」

棚から救急箱を取り出して来たさく。私が受け取るうとするとさくは急に救急箱を持つ手を上に上げ、私の手は空を切る。

「……さく？」

「なあ、夏樹っち。やっぱ救急箱といえバナース服だと思わねえか？」

「いいえ、全く」

その言葉とともに私の手が再び救急箱を追う。しかし、その動きを読んでいたようでまたしても救急箱は私の手から逃れる。

迂闊！ この人に借りを作ればどうなるのかは分かっていたはずなのに。

「あたしはさあ、夏樹っちみたいな美少女が救急箱持つならナース服着てこそだと思っわけよ」

「想像の中でご自由に着せてください」

「つれねえなあ、いいじゃんかよー。本当は救急箱の貸し出しは課外活動限定で、職員室で許可取んなきゃなんねえのを快く貸し出すんだからそんなくらい見せてくれても」

「じゃあ、怪我人ここに連れてくるんで大丈夫です。それでは、後ほど」

「ちえー。だったら、メールで友達とコスプレ談話で盛り上がるからいいよーだ」

「楽しんでくださいね」

そういつて保健室を出ようとすると、携帯から着信音が流れる。

一体誰が送ってきたのかと確認すると（半ば無理やり登録させられた）日高サクヤの文字。まずい、とてつもなく嫌な予感がする。恐る恐るメールを確認すると、添付ファイルが一つ。そこには（指示されて）ノリノリ（を装った状態）でポージングをとる婦警姿の私。

「ありや、すみれっちに送るはずが間違つて夏樹っちに送っちまったよ」

「さくー、ナース服のコスプレしてあげるから、代わりにお願いを一つ聞いてもらつていい？」

「水臭いこと言うなよ。あたしと夏樹っちの仲じゃねえか」

「じゃあ、私のコスプレ写真を撮るのは許可しますが、他の人には絶対に見せないでくださいね」

てつきり文句が来るかと思つたが、さくは一体何を言っているのか分からないといった表情で見つめてきた。

「そんなの言われるまでもねえよ。こんなかわいい夏樹っちの写真なんだからあたしが独占するに決まつてるだろ。そもそも肖像権があんだから夏樹っちに無断で人に見せたりはしねえって」

「よかった、本当に良かった。さくがその辺はまじめな人で、でもすみすみ先輩あたりには見せるって言いそうだと思つただけだ」

「確かに見せてやりてえけど、夏樹っち嫌がるだろ？ アタシは友達嫌がることをやるような人でなしじゃねえよ」

その言葉を聞いて私はとても驚きました。そして、さくもその驚きが分かつたんでしょう。

「んだよ？」

「あんなに無理やりコスプレさせた人とは思えないほど常識人で驚

「いる」

「ひでえなー、夏樹っちいー」

「でも、さくと友達になれて本当によかったって思ったよ」

「そりゃ、アタシの台詞だよ」

「ああー、でもむっつーが何枚かは写真撮ってて後で売るんだろうな」

友人の行動を思い出して思わずつぶやきます。その時、さく目が鋭く光った……ような気がしました。

そして、私はナース服に着替えさせられ、その後は撮影会の始まりとなりました。ただでさえ恥ずかしい格好なのに恥ずかしすぎるポーズをしてきて、常識人認定した後なのに本当に教師なのか疑いましたが、これに関しては私は悪くないはず。

余談ですが、その次の日にあつきー、もっちー、秀吉君以外の生徒がひどく落ち込んでいたのは一体なんだったのでしょうか。「畜生、あんなにがんばったのに写真が無いなんて」とか、「……………俺の商品の隠し場所を正確に把握するとは何者?」といった言葉が聞こえたのですが、何のことか分かりませんね。もう一度言います。私には何のことかさっぱり分かりません! まあ、それはそれとして、今度さくに差し入れとしてお菓子を作って行きましょうかね。

——アンケート——

今回は番外編のようなもので夏樹とサクヤさんしか出てこないのので、人によっては無駄な話だったと思われるかも知れませんがね。

夏樹「実際、私に『パンツ』をやらせたいがために書いた話でしょう?。」

……実際そうなんですよね。なので、ついでにこの更新をアンケートとしても使おうと思いました。

夏樹「ふむふむ。まあ、番外編だけよりはずっとましなんじゃない?。」

今回みなさんに考えていただきたいのはこの小説における小山さんと根本の扱いです。

夏樹「この二人って作品によつてはすごい扱いされるよね。小物化とか最低な性格に変えるとか。まあ、小山さんは最近結構好感の持てる人になつてゐる作品があるけど」

作者的にバカテス二次で二番目位に割り食つてゐるキャラ達だと思つよ。シュレ猫的に一番は優子さん。

夏樹「部活の努力を認めなかったり、異常に性格が悪かったり、異様に惚れっぽかったり?。」

そんな感じ。まあ、Aクラスメンバーだけあつて、この小説での優子さんの動かし方は決まつてゐるから、アンケートは小山さんと根本についてだね。

夏樹「ふーん」

ふーんって、このアンケートはお前にも間接的に大きな影響を与え

るんだけど……。まあ、ではアンケートです。

内容

「夏樹の性格上すでに罰を受けた根本が召喚大会で小山さんと別れる事態になったのはやりすぎ。よって、この二人に（別々に）アプローチをかけるのですが、そのアプローチから二人はどう変化するか？」

・根本編

？いくら夏樹でもあんな卑怯者を改心させるのは無理。原作どおりの小悪党。

？小山さんとの復縁がどうなるかは別として、夏樹の優しさで改心、友達化？

？夏樹の優しさが眩しすぎて夏樹に惚れる（成後はなし。秀吉をライバル視で物語の適度なスパイスに？）。

・小山さん編

基本的に？から？は？に近づくほど出番が増える可能性が高いです。
？・「バカ共はさつさと倒すだけよ」という厳し目の原作どおりルート。

？・「まっ、まあ、話くらいなら聞いてあげようかな」な普通の友達ルート。

？・「この子、バカ共の友達にしておくのはもったいないじゃない」な親友ルート。

？・（大穴＆ネタ）読者さん「おいおい、なんのためのGLタグだ？」な百合ルート。（ただし、原作秀吉レベルのグレイゾーン程度）

アンケートは感想欄でも活動報告に作るアンケートボックスでもどちらでもいいです。特に急ぎのアンケートではないので、期限とし

ては2巻開始前を予定しています。一応、そのくらいになったら日付をあとがきなどで告知する予定です。みなさん、お手数だとは思いますが、ぜひともご協力ください。

第十七・五話：夏樹の油断＋アンケート（後書き）

今回も糖分摂取魔さんの作品から日高サクヤさんに出張ってもらいました。

夏樹「糖分摂取魔さん、さくの台詞や行動、性格に違和感を感じたら気軽に指摘してくださいね。シュレ猫が全力で修正しますから」

今回はいかにして夏樹がナース服を着たかの話です。

夏樹「ものすごく恥ずかしいんだけど、シュレ猫の文章的な意味でまったく下地がない完全オリジナルはどうしても文章構成が甘くなつて不安です。あつ、ちなみにオチで日高先生が回収したのは夏樹の構図的にアウトの物だけ（＝本日の夏樹の写真全て）です。」

夏樹「さくの行動力って凄いんだね」

前書きで書いたとおり、次の話は書きあがっているので今日の日付の変わり目からこの時間くらいまでの間か明日には挙げる予定です。アンケートの方もできればご協力ください。

第十八話：開戦！Bクラス（前書き）

アンケートにご協力いただいた皆さん、ありがとうございます。場所柄というのはおかしいですが、小山さんに関しては感想では？が、アンケートボックスでは？が多いという特性がありますね。まあ、今後どうなるかは分かりませんが。

夏樹「今のところは根本くんは？が小山さんは？が優勢だね」

今後アンケートがどう動くか楽しみです。

夏樹「それではBクラス戦開始となる十八話始まります」

第十八話：開戦！Bクラス

「さて、皆、総合科目テストご苦労だった」

教壇に立ったもつちーが机に手を置いて皆の方を向いています。

今日も午前中はテストを行い、ついさっき全科目が終了してお昼を食べたところです。今日は春^{バカ}華がいつになく大人しかったから気分も最高潮です。流石に昨日ねえさんにしばかれたから反省したんでしょうね。いやあー、凄かったです。ボディーブローで頭を下げさせて、シャイニングウイザード。頬の痛みで動きが鈍ったところにタワーブリッジ。流石にかわいそうに思いましたもん。

ちなみにあつきーには今日のお弁当を少し分けてあげたので途中でスタミナが切れるということはまず無いでしょう。

「午後はBクラスとの試召戦争に突入する予定だが、殺^やる気は充分か？」

『おおーっ！』

うーん、一向に下がらないモチベーション。これがうちのクラス最大にして唯一の武器ですね。

「今回の戦闘は敵を教室に押し込むことが重要になる。その為、開戦直後の渡り廊下戦は絶対に負けるわけにはいかない」

『おおーっ！』

「そこで、前線部隊は姫路瑞希に指揮を取ってもらい、数学班の小隊長を島田美波、英語班の小隊長を神谷夏樹、物理班の小隊長を須川亮にまかせる。姫路は全体を見ながら不利な部隊のサポートを頼

む。他の3人は姫路が他の教科のサポートに集中しているときや、近くにいないときは自分の判断で動いてできるだけ敵を削れ！」

「が、頑張ります」

「任せなさい！」

「了解！」

「わ、分かった」

私を含め四者四様に答えます。

「つと、坂本。数学班の小隊長は島田じゃなくて神谷さんの方がいいんじゃないか？　今回も数学の女帝の力で蹴散らしてもらおうぜ」

誰かがもっちーに進言しています。だから、『数学の女帝』はやめなさいって言ってるのに。まあ、それはそれとしてこの提案は本当に困りものです。うう、どうしましょう。

私の内心の困惑を他所にその言葉を聞いたもっちーが大仰に溜め息をつきます。

「あのなあ、確かに数学は夏樹でもBクラスレベルの島田でもいいざというときにサポートできるが、英語は姫路以外だと夏樹しかサポートできねえだろうが」

「ああ、そりゃそうか。流石に鬼の補習室送りは嫌だしな」

おお、もっちー、ナイスです！　先ほど提案した人ももっちーの言葉に納得したようです。

「それじゃあ、野郎共、きっちり死んで来い！」

『うおおーっ！』

なぜか異様にテンションの高い前線部隊の雄叫びが響き渡ります。

今回の作戦では廊下の戦闘の勝敗が重要になるので、確実に勝つためにFクラス五十人中四十人を注ぎ込みます。私たちのクラス最強かつ学年でも三指に入る実力のひめひめがいるし、私も英語ならアレを使えますから負けはほとんど無いはずです。

キンコンカンコン

そして、ついに昼休み終了のベルが鳴り響きます。いざ開戦。もつちーの指令が響き渡ります。

「よし、行つて来い！ 目指すはシステムデスクだ！」

『サー、イエッサー！』

その叫びとともに私たちは全力で廊下を駆けました。

今回の私たちの主武器は数学です。Bクラスは比較的文系が多いのでそこを突くためと、なぜか数学の長谷川先生は召喚可能範囲が広いからです。他にも同じく理数系科目である物理の木村先生と私の武器を活かすための英語の遠藤先生もいます。立会いの先生の多さで一気に畳み掛けますよ。

「いたぞ、Bクラスだ！」

「高橋先生を連れているぞ！」

部隊の人たちの声で前を向くとBクラスがゆったりとした足取りで歩いてきます。その数は十人程度と少なめであくまで様子見だというのが分かります。その人数の少なさはこの戦いを押さえない私

たちとしては嬉しいのですが、高橋先生がいるのは痛いです。私たちは総合科目ではひめひめ以外は戦力になりません。なるべく、総合科目フィールドは避けないと。

「生かして返すなーっ！」

そんな物騒な台詞が皮切りとなり、Bクラス戦が始まりました。

「おい、神谷夏樹だ。いいか、絶対にあいつを数学フィールドに近づけるな！ さっさと取り囲んでやっちまえ！」

そんな号令とともに三人のBクラス生が私たちの部隊に近づいてきます。うーん、敵も私の対策を考えたみたいですけど、見当違いな作戦ですね。三人に使うのはもったいない気がしますけど、十人中三人と考えればなかなかの戦果ですし、一刻も早く勝ちたいですからね。飛ばしていきます。そう判断した私は他の人たちにフィールドに入らないように指示します。

「遠藤先生。Fクラス神谷夏樹がそのBクラス三人に英語勝負を申し込みます」

「許可します」

私は相手に申し込まれるより前に対戦を申し出ます。

『サモン
試獣召喚』

そして、私たちはほとんど同時に召喚獣を出します。

相手は全員鎧に包まれており、その手には剣や槍などを持っていてなかなか強力そうです。対して私の召喚獣はいつも通りの燕尾服

を着て、その手には竹笛を。

「姐さあーん！ そりゃ無いですよ！ 何でそんな貧弱なんすか！」

「そうだ！ 成績がいいほどいい楽器なんでしょ！？ だったらヴァイオリンとかホルンとかあー！」

「おい。どうやら、あの装備はかなり弱いらしいぞ」

あわてるFクラス生の声を聞いてBクラス生は安心し、胸を撫で下ろします。あつ、そういえば説明を簡単に済ませただけだったんだっけ。

「あ、あれ？ でも、あいつの召喚獣の腕……」

そんな中、一人のBクラス生がある事実気づいたようです。そして、召喚に少し遅れてそれぞれの点数が現れます。

Fクラス 神谷夏樹 英語 464点

VS

Bクラス 川上登 英語 165点

Bクラス 山田哲平 英語 173点

Bクラス 上岡志郎 英語 159点

『はあああ！？ う、腕輪持ちだとおー！？』

「姉御。一体どういことなんですか」

「ああ、説明してなかったけど、私の楽器のバリエーションは8個だけで400点を越えたら腕輪がつく代わりに0点からと同じ扱いになるんだ。だから464点と64点は同じ楽器なの。いやあー、すっかりしてたよ。ごめんね」

私の説明で納得したFクラスと、逆に私が腕輪持ちであるというシヨックから抜け出せないBクラス。うん、今のうちに腕輪を発動しましょう。

頭の中で腕輪の起動命令を送ると、私の召喚獣の左腕にある腕輪が光りだし、それと同時に召喚獣が演奏を始めます。基本的に腕輪の能力は強力な攻撃系か召喚獣強化系が多いので相手は攻撃に備えて身構えます。でも、私の召喚獣の通常攻撃力は0だって言うことは知っているはずなんですけどね？ まさか、腕輪はその対象外だとしても？

まあ、その後何の攻撃も来ないことを不審に思いながらも攻撃を仕掛けてきましたが、腕輪の効果を警戒してか精彩がありません。そんな消極的な攻撃では私を捉えるのはむりですよ？ そして、演奏開始から25秒ほどたったのを見計らって英語部隊の9人に指示を出します。

――5――

「さあ、みんな」

――4――

「全力でのしちやいなさい！」

――3――

私の声にみんなが慌て出します。

――2――

気を取り直したみんなが召喚フィールドの中に入り、

1

『サモン
試獣召喚』

0

その言葉とともに9体の（貧弱な装備の）召喚獣が現れます。フィールドの変化はそれだけではありません。演奏を続けていた私の召喚獣の腕輪の光が一際大きくなりました。そして、訪れる変化。

Fクラス 神谷夏樹 英語 116点

VS

Bクラス 川上登 英語 165点

Bクラス 山田哲平 英語 173点

Bクラス 上岡志郎 英語 159点

まあ、私の点数以外は変わりありません。……表面上はね。

「はっ！ 返り討ちだ」

一人のBクラス生が迎撃のために剣を上には振り上げ——たかったんでしょうね。しかし、その腕は上に上がることなく、勢いよく右に動き、隣にいた召喚獣を切りつけます。

「て、てめえ！ 何やってんだよお！」

「ち、ちげえって。俺はちゃんと上に振り上げようと」

思ってもいなかった幸運に頬が緩みます。すると、私の笑みに気づいた相手が叫びます。

「おい、きつとあの女の実力だ。だが、少なくとも上に振ろうとして右に行っただんなら……」

そう言うと言い争いに加わっていなかった生徒が右から迫っていたFクラス生に対応しようします。うーん、なかなか冷静ですね。彼は今度は逆に上に振り上げることで、右の敵を薙ぎ払いたかったんでしょうね。ですが残念」

その剣は本来の命令通り勢いよく上に上がります。そして、から空きの胴体を三人がかりで攻撃。先ほど右の仲間を攻撃してしまった彼は唯一出方が分かっている右薙ぎで攻撃しようと左前方に向かうとしますが、その意に反して召喚獣の足は左後方に動こうとし、その結果足をもつれさせて転んでしまいます。

先ほど三人に攻撃された人も必死に逃げようとするのですがその足は命令通りの方向には動きません。その混乱の隙を突いて9人のFクラス生が止めを刺していきます。

ふふっ、無駄ですよ。あなたたちの召喚獣は私の腕輪によって命令系統が狂っていますからね。しかも、この命令系統の混乱には統一性が無く、どんな混乱になるのかは完全なランダムで私でも予測が付きません。そんな法則を短時間で理解できるわけも無くFクラス生に面白いように点を削られていきます。

結果、Fクラス生が召喚して20秒もしないうちに英語フィールドの初戦は終了しました。幸先のいいスタートです」

第十八話：開戦！Bクラス（後書き）

はい、今回は神谷家のパワーバランスを冒頭に入れてみました。昨日の話に「ねえさん」がいることを匂わせたのですが、触れてきた人はいませんでしたね。気づかれなかったのか、書くまでもないと思われたのか。

夏樹「本当に凄かったよ。流れるように技と技が繋がって。……あのバカが本当に哀れだった」

今回夏樹に腕輪を使用させました。卑怯すぎると言われないか非常に心配です。くっ、生みの親にこんなに心労をかけるとはなんてキヤラだ。

夏樹「全部あんたの自業自得でしょ」

それと、今回の話で明久は書かれていませんが、彼は総合フィールドとかの指示を頑張っています。……姫路さんがいないもんだから。

夏樹「流石に前回の中堅部隊の隊長だけあって、結構いい指示だったよ」

これからよろしくお願いします。

第十九話：夏樹、最大のピンチ！？（前書き）

糖分摂取魔様、感想ありがとうございます。

ふう、やっぱりオリジナル展開は難しいし、書きあがったあとの不安が洒落にならないけど執筆速度だけは速くなりますね。

夏樹「ただ、途中で名前を入れ替える必要性が出たんだよね？」

うん、菊入と岩下を出したんですけど、2巻ではどちらも剣なのでどっちがどっちでも良いやと思って書いていたんですが、1巻のBクラス戦の姫路の召喚獣の登場シーンを見ると片方は剣でもう片方は槍なんですよね。

夏樹「嫌な矛盾見つけちゃったね」

あと、今回は半分自己設定と見られても仕方ない事象として召喚獣の装備は着脱可能としています。

夏樹「それでは十九話始まります」

第十九話：夏樹、最大のピンチ！？

とりあえず英語フィールドは片付けたので、周りを見渡すとかなりピンチです。私たちが三人仕留めたとはいえ流石はBクラス。桁違いな点数で仕留めていきます。クラスの差が如実に現れる総合科目フィールドはもとより、主戦場の数学も苦戦しています。運動が苦手なひめひめがまだ少し離れたところにいることが大きな原因です。しまつちが何とか頑張っていますが、同じBクラスレベルでは思ったような戦果は得られません。まあ、一昨日戦争をしてBクラスよりは操作に慣れているのでしまつち個人としては決して劣勢ではありませんが。

そして、ある生徒の目が私を捉えます。ま、不味い。嫌な予感があった私は気配を薄くし英語班の中に溶け込もうとします。しかし、神様は無情でした。

「おい、お前ら！　今こそ姐さんに蹴散らしてもらおうときだ！」

「姉御！　ささつ、どうぞここは俺たちに任せて数学フィールドに」

「い、いや。小隊長が部隊を離れるわけには……」

「そんなことよりも数学で勝つほうが先です！」

数学部隊の要請を受けて、英語部隊のみんなが私の背中を押してきます。ちくしょう！　折角もっちーが上手いこと誤魔化してくれたのに！

必死に踏ん張りましたが流石に男子数人の力には敵わず、私は数学フィールドへと押しやられます。

「ちよつ、や、やだ。お、押さないでよ。お願い、本当にダメなん

だつて！」

私の必死の懇願も空しく、とうとう数学ワールドの中に。そして、元からいた人たちは脱出の時を今か今かと待ちわびています。うう、そんな目で見られてもムリなものはムリなんだってばあ。

「Bクラス岩下律子です。Fクラス神谷夏樹さんに数学勝負を申し込めます」

消極的な私の態度で強気になったBクラスの生徒が私に勝負を挑んできます。多分一昨日の戦いで私が数学では腕輪を持っていなかったことを知っているのでまだ気が楽なんでしょう。

「律子、私も手伝う！」

なあ！？ ひ、一人でも大変なのにい。十人……今は七人か。七人中二人も来るってことはそれだけ私を危険視してくれているんでしょうけど、迷惑ですよ。

『^{サモン}試獣召喚』

喚声に応じて二人の召喚獣が現れます。嫌だけど、代わりに受けてくれる人もいないし、出さないと戦闘放棄になってしまいます。

「うう、さ、サモン！」

私の声に応じて幾何学的な模様が足元に広がり、燕尾服を着た私の召喚獣が再び竹笛を手に現れます。

「おっしやああー！」

「また、腕輪もちじゃあぁー！」

人の気も知らずに男共が雄叫びを上げます。っのお！ 人の気も知らないで。この後の展開を想像すると泣きたくなくなってきました。そして、悪夢の瞬間、つまりは点数表示のときが来ます。

Fクラス 数学 神谷夏樹 71点

『えっ？』

誰とも無くつぶやいた言葉。そして、重苦しい沈黙が場を支配します。ああ、だから数学フィールドには入りたくなかったのに。

「ちょぉー！？ 神谷さん、一体どうしたんすかぁ！？」

「手え抜いてる場合じゃないっすよ！？」

皆の非難の声が響き渡ります。低い点数なのは自分で分かってますよ！ でも、実力なんだからしょうがないじゃないですかぁ！……それにしても、あまりの恥ずかしさに涙が滲みます。

「だから、やだって言ったのにー」

『ぐはっ！』

自陣に振り向いて抗議をすると皆がなぜか悶えています。

パシャッパシャッ

突如鳴り出したシャッター音。そこには本陣で待機しているはずのむっつーの姿が。

「……むっつー。なんでここにいの？」

「……………前線の戦況確認」

「じゃあ、そのカメラには全体の様子とかが写ってるんだよね？
見せて」

「……………（シュバツ！）」

私が指摘すると凄まじい速度で本陣に戻っていきました。……いや、別にコスプレとか着替えとか撮られた訳じゃないから逃げなくてもいいんだけどね？

「ま、まあ、いいわ。数学の点数が低いのは予想外だけど、逆に好都合ね」

「そうね、真由美。あいつの召喚獣が厄介なのは変わらないし、点数が低い数学でしつかり倒しちゃいましょう」

うっ、相手が重苦しい雰囲気から回復してしまいました。この状況はマズすぎです。

相手はこちらの事情など気にせずに飛び掛ってきます。律子という人の召喚獣が手に持つ剣を大上段に振り上げ、飛び掛かり、その後ろから真由美という人の召喚獣が槍を手に駆けてきます。かなりのコンビネーションですね。これでは律子さんの召喚獣をよければ左右どちらに動いても真由美さんの召喚獣の槍に貫かれます。かといって、動かなければそのまま律子さんにやられるだけです。

……演奏家の端くれとしてのプライドは痛みますが、ここは四の五の言っている場合ではありません。私の召喚獣に物理干渉能力があれば「バキッ！」という音がしそうな勢いで竹笛を押し折ります。相手がいきなり武器を押し折った奇行に驚いている隙に折れた竹笛の半分を全力で投げつけます。竹笛は見事に律子さんの召喚獣の顔

面に直撃。体勢が崩れたせいで後ろに続いていた真由美さんの召喚獣と衝突します。

「律子、大丈夫!？」

「大丈夫、全然ダメージはないから」

相手が気遣いあっている間に私の召喚獣は燕尾服のボタンを引き千切り、袖から腕を抜きながら相手召喚獣に近づきます。ここだけが、唯一の死角!

「あ、あいつの召喚獣がない!」

「慌てないで! 私たちの召喚獣の正面にいます。律子、思いっきり剣を振り下ろして!」

それを聞いた律子さんは召喚獣に命令して威力の高い振り下ろしをするために剣を上に掲げます。その瞬間、彼女たちの召喚獣から見て右から黒い影が低い位置を滑る様に飛び出します。

「残念ね。私はあなたの召喚獣が脱ぎ始めるのを見てたの。だから、それは燕尾服で本命は左ね」

そういつて、真由美さんは召喚獣を左へと進ませました。ええ、半分は予想通りです。真由美さんの召喚獣が動くと同時に私の召喚獣も律子さんの召喚獣の攻撃を回避すべく動き出します。彼女たちから見て右側に。

「そんなのはこっちも気づいていますよ」

隙の多い大振りの攻撃をした律子さんも反対方向に動かし、真由美さんもすぐには対応できません。その間に少しでも距離を置き、

「ちょっと、みんなあ、傍観してないで助けてよう」

Fクラスの皆に応援を頼みます。

『は、はい』

『待つんだ。ここを逃せば涙目の神谷さんはもう見れないかも知れないぞ』

『た、確かに。な、涙目の神谷さんはレアだ』

『ああ、普段の気の強いのもいいが、こういう顔もなかなか』

『ああ、もう少し鑑賞してから……』

「あんたら、後で覚えてろよお！」

こ、ここまで味方が頼りにならないとは思いませんでした。須川君の熱弁を受けて（物理班の指示はどうした！？）、みんなが観戦ムードに入ります。おかげで船越先生をけしかけた罪悪感も吹っ飛びましたよ。そして、その光景に相手の目も確かな哀れみの色が見て取れます。

「ま、まあ、最低なクラスだったことが運のつきね」

「あなた自体は結構優秀なのにな。でも、これは戦争だから覚悟してね」

そういつて、今度は二人の召喚獣が並んで飛び掛ってきます。時間差をつけることでさっきの二の舞になることを警戒してですね。見事に作戦にはまってくれました。

私の召喚獣はズボンからベルトを抜き、『おおおー！』……外野、うるさい。髪留めゴムで竹笛のもう半分を金具の反対側に括りつけ、二体の召喚獣の間を狙って投げつけます。ベルトは回転しな

がら相手に近づき、私から見て右を飛んでいた真由美さんの召喚獣の右足に当たります。すると、ベルトの進行は止まりましたが、回転は止まるはずもなく、隣を飛んでいた律子さんの召喚獣の左足も巻きこみ、彼女たちの召喚獣の足に巻きつきました。空中で突然二人三脚にされた相手は当然バランスを崩して、地面へと落ちました。

こ、これでいよいよ策は打ち止めです。手元には先ほど引き千切ったボタンと回収した燕尾服がありますが、相手が観察処分者でなければボタン程度では足止めできませんし、召喚獣に燕尾服をかぶせても、召喚者の視界が遮られるのではないので、無意味です。いよいよ、これまでですか……。

「お、遅れ、まし、た……。ごめ、んな、さい……」

神様、ありがとう！

「来たぞ！ 姫路瑞希だ！」

「姫路さん、来たばかりで「ひめひめ、助けて！」……夏樹の援護よろしく」

「は、はい、行って、きます」

そして、トタトタとこちらに近づいてくるひめひめ。疲れているのは分かるけど、早く！ 召喚獣は細かい作業が苦手だけあってまだベルトは外れてないけど、時間の問題なんだから！

「げっ、神谷さんだけでも大変なのに、姫路さんまで」

「は、早くベルトを取らないと」

「ああ、もう面倒くさい！ ごめん、真由美少し掠るかも」

そういつて律子さんは二人を絡めとるベルトに剣を振り下ろしま

した。私たちにとっては運悪く剣はどちらの召喚獣も掠ることなくベルトを両断し、二人の召喚獣は戒めから解かれました。

「姫路瑞希です。よろしくお願いします。試^{サモン}獣召喚」

でも、ギリギリでひめひめが間に合いました。その召喚獣は昨日と同じように鎧をまとして、重そうな大剣を軽々と持っています、そして、左腕には先ほどの私の召喚獣と同じように腕輪をしています。

「う、うそ、彼女もなの!？」

「私たちが勝てるわけじゃないじゃない!」

相手の二人がひどく慌てています。まあ、腕輪持ちはAクラスでも本当に珍しいですから無理もないですね。

そして、ひめひめがその手をキュツと握りこみます。すると、召喚獣もその動きに合わせるように左腕を敵の方に向けました。

「ちょっと待つてよ!? まだ、神谷さんすら倒せてないのに!」

「律子! とにかく避けないと」

そういつて大げさなくらいに二人の召喚獣が横に飛びます。まあ、腕輪の能力によっては大げさとは言えないですけどね。その直後、ひめひめの召喚獣の腕輪が光を発しました。

キュボツ!

「きゃああーっ!」

「り、律子!」

左手から光線がほとばしったかと思った瞬間、逃げ遅れた相手の召喚獣の一体が炎に包まれました。

「ご、ごめんなさい。これも勝負ですのでっ」

そう言っ、ひめひめの召喚獣は大きく避けてバランスを崩してもう一人の敵に肉薄し、大剣を振り下ろしました。相手の召喚獣を武器ごと一刀両断し、私があれば苦戦した数学フィールドの初戦は一瞬で決着がつかしました。

「い、岩下と菊入が戦死したぞ！」

「なっ！ そんな馬鹿な！？ これで5人だぞ！？」

「姫路瑞希と神谷夏樹、噂以上に危険な相手だ！」

Bクラスの5人に驚愕の表情が浮かびます。半分も倒されれば当然ですよ。でも、本当に寿命が縮むかと思いました。

第十九話：夏樹、最大のピンチ！？（後書き）

今回は戦闘描写に少し力を入れてみました。

夏樹「おかしい点があったら指摘してくださいね」

結構上手く戦えています、夏樹は多少は慣れてはいても観察処分者ではないのでそこまで複雑な動きはさせていないはず。行動は「折る」、「投げる」、「脱ぐ」だけで構成されていますし。

夏樹「不安なのは髪留めゴムで括ったことかな？」

ま、まあ、そのくらいなら何とかなると信じたい。

次はまだ執筆していないので少し更新が開くと思います。

これからよろしく願います。

第二十話：夏樹に休みは訪れぬ（前書き）

今回のお話は自分で書いていてなんですが、できればに不満が残ります。

夏樹「オリジナル要素を出してきたせいでアラが目立ってきたね」

これから執筆を始める次回分も結構無理やりな作戦ですし、読んでくれている方がっかりしないか不安です。

夏樹「その後の話をその分がんばればいいじゃない」

それでは第二十話始まります。

第二十話：夏樹に休みは訪れぬ

さて、ひめひめと私で5人補習室送りにしましたから大分楽になりましたね。そして、ひめひめが来てくれたので私の仕事はあくまで小隊長としての司令官補佐。やっと肩の荷が下りました。

「み、皆さん、頑張ってください！」

…… Really? あれ、前線指揮ってこんなでしたっけ？
こんなんで部隊がともに動ける訳――

「やったるでえーっ！」

「姫路さんサイコーッ！」

ああ、Fクラス（うち）はこれがベストなんだあ。真面目に悩んだ私ってバカみたいだね。

「姫路さん、夏樹、とりあえず下がって」

「あ、はい」

「ありがとう」

敵の士気は挫いてるのですからひめひめの点数を無駄に減らすことはないですし、ここで私も使えるのは物理だけになってしまいました。今後のことを考えて、戦闘には参加せずに指揮に専念しましょう。……ひめひめを信用しない訳じゃないですけど、さっきのを見ると心配で精神的疲労が溜まりすぎます。なので、ちょっと手を打ちますか。

「ひめひめえー。結構消耗が大きい人がいるから部隊の再編成をし

ていいかな？」

「えっ？　だ、大丈夫なんでしょうか。勝手にそんなことして」

「ちよつとは問題あるかもしれないけど、戦力が減るよりマシですよ。そもそもそんなに大きくは変えないし」

「じゃあ、お願いします」

数学班と物理班は接戦だったからこれ以上は無理させられない。

逆に英語班は小隊長の私の点数の消費は大きいけど、他の人はほぼ無傷。だったら！

「物理班と数学班はお互いに入れ替わり！　それで、私は英語班の小隊長から物理班の小隊長に変更。英語班は構成はそのまま私の代わりはあつきーで。あつきーのサポートでしまつちと須川君が入って。英語班の中に数学が得意な人がいたら苦手な人と交換して！　それと、ひめひめは前線指揮と数学班を兼任でお願い」

これで物理と数学でもしもの事態があれば私とひめつちが対処できますし、試召戦争に不慣れなひめつちを数学班という小隊に専念させることで指揮能力も鍛えられるでしょう。クラス最高得点保持者のひめつちは今後こういう仕事が増えるでしょうからここで練習しておいて損はないです。問題は高得点者がいない英語ですけど、今のBクラスは積極的に責めてくるくらいなら少しでも逃げるはずですし、あの三人はDクラス戦で相当慣れているはずですからなんとかなるでしょう。

「中堅部隊は急げ！」

「中堅部隊が来るまで全力でこらえろ！　とにかく、戦死だけはするな！」

やっぱり消極的ですな。流石に前線部隊の半分を一気に失ったの

は予想外なのか完全に撤退を優先しています。そこで私たちは深追いで戦死することに注意ながら攻めて戦線を徐々に推し進めていきます。これならこの戦いは難なく終えられそうです。ふと、視界の端で秀吉君があつきーに声をかけているのが見えます。一体なんでしょう？

私は部隊の人に断りを入れて二人のそばに近づきます。

「二人とも一体どうしたの？」

「うん。ここも大分落ち着いたし、僕たちは教室に戻ろうと思ってさ」

「なんでまた？」

「うむ。ワシが聞いたところによるとBクラスの代表は根本らしくてのう。あやつのことじゃから教室に手を出していてもおかしくなかるう？」

「まあ、そうかもね。一応ひめひめには私から伝えておくからよろしく」

『了解！』

あつきーと秀吉君を送り出してからしばらく経ちました。渡り廊下の戦いはFクラス有利に進んでいます。補給に行った生徒の帰りが遅いのが気になりますね。でも、それ以外に問題は起こらないはず。

「神谷さん！ 英語班の援護をしてくれ。島田が人質にとられた！」

……起こらないはず……だったのになあ。もう、全部投げ出していいですかねえ？

今、私はしまつちが人質にとられている現場に来ています。しょうがないじゃないですか。現実逃避していても何も進展しないんですから。

「はあー。何やってるのさ、しまつち」

「うう、しょうがないじゃない。誰にでもミスはあるんだから」

ウチのクラスの場合多すぎです。

「とりあえず、突撃するんで補習がんばってえー」

「ちょ、ちよつと！ こういう場合ウチを助けるんじゃないの」

「私は戦場に私情を持ち込むほど無能じゃないよ。それに別に死ぬわけじゃないし」

「死ぬわよ！ 今日までに形成されたウチの何かが死んじゃうわよ！」

ええー。でも、しまつち一人でBクラス二人を倒せるならメリツトは大きいし、しまつちの尻拭いで部隊を危険にさらすのもなあ。

「島田さん！」

「よ、吉井！」

そんなことを考えていたらいつの間にかあつきーが合流していた。どうでもいいけど、なんか今のやり取りドラマみたいだね。

「あつきー、私はここはしまつちには大人しく補習を受けてもらって相手を倒すべきだと思うんだけど」

一応しまつちの上官はあつきーなので確認をとります。あつきーは目を閉じて私の提案について考えている。しばらくしてあつきー

の目が開きました。どうやら作戦が決まった見たいです。

「総員突撃用意ーっ！」

「よしっ！」

「二人ともそれでいいのか!？」

何を言っているんでしょうか。今までだって戦死寸前の仲間を切り捨てたことはあったでしょうに。

「ま、待て、吉井！」

相手から待ったがかかります。……往生際が悪い。

「コイツがどうして俺達に捕まったと思ってる？」

「馬鹿だから」

「殺すわよ」

いや、捕まっている時点で馬鹿は否定できないでしょうに。

「コイツ、お前が怪我をしたって偽情報を流したら、部隊を離れて一人で保健室に向かったんだよ」

あつきーが心配になったっていうのは恋する乙女としていいけどさ、お願いだから戦争中は集中して。

「島田さん……」

「な、なによ」

さあ、言ってやりなさい！

「怪我をした僕に止めを刺しに行くなんて、アンタは鬼か！」
「違うわよ！」

あつきーに期待した私がバカだった。なんでそんな結論に……なるか。普段あれだけ殴ってればねえ。

「ウチがアンタの様子を見に行っちゃ悪いっての！？ これでも心配したんだからね！」

「島田さん。それ、本当？」

「そ、そうよ。悪い？」

ぷいっと顔を背けるしまっち。お願いだからラブコメは後でやって。

「へっ。やっとわかったか。それじゃ、おとなしく」

「総員突撃いーっ！」

「どうしてよっ！？」

確かに私はともかくお人よしのあつきーは自分を心配してくれた相手を見捨てることはない気がします。

「あの島田さんは偽者だ！ 変装している敵だぞ！」

……あとでフォロー入れたほうがいいのかなあ。しまっちの怒りは分かるけど、普段の行いが原因だもん。

「おい待てって！ コイツ本当に本物の島田だって！」

「黙れ！ 見破られた作戦にいつまでも固執するなんて見苦しいぞ！」

「だから本当に——」

Bクラス 鈴木次郎 英語41点

VS

Fクラス 田中明 英語69点

Bクラス 吉田卓夫 英語14点

VS

Fクラス 田中明 英語48点

これで残っていた二人を撃破。戦いも大分楽になります。すると、教室の様子を見てくるように頼んだ物理班の一人が近づいてきました。そこで聞いたFクラスの現状。Bクラスがここまで卑怯な手を使ってくるとは思いませんでした。こうなったら、ちよつと卑怯で、味方と特にもつちーがかわいそうだから最後の手段と思っていたあれをやるうかな。

「本当に、『吉井が瑞希のパンツを見て鼻血が止まらなくなった』って聞いて心配したんだから！」

「包囲中止！ コレ本物の島田さんだ！」

考え事をしているとそんな叫び声が聞こえてきました。はあ？
しまつちはそんな嘘で捕まったの？

なんとなくこの後の展開が読めるので私は二人に近づきます。

「——にしても、卑怯な連中だね。人として恥ずかしくないのかな？」
「……………」

しまつちのリアクションがない。あれは相当怒ってるよ。

「あー、島田さん。実はね」
「……なによ」

あのバカは一体何を言うんだろうか。変なこと言わずに素直に謝ればいいんだけど。そして、あっきー（バカ）は満面の笑みでこう言いやがった。

「僕、本物の島田さんだつて最初から気付いていたんだよ？」

その瞬間、修羅が舞い降りた。まったく、あいつは。そんなことを言ったら火に油を注ぐだけでしょうに。私はとりあえずバカに殴りかかっていたしまつちの首に左手を回し、その掌を右ひじの裏に当て右掌はしまつちの後頭部へ。これでいつでも落とせます。

「……離さない。夏樹。ウチはこのバカを殺さないといけないの」
「いくら心配だからって部隊を離れて捕まったのは自分のミスなんだから少しは反省なさい！」

そう怒鳴ると少しは反省したのか暴れ方が収まります。……耳元で大きな声を出されて怯んだだけかもしれないけど。そして、私は安心しているバカに目を向けます。

「何安心してんのさ。いくら敵に捕まったとはいえ偽者扱いしたんだからそれは素直に謝りなさい。いくら普段の行動からそう思っても仕方ないとしても」

最後の台詞でしまつちが抗議の目を向けてきますけど知りません。一度、普段の行動を見直さない。

「だから、まあ、偽者扱いとそれをごまかそうとしたってことであつきーがしまつちのお願いを何個か聞くて事でここは手打ちにしない？」

「ま、まあ、それなら」

「ええー、酷いよ夏樹！ そんなことになったら僕の安全が」

「ならここでしまつちを開放しようか？」

「謹んで聞かせていただきます」

「さて、何個にしようか？」

「じゃあ、あれでいいんじゃない。ランプの魔人みたいに三つで」

「うーん、じゃあそこらしまつちのミス分を引いて二つで」

「あんたらがウチを見捨てた分が入ってないんだけど？」

いや、それは現場を預かる隊長としては当然なことだと思うんだけど。

「わ、分かった。それでいいよ」

私が断る前にしまつちの迫力に押されたあつきーが承諾していました。まあ、本人同士が納得しているならいいか。

「まず、一つ目は呼び方から変えさせてもらいましょうか」

「呼び方？」

「今度からウチはアンタのことを『アキ』って呼ぶから、アンタはウチのことを『美波様』って呼ぶように」

しまつちにそんな趣味があつたとは知りませんでした。……ちょっと距離を置きたくなりますね。

「うええ！？ クラスメイトなの「文句あんの？」美波様！ これでもいい！？」

「今度の休み、駅前の『ラ・ペデイス』でクレープ食べたいなあ」
「おのれ！ 僕が塩水で生活しているというのになんという贅沢を（ギンツ！）奢ります！ 奢らせていただきます」

私が拘束しているっていうのに視線だけであつきーを脅すとは。相当怒ってるんだね。

「最後のお願いね。ウチのことを愛してるって、言ってみて」

意外に乙女だねしまっち。でも、そんなお願いすると好きなのがバレ……るはずがないか。あつきーだもん。しかし、まさに現実は小説より奇なり。あつきーは私の予測の数段上を行っていました。

「ウチのことを愛してる！」

あまりの事態に力の抜けた私の拘束を抜け出したしまっちのアッパーが見事にクリーンヒット。うーん、これは当分起きませんね。その上、しまっちの怒りはまだ収まっていないようす。どうやって止めましようかね。正直暴力は嫌いなんですけど。

しかし、そんなことで迷っている暇はなく、しまっちは気絶したあつきーにさらに追い討ちをかけており、あつきーの体にどんどん傷が増えていきます。私はため息をつきつつ近づき、

「しまっち、ごめんね」

両手を顎と側頭部に当て一気に力を入れます。うん、綺麗に入りました。これならしまっちは全く痛みを感じていないはずです。……しまっち、痛みがないだけましくてことで許してね。

私は近くの人に二人を保健室に運ぶように頼んで、次の仕込みのために4階へ向かいます。

第二十話：夏樹に休みは訪れぬ（後書き）

今回、ラストをどうしようかは本当に迷いました。夏樹は暴力を振るうのが嫌いですし、キャラじゃないんですけど、そうしないと美波殺戮モードは止まりませんし。何かこれ以外で殺戮を止める方法があったらアドバイスください。

夏樹「今回はとある事情でBクラスの罾のときの二人の逃走劇がなくなるのでここでこれを入れないといつまでもあつきーのしまつちへの呼び方が「島田さん」になるので半ば無理やり入れました」

前書きで書いたとおり、今回の話は自信がありませんが、その分違う話では挽回するべく力を入れます。具体的には罾への対処とか壁壊しの前後とか！

夏樹「ですので、今回の話であきれても温かい目で見ていただけると嬉しいです」

ちなみに現在アンケートを行っているので参加していただければ嬉しいです。現在の途中結果は

根本

？5票

？2票

小山さん

？1票

？3票

？3票

となっています。根本は大体決まりですかね。やはり、奴が夏樹に惚れるのは気持ち悪いのか。小山さんは親友とGLフラグが同点。下手すると同点の場合の対処を考えなければ。

これからよろしく願います。

第二十一話：ごめんね、もっちゃん（前書き）

またまた、前の投稿から大分時間が空いてしまいましたが、何とか続きが書けました。

「本当にもっと更新頻度を上げないと皆さん離れていっちゃうよ？」

今回もオリジナルの展開を入れてみました。本当にオリジナルは執筆速度が上がりやすく、手をついたら一気に書けました。

夏樹「今回この話を入れた意味ってあるの？」

まあ、一見無意味に見えるけど、前にしっかりやりますって宣言したことだし、意外なところに後につながる大事な出来事があったりね。

夏樹「ふーん。そんな大事な部分があるようには思えないけど」

まあ、それはその伏線が生きてからのお楽しみってことで。

夏樹「それでは第二十一話始まりますっ」

第二十一話：ごめんね、もっちー♪

教室で待機していた私は壁に掛けられた時計で時間を確認します。さて、そろそろ他のクラスは休み時間に入るはずですね。今こそ作戦を遂行するときです。……始める前に心の中で謝っておくね。もっちー、ごめん！

「もっちー！ ちょっと私に付き合って！」

「ちよっと待て、夏樹。一体どうしたって……」

私はそう言い放つともっちーの返答を待たずに彼の左手を握り、廊下に引つ張り出します。おっと、私たちだけじゃ意味が無いんだよね。

「4 / 5人私たちについて来て！」

私がそう言い放つとなぜかもっちーに嫉妬の目を向けていた生徒が我に返り、拳で語り合って決まった5人が私たちの後をついてきます。

さて、教室に押し込み損ねたBクラスの小部隊を探したいんですが、どこにいますかねえ？ そんなことを考えながら廊下を歩いているともっちーが私の手を逆に引いて教室に戻ろうとします。

「おい、夏樹。一体どういいうつもりなんだ！ むざむざ代表が出て行ったらまずいだろうが！」

「あー、大丈夫。私なりの作戦のために必要なことだから。一応そのための仕込みは済ませておいたし」

反省文覚悟……というか既に書いてから仕込みをしておいた作戦ですから上手くいくといいんですけどね。……ちよつと、卑怯な気もするから迷いがあつたんですけど、Bクラスがなりふり構わずに戦うならこつちだつてこの位はします。

「それで、神谷さん。俺たちは一体何をすれば？」

「そうそう、事情も分からずについてきたけどさ」

確かに、急いで飛び出してきたせいで全然説明していませんでしたね。そのことに気づいた私はいったんその場で立ち止まりついてきたメンバーに説明をします。

「えーと、もつちーっていうエ……げふんげふん。罔を私が連れて歩くことでBクラスの外にいる小隊をおびき出して、それを私たちで倒そうって言つ作戦なんだけど」

「おい、夏樹。貴様今エサつて言いかけたろう！？」

「まあ、五月蠅いもつちーは放っておいて、君たちには相手を倒す役を頼みたいんだ。多分、相手は同数かそれ以上だし、私の演奏下で戦ってもらうから戦死の可能性も高いんだけど」

「そんな！　いくら神谷さんの頼みでもそれは聞けないよ！」

「そつだ！　いくらなんでも戦死の可能性があるなんて！」

「うう、やっぱりダメ？　一応、今回戦つてくれる君たちには明日お菓子を作つてこようと思つてただけど、それじゃあ対価としては安すぎるか」

私がそついうと5人は少し考え込みました。

「その際は、シチュエーションを選んでもいいですか？　例えば、セーラー服でツンデレ風に『か、勘違いしないでよね。アンタのために作つたんじゃないんだから。余り物が勿体ないだけよ！』とか」

「妹っぽく甘えて『お、お兄ちゃんに食べて欲しくて作ったんだ』とかでもいいですか」

5人がめいめいに個人の要望を出してきてちよつとだけ顔が引きつりました。しかし、その光景を考えてみますと、希望の服はセーラー服やスーツなど。セーラー服なら中学の頃は普通に着ていましたし、スーツだって将来着る可能性は高いのであまりコスプレって感じはしません。シチュエーションにしても、演劇みたいなものと割り切ればそれほど苦痛ではありませんね。……どうしましょう。さくのせいで私の感性がだんだんおかしくなっているような気がします。でも、戦死の可能性のある作戦に付き合わせるんですから、そのくらいは許容しましょう。

「まあ、小学生っぽいつていう犯罪チックな服装も、レースクイーンみたいな変に露出の高い格好もないですし、そのくらいはいいですよ。写真撮影はNGですけど」

「渡し方についてはどうですか!」

「うーん、やってもいいんだけど着替えのことも考えると全員の要望を叶えると時間が無いでしょ? だから、今回の作戦で一番手ごわい相手を倒したとか、一番相手の点数を減らしたとか、一番活躍した人にその要望どおりに全員分渡すつて言うのはどうかな?」

そういうと全員が黙り込んでしまいました。やっぱり、一人に全員分を渡して終わらせるつていうのは手を抜きすぎましたかね。

「えーっと、やっぱりダメかな?」

そう私が確認すると全員がザツという音がするほど勢いよく片膝をつき、右手を胸の前で水平にしました。その行動に私ももっちらも軽く引いてしまいました。

「ど、どうしたの。えーっと、そういう格好するってことは作戦については大丈夫なのかなあ？」

「お任せください、神谷様！」

「イエスユアハynes！」

「委細承知です、姐さん！」

「この命に代えてもやり遂げます！」

「^{あるじ}主よ。あなたはただ一言、『死ぬ』^{あるじ}と言えればいいのです」

提案した私が言うのもなんですし、かなり失礼な言い方ですけど、こんな条件で地獄の補習と隣り合わせの作戦を了承するとはずいぶん安上がりな人たちですね。

「いたぞ！ Fクラス代表だ！」

つと、後方からBクラスの小隊が近づいてきました。7人くらいですか。これなら5人が倒し逃してももっちーに倒してもらえる範囲内ですね。このまま、時間を稼いで迎撃しやすいところを目指しましょう。

「おい、夏樹！ 流石にあの人数は「いいから黙ってついてきなさい！」お、おう」

私たちはしばらく走り続けて、旧校舎4階の空き教室に入りました。

「へっ、ようやく追い詰めたぜ」

「まさか、代表が大した盾も連れずにむざむざ出てくるとはな。まあ、これで面倒な戦争も終わりだが」

「じゃあ、長谷川先生。召喚フィールドを「ちよっち、待ってみ？」

ああ？」

私が相手の言葉を遮って人差し指を上に向けながら不敵な笑みを浮かべると、相手は全員いぶかしげな表情をします。そして、それと同時に流れ出す放送。

ピンポンパンポーン《連絡致します》

そして、突然流れ出した私の声に皆戸惑っていますが、当然放送はそんなことを気にせず作戦の鍵となるキーワードを言い放ちます。

《西村先生、西村先生。坂本雄二君が教師と生徒の垣根と性別の壁を越えた大事な話があるようです。至急彼に会ってあげてください》

私以外に嫌な沈黙が流れます。そして、もっちーが機能停止から回復して怒鳴ってきます。

「夏樹、一体どういうことだ!!」

「一昨日のうちにテープに録音していました」

サムズアップとともにいい笑顔^{かお}を作って応えます。

「手段を聞いてんじゃねえよ！ 何のつもりでこんなことしたんだって聞いてんだ！」

「えーっと、一つは船越先生への悪戯の仕返し？」

「ふざけてんのか、てめえ！」

「まさか、坂本にそんな趣味があつたのか!？」

「Fクラス代表は変態だったのか!？」

「ほら見る、お前のせいで最悪の噂が流れたじゃねえか!」

「大丈夫。こんな嘘信じる人なんかほとんどいないよ。それに、も

「つちーがOK出したんだよ？ 戦略的に意味があればこういうこと
していいって」

「ああ？ そりゃ一体どういう「さあーかあーもおーとおー！！」」
「こういうこと」

もつちーの言葉の途中で野太い声が聞こえてきます。そして、それから少しもたたないうちににむーがこの教室に入ってきました。

「坂本。貴様、今の放送はどういうつもりだ！？」

「いや、あれは俺じゃなく――」

「ごめんなさい、西村先生！ あれは一昨日の船越先生のことの仕返しをもつちーにしたいくて私がやった悪戯なんです！ お叱りは今日の戦争が中断したらしつかりと聞かせていただきます」

「はあ、船越先生が言うには今回のことについて事前に反省文を書いているらしいな。やる前に書いたものが”反省”文と言えるのかは疑問だが、そうした文章を書く覚悟があったということは考慮する余地がある。それに船越先生もできるだけ寛大な措置をと言ってきたし、今の誠意のこもった謝罪で勘弁しよう。以後、こういうことは控えるように」

「おい、待て鉄人！ 随分と俺らに対するものとは態度が違っじゃねえか！ 教師が贖罪していいのか！？」

「西村先生と呼べ。あのなあ、コイツはお前らと違ってほとんど問題を起こさなし、たまに起こしたときも真剣に反省するからな。それに大抵の問題もお前らが起こしたことに巻き込まれるだけだろう。こいつの人間性は船越先生にお前らが謝罪しないで、神谷が謝罪したことから分かるだろう。よって、これは当然の区別だ」

うーん。私のことをそういう風に評価してくれるのは嬉しいですが、流石に教師なんだから生徒の区別や贖罪は良くないと思いますよ？ ああ、それより皆が呆けているうちに作戦を完了させない

と。

「にしむー、にしむー」

「貴様、さっきはしっかりと西村先生と呼んだのになぜ戻す？」

「え？ さっきは謝るからしっかりとした呼び方をしただけだよ？
その位は常識として理解してるし」

「まあいい。で、どうしたんだ？」

「ああ、うん。英語Wで召喚フィードルの展開をお願いします」

「ちよっ！？ 待てや「分かった。許可しよう」」

「ありがとうございます。試獣^{サモン}召喚！」

Fクラス 神谷夏樹 英語W 206点

そして、展開する英語Wの召喚フィードルと現れる私の召喚獣。
これでこの戦闘の決着がつくまで相手が用意した長谷川先生はフィードルを展開することができません。そして、召喚しなければ相手は敵前逃亡で失格です。

「落ち着け！ あいつが召喚したってことは他の奴らは召喚してこねえ！」

「そうか！ 全員で連携してさっさと潰すぞ」
試獣^{サモン}召喚』

そして、見事な連携で私に迫ってくるBクラスの生徒たち。でも、こっちは戦死覚悟であなたたちを潰しにかかっているんですよ！

『神谷さんの援護だ』
試獣^{サモン}召喚』

そして、Fクラスの皆が私に迫っていた敵を対処してくれます。

「なっ！ こいつら戦死が怖くないのか！？」

「おらあ、死ねえ！ さつさと死ねえ！」

「俺の妹ブレイのために死にやがれえ！」

「いや！ 勝つのは俺だあ！ ツンデレっ娘おー！」

私の演奏下で召喚してきたという事実と謎の気迫、色をつけるなら桃色の気迫とでも言いましょうか？ それによって怯んだＢクラスは終始押され続け、あつという間に決着がついてしまいました。こういうときのウチのクラスって本当に強いですね。

「おっしやあー！ 二人倒した俺のシチュエーションだあ！」

「待てやあ！ 俺がギリギリまで減らしたのを横から掠め取ったんじゃないか！ 一番点数の高い奴を相手してたんだから神谷さんはスーッ姿だあ！」

「ふざけんな！ 俺が神谷さんの演奏を邪魔しそうな奴を積極的に倒し続けたんだから、ツンデレ風な渡し方だあ！」

うーん。こんな集団に倒されただなんて思うのは嫌でしょうねえ。少しかだけ相手の生徒に同情します。ただ、こう口論していても決着がつきそうにありませんね。仕方ない。

「皆、私の予想よりずっとよく戦ってくれたよ。実際、戦死者も出なかったし。そんなんじや優劣なんてつけられないから、公平にジャンケンで決めてよ」

「おらあ！ ぜってえ負けねえぞ。ジャンケンポオン！」

「てめえ！ 今の絶対後出しだろ！」

まあ、彼らのことは決まるまで放っておきましょうか。すると、もっちーが話しかけてきます。

「見事にあいつらの手綱を握ってるな。この魔性の女め」

「ちよっ！？ 何それ！ すっごく人聞きが悪い。私はそんな悪女じゃないよ！」

「自覚がない分余計にたちがわりい。そういえば、今回の作戦であんな放送をする必要があったのか？ ウチの主力選手だし、お前単体でも結構効果があったと思うが」

「だって、代表っていう餌なら絶対に釣れるし、代表は居場所を明確にするルールがあるからにしまーも場所が分かりやすいでしょう？」

「奴なら何の情報もなしにたどり着きそうだがな。それより、自然にしすぎていて気づかなかったが、お前はいつまで俺の手を握っているんだ？」

「ん？ ああ、ごめん。作戦に集中しすぎていて気づかなかった。今手を放すよっ！？」

もっちーと放している途中に視線を感じて廊下のほうに急いで視線を向けます。すると扉から身を翻している黒髪に日本人形のように整った顔立ちの人物が一瞬目に止まります。

「どうした、夏樹？」

「あれって、霧島さん？」

「んあ？ 翔子がどうかしたんだ？」

「なんか視線を感じてね。でも、まさかね。あんな目で霧島さんに見られる覚えが無いし。っと、ごめんごめん。手だったよね」

本当にありえないですよ。霧島さんが私のことをあんなライバルを見るような目で見るなんて。

その後、私たちは明日の開戦時にもっちーが本陣から始められる

ように教室教室に戻りました。そうそう、結局明日のお菓子を渡すときはセーラー服でツンデレ風っていう私にとっては楽なものになりました。

第二十一話：ごめんね、もっちー♪（後書き）

ちなみにこの小説ではアニメ版のように補習担当教員である鉄人はどんな科目でもフィールドを展開できるようにしています。

夏樹「それはいいんだけど、仕込とか放送の準備の説明は？」

仕込みは放送用のテープを新野先輩に渡しておくことと、自分が3年C組の前にきたら次の休み時間にその放送を流してくださいってお願いしておくことです。

夏樹「携帯が使えると楽だったんだけど、試召戦争中は使用不可だもんねえ」

一応、これで作中に出ていない裏話は話したと思いますが不明な点、おかしい点があったら質問していただければ答えさせていただきます。

夏樹「それではこれからもよろしくお願いします」

第二十二話・夏樹の禁句とBクラスの罖（前書き）

糖分摂取魔様、感想ありがとうございました。

最近感想が減って、少し寂しいですね。いっぱい感想がある小説が羨ましいです。まさか、最近クオリティーが落ちた！？

夏樹「更新のペースもあるんじゃない？ やっぱり週に2、3話は更新したほうがいいのか。今は週一、二週に一話、酷いときは月一じゃない」

ちよつとの間は時間が取れるから小説に力を入れたほうがいいのかも。小説の話ですが、今回はちよつと設定を変えている部分があります。

夏樹「具体的にはもっちーがCクラスに行く前に代表が誰か知っていた使用になっています」

今回は少し量が多いですが、二十二話始まります。

夏樹「今回は全編、もっちー視点となっています」

第二十二話・夏樹の禁句とBクラスの罠

雄二 side

「……ここはどこ？」

「よう、やっと目が覚めたか」

島田を怒らせて今まで気絶していた明久^{バカ}がようやく目を覚ましやがった。こいつといい、島田といい戦況を悪い意味で引つ掻き回してくれる。夏樹みたいな冷静な小隊長タイプがいてくれて本当に助かったな。

「あれ？ 雄二。なんで僕教室にいるの？」

あ？ こいつ何言ってるんだ？ ……ああ、夏樹の話では不意打ち気味の一発で意識を刈られたらしいからな。殴られたのにも気づかずに気絶したのか。

「顔を何発か殴られて廊下で気絶しているんだから心配したんですよ」

「試召『戦争』じゃからといって、本当に怪我をする必要はないんじゃないぞ？」

とりあえず、夏樹は俺以外の奴には誰があいつを殴ったかは言っていない。なんでも島田の名誉のためらしい。まあ、既に普段の態度がそんな隠蔽でどうにかなるもんじゃないけどな。

「別に心配しなくても大丈夫だよ。当たり所が悪かっただけで普段に比べればずっとダメージはないし、半分くらいはあっきの自業

自得なんだから」

流石の夏樹もこのところ仕事量が増えてイライラしてるみたいだな。いつに無く辛辣な言葉だ。どうやら夏樹の態度で明久も何があったか思い出したようだ。気まずそうな顔してやがる。

「あ、あはは。ま、まあ、この話は良いや。それで試召戦争はどうなったの？」

明久が起き上がりながら秀吉に現在の状況を聞いた。気絶していたならそうだろうな。

「今は協定通りに休戦中じゃ。続きは明日になる」

「戦況は？」

「一応計画通り教室前に攻め込んだ。だが、予定より少ないとは言えこちらの被害も少なくはない」

とりあえずバカでも小隊長として動く男だから俺も戦況説明に加わる。説明して思っが、夏樹がウチのクラスに来た影響はやはり大きいな。予想していた被害よりは大分少ないし、撃破数も多くなっている。

「ハプニングもあつたけど、今のところ順調ってわけだね」

「まあな」

戦況についての感想を述べた明久にこう答えたが、相手は根本だから安心はできない。まだ何かを考えているはずだからな。

「……………（トントン）」

「お、ムツッリーニか。何か変わったことはあつたか？」

根本の次の策について考えていると不意に肩を叩かれた。視線を向けるとそいつは情報係にしていたムツツリー二だった。そして、その報告を受けたわけだが。

「Cクラスの様子が怪しいだと」

「……………（コクリ）」

あいつらがAクラスを狙うような冒険を犯すはずはない。だとすると、

「漁夫の利を狙うつもりか。いやらしい連中だな」

「雄二、どうするの？」

俺が自分の考えを口に出すと明久が俺に意見を求めてきた。

「んー、そうだなー」

作戦を考えながら時計を見てみると四時半であつた。まだそんなに遅い時間じゃないから教室にも大分生徒が残っているだろうな。

「Cクラスと協定でも結ぶか。Dクラス使って攻め込ませるぞ、とか言つて脅してやれば俺達に攻め込む気もなくなるだろう」

「交渉が決裂しても実際に攻め込ませたりしちゃダメだからね。いくらなんでもDクラスの人たちが可哀想だし」

「大丈夫だよ、夏樹。相手は僕たちが勝つなんて思っていないだろうからきつと上手くいくよ」

Dクラスに戦後交渉で何を言ったのか知らない夏樹はそういう手段があると思つて注意してくるが、本当はDクラスを動かす理由は

なくなつたから当然ブラフだ。だが、この程度のブラフでも協定を結ぶのは難しくないだろう。

「よし。それじゃ今から行ってくるか」

「分かった」

「そうだね」

俺に続いて夏樹と明久が立ち上がる。おっと、一応交渉が失敗したときの保険は残しておかないとな。

「秀吉は念のためにここに残ってくれ」

「ん？ なんじゃ？ ワシは行かなくて良いのか？」

「お前の顔を見せると、万が一の場合にやろうとしている作戦に支障があるんでな」

「よく分からんが、雄二がそう言うのであれば従おう」

「じゃ、行こうか。ちょっと人数少なくて不安だけど」

明久の言葉で俺、明久、夏樹、姫路、ムツツリー二というメンバーでCクラスに向かう。

「あつ、神谷さん。島田はまだもう少し時間がかかりそうだぞ」

「本当にしまつちには悪いことしちゃったなあ」

教室を出たところで島田の様子を見えるように頼んだ須川が帰ってきた。その須川を明久が誘っていたがおそらく盾扱いするつもりだな。まあ、俺としても盾が多いのは助かるし、文句は無いな。

「そう言えば、むつつー。Cクラスの代表ってどんな人なの？」

Cクラスに向かう道すがら夏樹がムツツリー二に質問していた。

だが、口数の少ないあいつの説明よりは俺がしたほうがマシだろう
と思い、俺が代わりに説明する。

「ああ、Cクラスの代表は小山友香だ。バレー部のホープらしいか
ら聞いたことくらいはあるんじゃないか？」

「へー、小山さんなんだあ」

「面識があるのか？」

「話に聞いたり、遠目にチラッと見たくらいだよ」

「お前って付き合いやすい性格だし、結構顔が広いと思っていたん
だがな」

そう言つと、夏樹は陰のある笑顔を使って俺から目をそらす。

「……女の子との付き合い方が良く分らない」

「……お前も女だろうが」

「ちゅ、中学校時代は女の子の友達が全然いなかったんだよ！」

マジで意外だな。コイツはたくさんの友達に囲まれているイメー
ジなんだが。だが、そう言えば一年の頃は大抵俺らとつるんでいて、
他の奴といるのはあんまり見たことなかったな。そう思っていると
明久が割り込んでくる。

「中学校時代の夏樹は女子からの人気が凄くてさ。ファンクラブと
か親衛隊みたいなのがたくさんあったんだよ。実際、ウチの学校に
もイケメンで部活のエースとかってファンクラブができて当然って
男子がいっぱいいただけど、それをあわせても中学で5本の指に
入るくらいの人気だったんだから」

「そんなんなら逆に女子との付き合いに慣れてそうだが？」

「……その子たちね。何を勘違いしたか私を神聖視して、不可侵条
約みたいなものを結んじゃったみたいでさ、全然近づいてこなかっ

「ただよ」

「そういえば、ファンクラブ以外の子で何人が告白してきた子がい
たよね？　じゃあ、今回も夏樹の色仕掛けで――」

明久がそう言いかけると、夏樹がすばやく動いて明久を壁際に追
い詰めて頬に優しく手を添えた。しかし、なぜか俺は鋭い爪が明久
の頬に突きつけられている光景を幻視した。

「あつきー？　私そういう冗談は大嫌いだなあ」

あくまで穏やかな声で明久に告げる。夏樹は俺たちに背を向けて
いるので表情は分からないが、明久の表情がほとんど恐怖に歪んで
いるのを見ると逆に背を向けていてくれて助かったと思う。

「申し訳ありませんでした、夏樹様。調子に乗りすぎました」

うん。夏樹にそういう話題は禁句タブーだな。

まあ、そんなトラブルもあつたが無事にCクラスに到着した。

「Fクラスの坂本雄二だ。このクラスの代表はいるか？」

俺がCクラスに入りざまに教室にいる全員に告げた。すると、俺
たちの前にまじりつけの無い黒髪をベリーショートにした気が強そ
うな女子が出てきた。Cクラス代表の小山友香だ。

「Fクラスが何の用かしら？」

「Fクラス代表としてクラス間交渉に来た。時間はあるか？」

「クラス間交渉？　ふうん……」

なんだ？　ずいぶんといやらしい笑みを浮かべていやがるが。まあ、こうなったら考えてもしょうがない。このまま交渉を進めるしかないんだからな。

「ああ。不可侵条約を結びたい」

「不可侵条約ねえ……どうしようかしらね、根本くん？」

小山は振り返り、教室の置くにいる奴らに声をかけた。なに、根本だと！？

「当然却下。だって、必要ないだろ」

「なっ！？　根本君！　Bクラスの君がどうしてこんなところに！」

取り巻きを連れて現れたのは、現在の俺たちの敵であるBクラス代表の根本恭二。畜生！　はめられた。明久が騒いでいるが無駄だろつ。全部相手の計算ずくだ。

「酷いじゃないかFクラスの皆さん。協定を破るなんて。試召戦争に関する行動を一切禁止したよな？」

「何を言って——」

「先に協定破ったのはソツチだからな？　これはお互い様、だよな！」

根本が告げると同時に取り巻き立ちが動き出した。そして、その背後には数学の長谷川教諭の姿が隠されていやがった。

「長谷川先生！　Bクラスの芳野が召喚を——」

「させるか！　Fクラス須川が受けて立つ！　試獣^{サモン}召喚！」

俺に対して攻撃しようとしたBクラス生を須川が身代わりで受けた。いい判断だ、須川！

「僕らは協定違反なんてしていない！　これはCクラスとFクラスの――」

「無駄だ明久！　根本は条文の『試召戦争に関する一切の行為』を盾にしらを切るに決まっている！」

「ま、そゆこと」

「へ理屈だ！」

「へ理屈も立派な理屈の内ってな」

「明久、ここは逃げるぞ！」

「くそっ！」

俺たちは戦闘を行っている須川に背を向け、Cクラスから離脱しようとして駆け出す。

「逃がすな！　坂本を討ち――」

「全員、止まれえ！！」

根本の号令を遮って女の声が大音声で響き渡る。その声に驚いて根本はおろか俺たちも動きを止めてしまった。というか、普段と調子が違うがこの声は……

「戦闘をする前に全員私の話を聞いてもらいます」

その声を聞き、離脱しようとした俺たちが振り返り再び教室に視線を向けるとそこには予想通り夏樹の姿があった。しかし、その顔には普段の温厚さはかけらも無く、睨み付けるような鋭い目つきをしている。それに、声にも硬さがあっていつもと少し違う。

「な、なんなんだよ。お前らが協定を破ったのは間違いないだろう」

Fクラスの戦力を調べるときにウチの主力である夏樹についてもある程度調べたんだろう。根本の奴も評判との違いに戸惑っている。

「だから、協定違反をしたのは――」

「明久は黙ってて。今は私が話す」

ここぞとばかりに反論しようとした明久を夏樹が制した。何をする気かは知らんがここはあいつに任せるしかないだろうな。そう判断していると夏樹が真剣な表情で長谷川教諭に顔を向ける。

「長谷川先生。根本君の言うとおりFクラスは条約に違反してしまつたようです。申し訳ありませんでした」

『夏樹！』

「神谷さん！」

いきなりこちらの条約違反を認めた夏樹にFクラスのメンバーが悲鳴を上げる。逆にBクラスの連中やCクラスの一部はニヤニヤしている。

「それでは自分たちの非を認めるんですね？」

「はい。これでは迎撃されても仕方が無いですね」

「はっ、Fクラスの中でもお前だけは物分かりがいいじゃねえか」

その言葉を聞いた夏樹は笑みを作る。

「では、これは迎撃と認めるんですね」

「はあ？ 当たり前だろうが。お前らの条約違反に「その条約、こう一回、正確に読み上げてもらっていいですか」ああ？」

台詞を遮られた根本が苛立たしげに夏樹を睨む。しかし、夏樹はそんなものを意に介さず涼しい顔を浮かべている。

「うち。『試召戦争に関する一切の行為を禁じる』だ。これでいいか？」

「長谷川先生。それでいいですか？」

「ええ、そう聞いていますね」

「お前何がしたいんだ。今ので自分たちの不利が明らかになっただけだろう」

確かにそうだ。条約を確認したところで事態は一向に好転しねえ。

「じゃあ、なんであなたたちは迎撃できたんでしょうか？」

はっ！ その手があったか。こりゃあ、ひよつとするとひよつとするかもしれねえな。俺は夏樹の意図がなんとなく理解できたが、他は理解ができないって顔をしていやがる。思った以上に策士だな、夏樹。

「だって、おかしいじゃないですか。試召戦争が停戦状態なのにFクラスを迎撃するだけの戦闘員、フィールドを張るための教師が他クラスであるCクラスにそろっているなんて」

「確かにそうだな。俺たちが逆の立場ならここで迎撃なんてできなかっただろうぜ」

夏樹の話に俺も加わり一気に畳み掛ける。これは勢いの勝負だ。

「お前ら何を言って「私たちを迎撃するには伏兵を置いておく以外に方法はないって言うてるんです」」

「なあ、根本？ 伏兵の配置だつて立派な戦争行為だよな？ 一切の行為を封じているのに伏兵を配置していいのか？」

「き、貴様何を言つて——」

「ここで問題になるのは時間ですよ。私たちがCクラスと停戦協定を結ぼうとしたときには既にこの教室にはあなたたちはいた。つまり、私たちよりも前にあなたたちが協定違反をしていることになる」

「友香は俺の彼女なんだ。別に俺らがCクラスにいたっていいだろ」

「お前は友達と教師を連れて彼女に会うのか？」

「お、俺たちが伏兵として潜んでいたって証拠はあるのかよ！」

「ありませんよ。ですが、実際伏兵として機能しているじゃないですか」

「だからよ。俺たちもお前らの伏兵を許すから、お互い一回の違反つてことで水に流さねえか？」

「それを拒むなら、長谷川先生にどんな風に言われてここに連れてこられたのか、Cクラスの人間に何であなたたちが教師連れでここにいるのを認めたのか徹底的に詰問して、どちらの協定違反が先か明らかにしますよ」

「根本君、どうなんですか。事と次第によつては君に質問しなければならぬことがありますよ」

俺たちの雰囲気の流れで、長谷川教諭も根本を疑いだした。よし、これで詰んだな。

「……確かに紛らわしいことをしてしまったな。今回のところはお互い水に流すことにしよう」

根本は苦々しげな表情で帰っていった。教室を見てみると小山も悔しげな表情をしている。危ない綱渡りだったけど、こんな表情が見れるなら案外悪くなかったかもな。それにしてもさっきの夏樹は

凄かったな。あれじゃあ、女子のファンクラブができるわけだ。…夏樹、残念だったな。多分、この学校でもお前のファンクラブができるかもしれねえぞ。

「凄いですよ。夏樹ちゃん」

Cクラスの教室を出てFクラスに向かっていると姫路が夏樹に賞賛を送っていた。確かに俺も礼を言ったほうがいいかもな。

「助かったぜ、夏樹。まさか、お前があそこまで頭が回るとは」

「流石、神谷さん！ 余裕のやり取りでしたね」

口々に夏樹を褒めていると、いきなり夏樹が膝をついた。一体どうしたんだ！？

「こ、怖かったあゝ」

先ほどの真剣な表情はなりを潜め、不安げな表情を浮かべている。

「ど、どうしたのさ、夏樹！？ あんなに余裕のやり取りだったじゃない」

「よ、余裕なんてないよ。あんなの根本君以上のへ理屈で論理もガタガタ、冷静になって聞き直せば穴だらけの話なんだから。アレは表情や雰囲気場で場を混乱させて誤魔化しただけで、もう一度やれって言われても上手くいく自信なんてないよ。もっちー！ 代表なんだからしっかり背後関係は調べておいてよね！ 何のためにむっつーを情報係に使ったのさあ！ 今野で絶対寿命が何年か縮んだよ」

「はっはっは。まあ、上手く言っただからいいじゃねえか。でも、

良くあんな理屈を思いついたな」

「ヴェニスの商人」

「は？」

ヴェニスの商人っていうとあれか。確かシェイクスピアの喜劇だったか。

「学芸会の劇で唯一女の役をもらったのが『ヴェニスの商人』の裁判長だったから何度も読み込んで頭に内容が染み付いてて、何とか活用できたんだよ」

「なるほど。そういえばあの話はいったん要求を呑んでからその要求に無理やり穴を作って突っぱねるって話だったな」

まあ、なんにしても夏樹がいてくれて助かった。正直俺ではあんないったん相手のへ理屈を受け入れるなんて発想は出てこないからな。だが、こうなると秀吉に活躍してもらうしかないんだが、夏樹は反対するだろうからな。一体どうやって夏樹を遠ざけたものか。

「あつ、そうだ、もっちー。明日の朝はもっちーと一緒にBクラスを倒したときの約束である時のメンバーにお菓子をあげるのにいったん保健室に行きたいんだけど、何時なら大丈夫？」

「んあ！？ あ、明日の朝か。それなら八時二十五分から二十分くらい抜けてて大丈夫だ。ゆ、ゆ、ゆつくり渡してやれ」

「どうしたの？ 変なもっちー。まあ、いいや。着替えもあるからその五分前に抜けても平気？」

「ああ、その位はかまわない」

「ありがと、もっちー」

まさか、こちらから何かする前に夏樹のほうから抜けるつもりでいたとはな。Dクラスの戦後交渉といい、今回といい、かなり運が

いいな。

だが、このときの俺は今まで運が良かったつけを後で払わされることになるということをまったく知らなかった。

第二十二話：夏樹の禁句とBクラスの罠（後書き）

今回は結構長くなりました。それなので引き逃げ気味に夏樹の明久への注意（という名の脅し）で切って半分にしうとも考えたのですが、実際長さ的にはどうなのでしょう？

夏樹「こんなのよりも長い人はいるんだからこのくらいは大丈夫じゃない？」

そして、今回の夏樹の説得劇。これをやりたいがために美波の名前呼びイベントを前にもって行きました。

夏樹「一応私は学芸会ではずっと『眠り姫』の王子とかロミオとか男の役ばかりだったっていう設定です」

前書きでも書いたとおり最近感想が減っているのでまた感想が増えるようにがんばらないと。

夏樹「ちなみに現在アンケートも実施しているので今後の展開に希望がある方はぜひとも投票してくださいね」

そして、勘のいい方はお気づきでしょうが、小山さんアンケートが？になったら今回のイベントが結晶の種になる予定です。

夏樹「それでは、これからよろしくお願いします」

第二十三話：神谷家の日常（前書き）

まあ様、糖分摂取魔様、感想をありがとうございます。最近、アクセスも感想も減っているので本当に嬉しいです。

今回はオリジナル展開でBクラス戦前半の後の日常編を書いてみました。この話で夏樹の家族についての性格が少し分かると思います。

夏樹「読者の皆さんはこんな話より戦争の続きを見たいんじゃない？」

大丈夫。その辺は理解してるから今週中にできれば2本、最低でも1本は投稿して戦争編を進めるから。

夏樹「では、学校とは違う私を見られて少し恥ずかしいけど、第二十三話始まりますっ」

第二十三話：神谷家の日常

CクラスでBクラスの罫を回避した後は特にやることも無いので皆すぐに帰宅しました。そして、私は我が家（世帯主＝春華）でくつろいでいます。さて、夕食後に忘れずにお菓子を作らないといけませんよね。何を作りましょうか？　そういえば、折角お菓子を作るんだからFクラスの皆だけっていう手もないよね。それならば、

「あつ、ねえさん。明日のお弁当のデザート代わりにお菓子を作ろうと思うんだけど、何かリクエストある？　明日の夕飯の買い出しのときに一緒に材料を買ってきたいからさ」

明日のねえさんのお弁当にもお菓子を入れてあげようと思って、春華がキッチンで料理をしている間に材料を買ってくるために携帯でねえさんに連絡をとりました。

『あら、珍しいわね。いつもはフルーツとかなのに』

「うん、明日学校に作って行かなくちゃいけなくなつてね。だったら、ついでにねえさんのお弁当にも入れようかなって」

『夏樹のお菓子はおいしいから嬉しいわ。そうねえー、何がいいかしら』

「ああー、もうちょっと考えてていいよ。春華にも聞くことあるから」

私は姉さんにそういうと台所にいる春華に声をかけた。

「ねえー、春華あー。今日の晩御飯って何？　あと、できれば明日のおかずも知りたいんだけど」

「はっはっは、夏樹は食い意地がはっているなあ。もう二日後の晩

御飯の心配をするとは」

「んな訳ないでしょ。明日のおかずを考えるからなるべくあんたのとかぶらないようにしたいだけ」

まったく。この男は妹のことをどんな風に認識しているんでしょ
うか。

「今日はマグロのカルパッチョで、明後日はあー、そうだな。冷し
やぶにでもするか」

「ずいぶん手抜きだね。ウチじゃあ料理の上手さだけが存在意義
がないのに」

「ああ、妹の愛が痛い」

春華^{バカ}が胸を押さえてわざとらしくショックを受けたような態度を
とる。いい歳した大人がそんな格好をするのははつきり言っ
てかなり鬱陶しい。

「いや、そうではなくてだね。最近あやめが体重のことを気にして
いるようだからヘルシーメニューで行こうと」

「へえー、そうだったんだあ。じゃあ、私もそれに倣って明日は豆
腐ハンバーグで、その次は煮魚でも作ろうかな」

「ああ、分かっているとは思うが、私とお前の分は多くよそうように
しておけよ。無論、私もそうするつもりだからな」

『あんたたち、言っとくけどさっきからの会話全部聞こえているか
らね？ 人の気にしていることを散々弄って。二人とも覚悟しとき
なさいよ』

春華と二人でこれからの献立について話していると地獄の底から
響いてくるような声が電話口から聞こえてきた。やばい！ 春華は
ともかく私までからかっていると勘違いされてる。

「ね、ねえさん、ごめんなさい。別にそんなつもりじゃなくて純粹にねえさんの役に立ちたくて」

『それは分かっているつもりなんだけど、体重管理とか全然気にしないあんたら兄妹に心配されると、上から見られているみたいでなんか癪に障るのよ』

「そ、そんなこと言われても」

『いいわよ、いいわよ。家の中では私だけが気を抜くと太る仲間外れですもんねえー。やっぱり明日はいつも通りフルーツでいいわ。前に流行ったフルーツ酵素ダイエットよ』

「こ、酵素ダイエットって。それ中年層向けのダイエットでしょ？ねえさん普通に若いんだからそんなの効かないって」

『うう、でもお菓子なんか食べたら太るじゃない』

「そういえば夏樹。確かあやめの帰り道にあるスーパーで小豆とイチゴが安売りしているぞ」

「じゃあ、ねえさん。明日のお菓子はイチゴ大福にするから帰り道で小豆とイチゴと、あとは白玉粉買ってきてよ。砂糖控えめでイチゴで甘さを出すようにするから結構カロリー低くできるし」

『ま、まあ、和菓子ならカロリーが低いし？ 夏樹のは特に美味しいからいいけど』

「じゃあ、ついでに豆腐とひじきとレタスと「豚肉も頼む」豚肉と里芋もお願い。言つとくけど豆腐は絹ごしじゃなくて木綿だからね。それと、豚肉は細切れとか切り落としとかの安い奴でいいよ。……こう言つとかなないとねえさん適当に買ってくるんだから」

『そ、そのくらいは言われなくても大丈夫だったわよ……たぶん』
「薄口醤油の方が濃口醤油より薄味だと勘違いした人が言っても説得力はありません」

『うっ、でも、今回はちゃんと確認を取ったから大丈夫！』

「はいはい、期待して待ってます」

『見てなさいよ！ ちゃんと間違えずに買ってきてやるんだから！』

「……ねえさん。そんなの言うのは初めてのお使いのレベルだよ」

そう言っただけで電話を切ったけど、凄く不安だな。こんな不安を感じたことなくいつもは私が春華が買い物に行ってるんだけど、安売りしているスーパーはかなり遠くにある。それでもただ行くだけならそれほど苦にならないのだが、買い物袋を持って帰ってくるのはきついし、ウチにある唯一の車にはねえさんが乗っている。

ねえさんとの電話が終わるとそれを見計らったかのように布巾で手を拭きながら台所から春華がリビングに入ってきました。

「夏樹。折角小豆と白玉粉があるんだから善哉でも作らないか？明日の晩飯のときのデザートにできるだろ」

「別に作るのそんなに手間じゃないから構わないけどさ。でも、本音は？」

「多めに作っておけば昼間私が食べられるじゃないか」

「甘いものが食べたいんならお椀に片栗粉と砂糖入れといてあげるから、勝手に湯入れて葛湯でも飲んでなよ」

「ああ、愛が感じられないぞ、妹よ」

「安心してよ。ここ数年あんたに愛情を向けたことはないから」

調子に乗って注文してきた春華に冷たく言い放つと春華は棚の上の写真立てを手に取り、それに話しかけた。

「父さん、母さん、すまない。どうやら私はあの子の育て方を間違えてしまったようだ」

「分かっていると思うけど、私を育てたのはばあちゃんだからね。何をあたかも自分が育てたかのように言ってるのさ。それと、仮に私の性格が歪んだとしたらあんたが変にかまっていたからだよ」

「ああ、昔は素直な可愛い子だったのに。そう、尊敬する人の作文

で尊敬する人にお兄ちゃんを選ぶくらいに」

「そこ、勝手に記憶を捏造しない。私が尊敬する人の作文で選んだのは小学校のときがばあちゃん、中学校のときはねえさんだよ」

「はあ、ずいぶんと私とあやめとで扱いに差があるじゃないか。お兄ちゃんは悲しいぞ」

「対偶良くしてほしいなら、ねえさんみたいに外出て働いてきなよ」

まったく、いい歳した大人がほとんど一日中家の中にいるなんて恥ずかしくてしょうがない。

「待つんだ、夏樹！ 人を二トみたいに言うんじゃない。私はしっかりと家に生活費を入れてるじゃないか」

「デイトレででしょ？」

「デイトレだって立派な仕事じゃないか」

「……別にデイトレになるのが悪いとまでは言わないけど、私は好きじゃないんだよ。なんか真面目にやっている人をバカにしているみたいで」

正直デイトレで稼いでいる人には失礼だとは思っけど、私はどうしてもデイトレというスタイルが好きになれない。だから、身内である春華がそれで稼いでいるのを見てるとモヤモヤする。まあ、これは私のわがままだから春華に無理強いするつもりはないけどね？ それに、どうせ春華の性格は元から悪いからデイトレ以外の職業でもねえさんよりはぞんざいな扱いになってるだろうし。そんなことを考えていたが少し違和感を感じる。普段の春樹ならもっといろいろとからかいを入れてくるはずなのに。そう思って春華のほうを見ていると、なにやら真剣な顔をしている。……ちよつと、言い過ぎたかな。

「ああ、ごめん、ちよつと言い過ぎた。仕事は個人の自由なんだし、

流石にデイトレのことまでどうこう言っべきじゃなかったよ」

「学校でなにかあったのか？」

はあ、コイツは何でこういうことには鋭いんだろう。

「ん、ちよつとね。皆の尻拭いとかでやることが少し多くてイライラしてただけ。イライラをぶつけてごめん」

「なんだ、そんなことだったのか。てつきりコスプレ好きの友達や性に奔放な友達、BL好きの友達とかができて可愛くあたふたしていると思っただが、実に残念だ」

「……一瞬でもあんたのことを見直した私がバカだったよ」

はあ、最近家でも学校でも疲れるな。……明日は少しでも穏やかな一日になるといいんだけど。

だけど、そんな私のささやかな願いは無慈悲にも打ち崩されるのでした。

第二十三話：神谷家の日常（後書き）

ちなみに勘違いがないように書いておきますが、別に夏樹は春華のことが憎い位に嫌いって言うわけではないですよ。

夏樹「嫌いだよ」

口ではこんなこと言ってますが、原作の明久と雄二みたいに普段は憎まれ口をたたき会っていても心の底では信頼しています。

夏樹「それは置いておいて今回入れようか悩んで結局入れなかったネタがあるんだよね？」

はい。夏樹の尊敬する人の作文のくだりで春華に「安心しなさい。私が提出前にしっかりと書き直しておいた」って言わせようか悩んだんだよね。

夏樹「でも、流石に漫画のまま過ぎるからやめたと。でも、元ネタ分かる人っているのかな？」

現役で呼んでた世代はシュレ猫より干支一回り前後上の世代だろうね。

戦争編の続きは現在鋭意製作中です。ただ、今回もそうでしたが、次もいつもよりは短くなるかもしれません。

それでは、これからもよろしく願います。

第二十四話：作戦成功とBクラス戦最大のミス（前書き）

糖分摂取魔様、感想ありがとうございました。

今回、バカテス二次のセオリーというものを思いっきり無視した展開を書いてみました。

なつき「まあ、テンプレをできるだけ回避するがモットーの小説だけど、この展開は賛否両論あるんじゃない？」

……貴様が勝手に動き出したくせに他人事みたいに言うな。実際、書き始める前の構想は他と大きな差はなかったんですけど、夏樹のキャラが確立しだすと勝手に動き出し、Bクラス戦とその後の展開が大きく変わりました。

夏樹「今回の話が読者の皆様に気に入られるか、不評を買うかは分かりませんが、作者なりに一生懸命に書いたので温かい目で見てやってください」

それでは波乱の源、第二十四話始まります。

第二十四話：作戦成功とBクラス戦最大のミス

明久side

「じゃあ、私たちはちよつとだけ抜けるね。もっちーの分は教卓のところに置いておくから時間がある時にでも食べてよ」

昨日雄二に伝えたとおり夏樹は何人かの男子を引き連れて保健室へと向かっていった。なんでもコスプレを逃れるのは大変だけど、写真撮影の取り締まりを手伝ってもらうにはこれ以上ない人がいるらしい。それにしても夏樹のお菓子か、なんて羨ましいんだ。僕なんて砂糖以外の甘味なんて滅多に食べられないのに。

「よし、昨日言っていた作戦を実行する」

夏樹が教室を出たのを見計らって雄二がそう告げた。

「作戦？ でも、開戦時刻はまだだよ？」

開戦時刻は九時なのに対して今はまだ八時半前だ。そもそも、開戦に時間があるから夏樹が抜けても平気って言ってたのに。

「Bクラス相手じゃない。Cクラスの方だ」

「あ、なるほど。でも、夏樹はいなくていいの？」

「ああ、夏樹は性格上反対しかねないからな」

「まあ、夏樹は真面目だもんね。それで何をすんの？」

「秀吉にこれを着てもらう」

そう言って雄二が取り出したのはうちの学校の女子の制服。……

どうやってそんなものを手に入れたんだろう。雄二、君に一体何があつたんだい？

「それは別に構わんが、ワシが女装してどうするんじゃ？」

いや、秀吉。そこは男として構おうよ。普段は散々自分は男だつて行っているんだから。まあ、秀吉が女子の制服が似合うのは否定しないけど。もし、そんな服を着たらますます女の子らしくなくて、Aクラスにいる双子の姉と見分けがつかなく――

「秀吉には木下優子として、Aクラスの使者を装ってもらう」

なるほど、それが狙いか。

夏樹が言うには違いは一目瞭然らしいけど、一般人の目から見れば秀吉と木下優子さんは一卵性双生児かと思うほどに良く似ているだから、彼女に化けてAクラスとして圧力をかけるということか。

「と、いうわけで秀吉。用意してくれ」

「う、うむ……」

雄二から制服を受け取り、その場で生着替えを始める秀吉。

なんなんだろうこの胸のときめきは。相手は男なのに目が離せない！

「……………（パシャパシャパシャパシャ！）」

ムツツリー二は指が擦り切れるんじゃないかというくらいに凄い速さでカメラのシャッターを切っている。

良かった。ときめいているのは僕だけじゃないみたいだ。

「よし、着替え終わったぞい。ん？ 皆どうした？」

きつと僕らは皆とても複雑な表情をしていることだろう。

「さあな？ 俺にもよくわからん」

「おかしな連中じゃのう」

いや、絶対におかしいのは秀吉の外見だって！ どうしてそんなに色っぽいんだよ！ まあ、こんな光景を見れたなら夏樹のお菓子を食べ損ねた埋め合わせにはなったかもしれないね。

「んじゃ、Cクラスに行くぞ」

「うむ」

雄二が秀吉を連れて教室を出て行く。

「あ、僕も行くよ」

その後を慌てて追いかける。

Cクラスの前で僕と雄二は物陰に隠れて、秀吉の様子を伺うことにした。Aクラスの木下優子さんと僕たちが一緒にいるはずがないよね。それにしても、秀吉はあんまり乗り気じゃなかったけど、大丈夫だろうか？ 今も気の重そうな表情をしていて不安になる。

「心配だなあ」

「シッ。秀吉が教室に入るぞ」

雄二が口に指を当てる。ここからは声は聞こえたりしないだろうけど、念の為指示に従うことにした。

秀吉がCクラスの扉を開ける音が聞こえてくる。

『静かになさい、この薄汚い豚ども！』

……うわぁ。

「流石だな、秀吉」

「これ以上ない挑発だね……」

もう何も言わなくてもCクラスの敵意はAクラスに向かっていくんじゃないだろうか？

『な、何よアンタ！』

『話しかけないで！ 豚臭いわ！』

今の高い声は昨日会った代表の小山さんだろう。怒っているのが顔を見なくても分かる。でも、それに対する秀吉の返答。……自分から来たのに、ツツコミどころが多すぎだよ。

『アンタ、Aクラスの木下ね？ ちょっと点数良いからっていい気になってるんじゃないわよ！ 何の用よ！』

『私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならないの！ 貴女達なんて豚小屋で十分だわ！』

『なっ！ 言うに事欠いて私達にはFクラスがお似合いですって！？』

ちょっと待つんだ、小山さん！ 別にFクラスとは言っていないぞ！？

『手が穢れてしまうから本当は嫌だけど、特別に今回は貴女達を相応しい教室に送ってあげようかと思うの』

演劇部ってここまでできないとダメなのかな。それともうちの学校が異常なのかな。

『ちょうど試召戦争の準備もしているようだし、覚悟しておきなさい。近いうちに私たちが薄汚い貴女達を始末してあげるから』

そう言い残し、靴音をたてながら秀吉は教室を出てきた。

「これで良かったかのう？」

スツキリした顔で秀吉が近寄ってくる。

「ああ、素晴らしい仕事だった」

「Fクラスなんて相手にしてられないわ！ Aクラス戦の準備を始めるわよ！」

Cクラスから小山さんのヒステリックな叫び声が聞こえてくる。どうやらうまくいったようだ。……でも、なんだろうこの罪悪感は。

「作戦もうまくいったことだし、俺達もBクラス戦の準備を始めるぞ」

「うむ、ワシは着替えがあるから先に戻っておるぞい」

そう言って、秀吉は足早に教室に戻っていった。僕達ものんびり

している暇はない。あと十分で今日の試召戦争が始まる。あつ、そういえば。

「ねえ、雄二。夏樹も今日の作戦の要なんだよね？」

「ああ、今回こそは数学でしっかり点を取ってもらって、夏樹と姫路の二枚看板で突破したいからな」

「じゃあさ、Dクラスを使った作戦のこと話さなくていいの？」

「下手すると、あいつ激怒しかねんからな。話さないでやっちまったほうが戦争としてのダメージはないかも知れん」

「そうだよな。夏樹が室外機を壊すなんて作戦に賛成するはずないし」

後になって思えば、このときの僕たちは秀吉の作戦がうまくいったせいで浮かれすぎていたんだろう。小声とはいえ、こんなに大事な内容を廊下なんていう誰でも聞けるところで話すなんて。そしてその軽率な会話はある意味教師以上に聞かれてはならない人物に聞かれてしまった。

「……ねえ、それって一体どういうことなの」

静かな、それでいて不思議な力強さのある声が僕たちの後ろから投げかけられる。僕たちはその正体を理解しながらも、外れて欲しいと願いながら振り向いた。

「まさか、Dクラスとの設備入れ替えの代わりにそんな条件を押し付けたの？」

そこには最もそこにいて欲しくなかった人物——神谷夏樹がいた。

突然の事態に困惑して何も返せない僕たちに構うことなく夏樹は

追及を続ける。

「Bクラスを教室に押し込めるとかって作戦はそのための作戦なの！？ 何とか言つてよ、明久！」

「そ、それは……」

あだ名を使わない夏樹の本気の訴えに思わずたじろいでしまう。

夏樹は昨日みたいな演技で呼び捨てにすることはあっても通常状態であだ名を使わないことは滅多にない。あだ名をやめるのは何かしらで本気になつてるときだけだ。つまり、予想できたことだが今回は相当怒っているんだろう。僕が何も言えないでいると、代わりに雄二が口を開いた。

「そうだ。Dクラスには俺の指示したタイミングでエアコンの室外機を壊すことを条件に設備交換を行わないことにした」

「何で！？ 何でそんなことが必要なのさ！！」

「Fクラスの勝利のためだ。この作戦以外にBクラスに勝つ方法はない」

「ふざけんな！！ そんな方法で勝つて。それじゃあ、教室の設備を壊したBクラスとどこが違うのさ！ そんなんでFクラスの勝利だつて胸を張って言えるの！？」

「なんと言われようと、これがベストな作戦だ」

激昂してほとんど叫ぶように食って掛かる夏樹に対して、雄二は淡々と自分の考えを述べている。

「ねえ、明久。ううん。他の皆もこの作戦に賛成なの！？」

「えっ！？ あ、ま、まあ、反対している人はいないかな」

突然向けられた矛先に対して、慌てながらもしっかりと回答した。

「……もういい」

僕の答えを聞くやいなや、夏樹はうつむき、本当に小さな声を零した。

「もういいよ。皆の意見は分かった。私以外の全員が賛成しているならこれはFクラスの総意だし、私には何も言えない。でも、私はこんな作戦するのに協力なんてできない」

「おい、夏樹！」

「……我がまま言つてごめん。でも、もう無理だよ。私はもうこの試召戦争で戦わない。ううん、戦えない。私は抜けちゃうけど、がんばってね。二人とも」

夏樹はそう言つと、顔をうつむけたまま歩き出し、僕たちの顔を見ることなくFクラスへと向かつていった。

ど、どうしよう。雄二はどうやって夏樹を説得するか考えているみたいだけど、夏樹は意外に頑固な性格をしているから、本気で怒った以上少なくともBクラス戦で夏樹が戦うことは天地がひっくり返っても起こらない。

今までずつとうまくいつていたのに、こんなところで夏樹が降りちゃうなんて。この戦争はこの先、一体どうなっちゃうんだろう。……いや、弱気になっちゃダメだ。ここは夏樹が抜けても気にしないで、いつてくらいの気持ちで戦わなくちゃ。

僕はいまだに夏樹の説得法を考えて無駄な時間を過ごしている雄二を現実引き戻し、新しい布陣を考えさせた。なんとしても、夏樹抜きで勝利しなくちゃ！

第二十四話：作戦成功とBクラス戦最大のミス（後書き）

はい、まさかのメインキャラの途中離脱です。

夏樹「一応、シュレ猫が見た中ではメインで戦争していて途中で抜けるって言うのはなかったみたいだけど、前例ってあるのかな？」

次回もオリジナル展開なのですが、ちょっと独自解釈が入ります。そして、まだまだ、序盤（1巻）なのにドシリアスな展開になる予定です。

夏樹「楽しみに待っていていただけると嬉しいです」

ちなみに今アンケートをやっているんですが、投票が少ないので同数の意見があって困っています。

夏樹「興味のある方はぜひとも投票をお願いします」

それでは、これからもよろしくお願いします。

第二十五話：拳を向ける先（前書き）

まあ様、糖分摂取魔様、感想ありがとうございます。

今回はちよくちよくある完全オリジナルの展開で、多分に自己解釈が入っております。前回以上に不評が来そうで非常に怖いですが、しかし、夏樹が勝手に動き出したんだから仕方がないんです。今後、時々シュレ猫の指と思考が暴走する可能性があるので夏樹のキャラに歪みを感じたら感想に書いてくださるとありがたいです。自分では意外と気づきにくいので、言っていたら歪みの小さいうちに修正できると思います。

それと、今回は初めて予約投稿というものを使ってみたので、成功するかという意味でもドキドキです。

それでは、ドシリアスな二十五話が始まります。

第二十五話：拳を向ける先

あの後、Fクラスに着く前に追いついたもっちーに戦争に出ない理由を体調不良で通すようにして欲しいと懇願された。今までクラスの核として戦争に参加してきた私が離反するとなると士気が大きく下がるからだろう。その点、体調不良ということにしてあげば、それほど士気が下がることはない。それに、もっちーが言うには私に無理をさせないようにがんばることでもいい格好をしようとむしろ士気が上がる可能性があるらしい。まあ、自分の我がままで戦争に大きな不利益を与えるんだから、その程度のことには従おうと思う。

そのため、私はクラスの皆の前に顔を出すわけにはいかず、隣の空き教室で一人待機していました。一応壊れかけとはいえ卓袱台が何台かあったのでそのうちの一台の前に座り、頬杖を着いて外の景色を眺めています。

戦争が始まって少し経ちましたけど、戦況は一体どうなっているのでしょうか。本当に、なんでこうなっちゃったんでしょう。私はただ皆で協力して戦いたかったただけなのに。

私がそんなことを考えていると誰かが教室に入ってくる気配がします。それに気づいて視線を向けると、そこにはもっちーの姿が。そして、もっちーは適当な卓袱台を私の近くに置き、それに腰掛けます（行儀が悪いな）。ですが、正直顔を合わせにくい私は顔を彼とは逆の方向に向け、卓袱台に突っ伏します。

「はあ、子供っぽいからそんな風に拗ねるなよ」

もっちーがため息をつき、呆れたように話しかけてきます。

「別に拘ねてないですうー。ただ眠いだけですうー」

「……まじで子供じゃねえか」

不機嫌丸出しの私の返答にもっちは更に呆れたようです。

「確かに卑怯な作戦だし、お前に黙っていたことは本当に悪かったと思う。だが、俺たちが勝つにはこの方法しかないんだ。そこだけは分かってくれ」

「ねえ、そんなにこの戦争で勝つのが大事？」

「はあ？」

さっきの取引を聞いてからずっと考えていたことを彼に投げかけます。

「何を当たり前なことを――」

「そもそも、あんたは何のためにこの戦争をしてるの？」

「それは始業式の時に話しただろう」

確かにあの時に彼の言葉は聞いた。でも、私は納得できない。いや、今日のことではなくなった。

「明久はさ、まだ分かるんだよ。あいつって良くも悪くもバカだからその瞬間の目の前しか見えないんだよね」

「まあ、あいつがバカなのは否定せんが」

「バカだから目の前の困っている人を自分の全力で助けようとするし、バカだから誰かを助けようと思ったらそれだけに集中してそれしか見えない。でもさ、自分がその人を助ける過程で傷ついていく人があるのが、自分と同じ理由で戦っている人の姿が見えてないんだよ」

「夏樹、それは……」

「分かってる。そんなバカなところが長所でもあるから親友でいるんだし、悲しいけど誰かの利益は誰かの不利益っていう摂理も理解してるからあいつのことを否定するつもりはないよ」

「あのバカと違って意外に現実主義だな」

「でもさ、あんたは別。あんたってこの戦争で一体何をしたいのかが見えてこないんだよね」

私の言葉にもつちーが訝しげな表情を浮かべる。顔を背けているので実際に見たわけではないが、雰囲気でなんとなく分かる。

「だから言っただろ？ この世の中が学力だけがすべてじゃないって証明したいって」

「うん。だからあの時はあんたの気持ちがあったと勘違いしてたし、そのせいで戦争内容も勘違いしてこんなことになっちゃった」

「勘違いだと？」

「そう、勘違い。私はてつきり……なんて言うのかな、とっさのひらめきとか作戦を考える軍師的な思考とか、団結力を発揮すれば学力が劣っても勝てるっていうことを証明して、勉強だけやって頭でっかちになることがすべてじゃない、もっというんな能力が社会には必要なんだって示したいんだと思ってた」

「別にそれで間違いじゃないが」

「でもさ、蓋を開けてみたらDクラス戦の決着は結局ひめひめの学力頼み。そして、今やってるBクラス戦では卑怯な戦法で戦って勝つつもりでしょ？ そんなんじゃ、周りの人にはひめひめの学力の高さとFクラスの卑怯さしか伝わらないじゃない。その後は、結局学力のない奴は学力の高い人に頼るしかないし、学力がないから卑怯な手に頼らざるを得ないって思われるだけ。これでどうやって学力が全てじゃないって証明するの？」

「だが、それでも俺は」

もっちは私の言葉になおも食い下がってくる。だったら、もう直球で行く。

「ねえ、坂本。あんたはさ、本当は誰を倒したいの？」

「何をおかしなことを言っているんだ。そんなのはAクラスの連中に決まっているだろう」

「わたしはそれはただの代替行為だと思ってる。あんたは本当はさ、自分自身を殴りたいんじゃないの？ ……ううん。ちよつと、ニユアンスが違うな。より正確に言うなら過去のあんたをぶん殴りたいんでしょ？」

「っ！？ ……言っている意味が分からん。そんな的外れな予想はお前らしくないな」

私の言葉に一瞬動揺するが、すぐに取り繕うような答えを返してくる。やっぱりそうか。

「元神童。その後は悪鬼羅刹。一体神童時代に何があっただろうね」

「……やめろ」

もっちは顔を俯かせて、静かな、しかし力強い声でつぶやいた。

「ウチの兄貴もさ、ガキの頃は神童って呼ばれてたんだ。いや、今だってその能力は健在だよ。だから、私も神童ってもてはやされている人間がどんなものなのかは理解してる」

「……やめろって言ってるんだろ」

もっちーのつぶやきが大きくなる。だけど、やめてなんかやるもんか。

「兄貴はさ、今でこそ道化みたいにバカやって人当たりのいい性格してるけど、昔は自分は何でもできるって神様気取りで、実際にほとんどのことはちよつとやったらできるようになってたんだ。でも、本当は誰よりも孤独で誰よりも弱かった」

「いい加減にしろっ！！」

もっちーは私の胸倉をつかみ上げ、無理やり立ち上がらせる。私は女子としては長身の方だけど、もっちーは男子としてかなり背の高い男なので、胸倉をつかまれたことで私は強制的に上を向かされてしまう。

「勝手にてめえの兄貴と俺を一緒にしてんじゃねえよ！」

「そして、私もそうだけど、本人が一番そのときの自分を嫌ってる。あんたも神童って呼ばれてたときの自分が大嫌いなんじゃないの？だから本当はその時の自分を殴りたいけど、そんなことはできないから学力によって優遇されているAクラスを倒すことで神童だったときの自分を超えたいと思ってる」

だけど、私はそんな虚勢に怯む事なく淡々と言い返す。

「的外れな推測をあたかも事実みたいに言ってるじゃねえ！」

「じゃあ、間違ってるでもいいよ。間違っているのを承知でアドバイスしてあげる。今のあんたがAクラスに勝っても虚しくなるだけだよ」

「てんで役にたたねえ話だが、一応言っておく。無駄な忠告ありがとうよ」

もっちーは凄みをきかせて睨み付けてくるが、そんな顔をされても全然怖くない。

「だってAクラスの皆は努力してあの位置に立っているだけで、何でもできる神童じゃない。そんなのは神童って呼ばれてたあんだだけ。つたらとづくに分かってるんですよ。ううん、違う。神童じゃなくともあんたが一番知ってるはずだよ。それとも、Aクラス代表の霧島さんは学力が全てで考えている人なの!？」

「な、なんでそこで翔子が出てくんだよ!」

「良く知ってるんでしょ? 二人の関係性は幼馴染ってとこかな?」

「一体どんな根拠がある」

「最初にアレ? って思ったのは昨日だよ」

「ああ? 昨日だと?」

そうして、私は自分なりの推理を語る。

「昨日、私が霧島さんを見かけたって言ったときに今みたいに『翔子』って呼んだじゃない。あんたが名前を呼び捨てにして、しかもそれが女子だとするとかなり近い間柄ってことでしょ? 実際去年のクラスメイトでも女子を名前で呼んだのは私だけじゃない。それも私とは明久みたいな付き合い方をしたからそうなったわけですよ。でも、霧島さんはそんなタイプだとは思えない。っていうことは昔からの知り合いってことだと思っただよ。それにそこまで考えたら、入学式のときに明久が愚痴ってたことを思い出した。多分、あのときの女の子が霧島さんなんですよ? もしかして、あんたが戦う理由には霧島さんが――」

「確かにそうだよ。こんなのは別に隠すわけじゃねえから言うが、俺と翔子は幼馴染だ。だが、後半は断じて違う。俺が戦うのは別にあいつのせいじゃねえ」

「だったら、それでもいいよ。でも、それで? あんたが見てきた霧島さんは学力が高いことを鼻にかけるような小さい人なの!」

「ふざけんな! あいつはそんな女じゃねえよ!」

「だったら!!」

激昂して怒鳴ってきたもっちゃんに負けないように、今日一番の大声を出して黙らせる。

「だったら、あんたはそんなバカにされて激昂するような大事な幼馴染をそんな卑怯な方法で倒して満足なの!? 本当に後悔しないの!？」

「……するわけねえだろ。俺はなんとしても学力が全てじゃねえって証明するんだよ」

そう言つと、胸倉をつかんでいた手を乱暴に離し、背を向けて歩き出す。

「まだ、話は終わってないよ」

「知るか。そんな的外れなアドバイス」

「今度のはアドバイスじゃなくて忠告。人はなにかをなそうと思つたらそれに見合う努力をしないとイケないんだよ。私は別に努力が全て報われるなんて甘いことは考えてないけど、努力もなしに何かを手に入れるなんてできないし、仮にできたとしたらそれは何か間違っているんだと思う」

「……それで」

もっちゃんに振り向くことなく続きを促す。

「だから、私は精一杯努力をして立派に咲けた人を大した努力もなしに潰すなんて許せない。そんなことになったら、私はあんたを一生軽蔑すると思う」

「……一騎打ちに臨むに当たってしっかりと復習しておく。これでいいだろう」

「……あんたがそれでいいならいいよ。でも、あんたが戦争が終わった後に後悔しないことを祈ってる。それと、できればこの戦争が終わった後も友達でいられたらとも」

もっちーも私と同じでかなりの頑固者だ。だから、自分の意見をなかなか変えることができないんだろう。でも、もしもこの戦争でAクラスに勝ったりしたら彼は絶対後悔する。願わくば、彼が戦争が終わる前に自分と向き合えますように。私は去っていく彼の背中を見ながら友達として本心から願った。

第二十五話：拳を向ける先（後書き）

うん。二十五話は夏樹と雄二の絡みでした。自己解釈を入れたというのは雄二の心境、特に試召戦争の動機についてです。これに関しても疑問を感じたら言ってください。不可能かも知れませんが、もしかしたらうまい方に修正できる可能性はわずかにはありますので。

これを書いてて思ったんですが、夏樹は明久の親友なのにやたらと雄二との絡みが多いですね。これはタグを追加すべきかも。

ちなみに以前書いた小さいけど重要な伏線というのは、翔子の嫉妬ではなく、雄二が『翔子』と呼ぶのを夏樹が聞くことでした。

この小説には今後もこのようなシリアスなオリジナル話やちょっとした自己解釈があるかもしれませんが、未永く見守って下さると嬉しいです。（最近、感想が減ってクオリティーや夏樹のキャラ、展開に不安を感じていますし）

それでは、これからよろしくお願いします。

第二十六話：二枚看板の不在（前書き）

まあ様、糖分摂取魔様、太陽の道化様、感想ありがとうございます。

今回は雄二が原作どおりの作戦を使うことで夏樹の穴を埋めようとしています。しかし、作戦は原作どおりなのですが、なまじ夏樹という切札の存在が頭にあるせいで心情的には原作よりも苦戦気味です。

それでは第二十六話が始まります。

第二十六話：二枚看板の不在

明久 side

「ドアと壁をうまく使うんじゃない！ 戦線を拡大させるでないぞ！」

秀吉の指示が飛ぶ。僕はその指示を聞きながら夏樹のことを考えていた。

今回夏樹が戦争に参加しないという事実は始めFクラス中に衝撃を与えた。学力こそ姫路さんがうちのクラスで一番だけど、撃破数としては夏樹が一番貢献しているし、夏樹の小隊指揮は群を抜いて上手かったから当然だ。いつの間にか夏樹は僕たちの試召戦争の中心に立っていた。それが抜けたショックは凄まじいものだろう。だが、そこは雄二^{ベテンシ}。

『夏樹は体調不良ながらもFクラスのことを心配していた。だからこそ、ここで活躍してあいつを安心させてやればあいつからの好感度は鰻上りだ！』

要約するとそんなことを言っていた。その効果は絶大で、僕や秀吉、ムツリーニ以外の男子はテンションだけなら昨日までより高くなっていた。流石はFクラス、単純だ。……って言うか勝手に人の親友をエサにしないで欲しいんだけど。

そのテンションと夏樹が庇った人員、夏樹の策で減らした敵のおかげで姫路さんが作戦のために温存しながらでも十分に力になれるはずだった。だけど、ここで新たな問題が発生した。姫路さんの様子がおかしい。

今回も総司令官であるはずなのに、今日は一向に指示を出す気配がない。それどころか何にも参加しないようにしているように見える。何かあったんだろうか。いなくなつた途端ここまで悪影響を与えるなんて。夏樹、君は座敷わらしか！

「勝負は極力単教科で挑むのじゃ！ 補給も念入りに行え！」

そんなわけで今は副指令の秀吉が指揮をとっている。ここ数時間は雄二の指示通り上手くやれてはいるが、Fクラスの二枚看板が使えないだけあつてかなり苦戦している。

「左側出入り口、押し戻されています！」

「古典の戦力が足りない！ 援軍を頼む！」

実際、今だつて戦局は本当にギリギリで維持している状態だ。

出入り口の片方に古典の竹中先生がいるのはまずい。Bクラスは文系が多いので、強力な個人戦力で流れを変えないと一気に突破される恐れがある。ここは姫路さんに頼るしかない。

「姫路さん、左側に援護を！」

雄二の作戦では姫路さんは午後に大事な役割があるらしいのであまり姫路さんに頼ることはできないけど、今はそんなこと言っていない。

「あ、そ、そのっ……！」

しかし、姫路さんは戦線に加わらず泣きそうな顔をしてオロオロ

している。マズイ！ 突破される！

僕は掛け声と共に人ごみを掻き分け、左側の出入り口にダッシュする・

そして立会人をやっている竹中先生の耳元でささやく。

「……ッラ、ずれてますよ」
「っ!？」

頭を押さえて周囲を見回す竹中先生。

いざという時の為の脅迫ネタ（古典教師編）をこんなところで使う羽目になるなんて。これは計算外だ。

「少々席を外します！」

竹中先生が離れていき、少しの間ができた。

「古典の点数が残っている人は左側の出入り口へ！ 消耗した人は補給に回って！」

応急処置だけど、これで少しは持ち直すはずだ。その間に、

「姫路さん、どうかしたの？」

姫路さんに声をかける。その後もしばらく姫路さんと問答したが、姫路さんは何でもないと否定するだけだ。そんな泣きそうな顔をして何でもないはないだろうに。そんなとき、状態はさらに悪化した。

「右側出入り口、教科が現国に変更されました！」

「数学教師はどうした！」

「Bクラス内に拉致された模様！」

右側までBクラス得意の文系に切り替えられるなんて。かなりピンチだ！

「私が行きますっ！」

姫路さんが戦場に加わろうと駆け出した。でも、

「あ……」

急にその動きを止めてうつむいてしまった。

——なんだろう。何かを見て動けなくなったようだけど——。

その視線の先を追ってみると、その先には窓際で腕を組んでこちらを見下ろす卑怯者——根本君の姿があった。彼がどうかしたのだろうか。見えにくいながらも必死に目を凝らしてみる。

「っ……！」

底でようやく僕は目撃した。彼が手にしているもの——何の変哲も無い封筒を。確かにそれは何の変哲も無い封筒だが、人によっては何にも換えられないほど大事なもの。三日前の放課後で姫路さんが恥ずかしがって僕から隠したあの封筒だ。

「なるほどね。そういうことが」

どうして根本君があんな協定を結んだのかようやく分かった。最初はCクラスと組んで少人数で同盟を結びに来た雄二を討つ作戦だったんだと思った。そして、それを夏樹の機転で上手くかわしたと思っていた。でも、違ったんだ。あいつはあの作戦にそれほど執着していなかった。だからこそ、夏樹曰く穴だらけの論理に食い下がることなくあっさり引き下がった。どの道、あの時点で姫路さんを無力化する策はあったんだから。後は姫路さんとコンタクトをとる時間さえあればいい。上手い方法だ、なかなか策士じゃないか。夏樹と話してから芽生えてた罪悪感が吹き飛んじやったよ。

「姫路さん」

「は、はい……？」

「具合が悪そうだからあまり戦線には加わらないように。試召戦争はこれで終わりじゃないんだから、体調管理には気をつけてもらわないと」

「……はい」

「じゃ、僕は用があるから行くね」

「あ……！」

姫路さんは何か言いたげだったけど、気にせず背を向けて駆け出す。大事な用ができたから。

「面白いことしてくれるじゃないか、根本君」

そんな台詞が口からこぼれる。

あの野郎、ブチ殺す。

「雄二っ！」

「なんだ！ 戦場はどうした！」

教室に飛び込むと、雄二はノートに何か書き込んでいるが、いっ
になく不機嫌だった。まるで教科書のこと喧嘩したときみたいだ。
そんな雄二につられて僕の表情も硬くなる。

「話がある」

「……こんなタイミングで言うなら戦争に関係しているんだろうな」
「根本君の制服が欲しいんだ」

「貴様はそんな用事で戦争を抜けてきたのか？」

し、しまった！ これだと僕はただの変態だ。

「ああ、いや、その。えーっと……」

本当は制服の中にしまっている手紙が欲しいんだけど、そんな事
情は話せないし……。どうしよう。このままだと、僕は男なのに男
が来ている制服を欲しがる変体だと思われる。きつと掘り
葉掘り事情聴取を受ける羽目に――

「……勝利の暁にはその程度のことには叶えてやる。だから、さつさ
と戻って少しでも勝率を上げる」

受け入れられた！？ あれ？ なんか面倒だからさっさと終わら
せたって感じた。やっぱり、いつもと様子が違う。

不思議そうに自分を見ている僕に気づいたのか雄二が不機嫌なま
ま口を開く。

「用件はそれだけか？　だったら、さっさと戻れ」

つつけんどんな態度の雄二。しかし、今はそれを気にしている場合じゃない。

「それと、姫路さんを今回の戦闘から外して欲しい」

「姫路だと？　理由は？」

雄二は睨み付けるように詰問してくるが、その視線を真っ向から受け止める。

「理由は言えない」

いずれは伝わるのかも知れないけど、僕が口にするものじゃない。

「それは本当に必要なことなのか？」

「うん。どうしても必要なことだ」

雄二は額に手を当て、目を閉じて考え込む。それは当然だ。姫路さんが抜ければ戦力ダウンなんてレベルじゃない。そんな状態じゃあこの戦いに負ける可能性もある。そして、その責任を問われるのは代表である雄二だ。

「頼む。雄二！」

僕は雄二に深く頭を下げた。

「バカはどうやっても止まらねえよな。……路抜きで勝てるところを見せてやるうじゃねえか」

すると、少しの間考え込んでいた雄二は聞き取れないほど小さな声で何かをつぶやいた。

「いいだろう。だが、条件がある」

「条件？」

「姫路が担うはずだった役割をお前がやれ。手段は問わん。絶対に成功させる」

「もちろんやってみせる！ 絶対に成功させてみせるさ！」

「その言葉、^{たが}違えるなよ」

鋭い目つきで念を押してくる。

「それで、僕は何をしたらいい？」

「タイミングを見計らって根本に攻撃をしかける。科目は何でもいい」

「皆のフォローは？」

「あるわけないだろう。しかも、Bクラスの教室の出入り口は今の状態のままだ」

「……難しいことを言ってくれるね」

現在Bクラスの2つの出入り口の両方で常に一対一の戦闘が行われている。これは時間稼ぎと雄二の作戦に必要な行動らしいが、そんな状況で教室の奥に陣取っている根本君に近づくには圧倒的な個人の火力が必要となる。例えば、姫路さんのような。でも、僕にはその火力が無い。

「もし、失敗したら？」

「そんな事態を許すと思うか？ 死んでも成功させる」

いつになく、冷たく鋭い口調。どうやら失敗はそのまま敗北につ

ながると見て間違いないだろう。どうやって、目的を達成する？

「それじゃ、うまくやれよ」

考え込む僕を置いて、雄二が教室を出ようと立ち上がる。

「え？ どこ行くの？」

「Dクラスに指示を出してくる。……例の件でな」

Dクラス。……室外機のことか。

「明久」

教室を出る直前、雄二はこちらを振り向かずにこう言った。

「確かに点数は低いが、秀吉やムツリーニ、夏樹のように、お前にも秀でている部分がある。そうでなきゃ、いくら夏樹あいつでもとつくに見限っている。だから、俺も夏樹と同じでお前を信頼している」

「……雄二」

「うまくやれ。作戦に変更はありえない」

そう言い残し、雄二は教室を後にした。

僕の秀でている部分。いくら操作が上手くても狭い場所での戦闘で細かい動作が役に立つはずないし。……あった。優れているってワケじゃないけど、他の人とは違う僕だけの特別がもう一つだけあった。点数の低い僕に出来る。数少ない方法が。あとは腹を決めるだけ。

「……痛そうだよなあ」

想像しただけで体に痛みが走る。でも、不思議と覚悟はすんなり決まった。

「——よっしゃ！ あの外道に目に物見せてやる！」

頬を叩き、自らを奮い立たせる。

方法がある。勝算もある。根性さえあればやれるのだとしたら、やらない理由はどこにもない。後のことなんか知るもんか！

「美波！ 武藤君と君島君も、協力してくれ！」

教室内で補給テストをしていた三人に声をかける。

「どうしたの？」

「何か用か？」

「補給テストがあるんだけど」

「補給テストは中断。その代わり、僕に協力して欲しい。この戦争の鍵を握る大切な役割なんだ」

「……随分とマジな話みたいね」

「うん。ここからは冗談抜きだ」

「何をすればいいの？」

「僕と召喚獣で勝負をして欲しい」

第二十六話：二枚看板の不在（後書き）

今回は原作と同じ流れですけど、前話で雄二が夏樹と話しをしているので明久との会話の雰囲気が大分違っていきます。それと、勘違いする方はいないと思いますが、夏樹や雄二が考えている明久の長所は観察処分者であることではなく、良い意味でバカであること（＋夏樹は交友関係のわけ隔てなさ）です。

次話は原作と大きな変化はない作戦の結末。しかし、その作戦が今までのバカテス二次で（少なくともシュレ猫は）見たことが無い展開を呼ぶ予定です。

それではこれからもよろしくお願いします。

第二十七話：明久の秘策と戦後対談（前書き）

えー、ほとんどが原作や他作品と変わらないんですが、最初に夏樹視点を入れたり、どこまでを削って、どこを残すかの判断が難しかったので時間がかかりました。

しかも、文月学園の見取り図を見ていると最初考えていた方法が使えず、どうしようかと考えたりとにかくこの話は大変でした。

いろいろ削ったせいでおかしな文になっていたらすみません。では、二十七話始まります。

第二十七話：明久の秘策と戦後対談

私はもっちー（……いつまでこの呼び方が出来るんでしょうね）と話した後もＦクラスの隣の空き教室で待機していたんですが、今はその……ちよつと花を摘みに教室から出てきたところなんです。

それで教室に戻ろうとしたんですが、そのとき視界の端に皆が戦闘をしている姿が見えました。……もっちーの作戦が許せない気持ちは今も変わりませんし、この戦争に参加する気も起きません。だけど、自分の我がままも理解していますし、今まで一緒に戦ってきた仲間の様子が気にならないと言えは嘘になります。なので、無意識に少し近づいて戦場をよく観察してしまいました。

渡り廊下と新校舎の境目の柱の影に隠れて観察しているとおかしなことに気づきます。もっちーが近衛部隊をつれて根本君を挑発しているのは、まあいいです。しかし、そうした戦場から離れたところにポツンと立つひめひめ。もっちーは挑発とかで人の気持ちを操作するのが得意だからあやつて根本君の思考をうまく誘導しようとしているのは分かります。でも、ひめひめをあんな戦闘に参加しにくいところに置く意味が分からない。確かに私は「ひめひめのおかげだと思われる」と言ってしまいましたが、あの男はそんな挑発で暴拳に出るような人間ではありません。……一体何があっただんでしょうか。ひめひめの様子をいぶかしんだ私はもう少し近づいてみることにしました。するとさらにおかしいことに戦場にあつきーの姿がありません。あいつならひめひめがあんな状態になっているなら傍にいて気遣うか、可能性はより低いですが彼女の分までがんばろうと奮闘するはずです。

皆に見つからないギリギリまで近づいたところで辛うじてもっちー

と根本君の会話が聞こえてきます。……なんででしょうかこの音は。小さい上にもつちーと根本君の声に隠れていて聞き取りにくいですが、ドンッ、ドンッという何かを叩くような音がBクラスの先――Dクラスから聞こえてきます。

室外機の破壊、教室への閉じ込め、教室前の密集地帯、最高戦力の戦闘不能、観察処分者……

！？ まさか！

最悪の展開に思い至った私はすぐに駆け出した。そして、もつちーにも根本君にも見つからないように人だかりの後ろを通るようにしてBクラス前を駆け抜ける。そして、予想が外れることを祈りながら辿り着いたDクラスの出入り口の前で私は予想できた、それでも衝撃の光景を目撃しました。それを見た私はとっさに叫びました。

「試獣召喚っ！！」
サモン

明久side

あの後僕たちは英語の遠藤先生を呼び出して、Dクラスで僕と美波が召喚対決を行うから立会人になって欲しいと頼んだ。遠藤先生は始めは考え直すように説得してきたが、僕たちの意思が変わらないことを悟り、許可を出してくれた。

そして、僕は大幅りなモーションで美波の召喚獣に攻撃したが、避けられて僕の召喚獣の拳は思い切り壁を殴りつけた。その後も力任せに美波の召喚獣を狙うが、横っ飛びで避けられて拳は再び壁に教室を揺るがすほどの攻撃のフィードバックは半端でなく、僕は痛

みで吐き気を覚えた。だけど、もう時間がないと美波に促され、更に力を込めた攻撃を行い、避けられるという行動を繰り返していく。遠くから根本君と雄二が話しているのが聞こえる。あいつも作戦成功のために動いているんだ。ここで失敗してたまるか！

四度目の攻撃を行った後、拳の先が温かくなっていることに気づいた。見ると、結構な量の出血があり、教室の床に地黙りが出来ていた。

『……さっきからドンドンと、壁がうるせえな。何かやっているのか？』

『さあな。人望のないお前に対しての嫌がらせじゃないのか？』

『けっ。言ってる。どうせもうすぐ決着だ、お前ら、一気に押し出せ！』

『……態勢を立て直す！ 一旦下がるぞ！』

『どうした散々ふかしておきながら逃げるのか！』

もうすぐ作戦の瞬間だ。急がないと！

「アキ、そろそろよ」

「うん。わかってる」

周りにいる皆にも目配せをする。皆は黙ってうなずいてくれた。

「吉井君、島田さん。二人とも何をしようとしているのですか？」

状況の分からない遠藤先生が僕らを交互に見る。僕らの偽りの勝負を怪しんで召喚獣を戻される前に決着をつける必要がある。

「おおおおおっ！」

腹の底から雄叫びをあげる。五度目で決める。この先はない！

『あとは任せたぞ、明久』

敵の本陣をひきつけた雄二が、壁の向こうから良く通る声でそう告げてきた。午後三時ジャスト。作戦開始だ。

「だああーっしゃあーっ！」（「試^{サモン}獣召喚っ！！」）

召喚獣に持てる全ての力を注ぎ込んで、壁を破壊する。途中で誰かの声が聞こえた気がしてけど、そんなことには構っていられなかった。そして、壁を壊したことでDクラスから直接Bクラスに攻め込む道が出来た。

「——ぐううっ！」

全身に走る痛みが神経がきしむ。

けど、こんなことが出来るのは僕しかない。痛みが変える代わりに、物理干渉能力を持つ僕の召喚獣だけしか。

「ンなっ！？」

崩れた壁の向こうにある、驚いて引きつった根本君の顔。向こうの戦力はほとんど雄二率いる本隊を追って教室から出ている。またとない好機。敵の主戦力は出払い、代表の防御は薄い。ここを逃せば勝ちはない！

「くたばれ、根本恭二いーっ！」

僕は呆気にとられている根本君に勝負を挑むために駆け寄ったが、近衛部隊によって行く手をふさがれてしまった。

「は、ははっ！ 驚かせやがって！ 残念だったな！ お前らの奇襲は失敗だ！」

取り繕うように僕らをわらう根本恭二。確かに僕らの奇襲は失敗だ。だが、あの雄二が近衛部隊の存在を忘れるはずがない。僕たちが封じられることまで計算済みだ。そして、エアコンが壊れ、熱気が籠った教室に涼風を入れるために開放された窓に二人分の足音が響く。そこから屋上よりロープを使って二人分の人影が飛び込み、根本恭二の前に降り立った。ムッツリー二と保健体育の大島先生だ。

「……Fクラス、土屋康太」

「き、キサマ……」

「……Bクラス根本恭二に保健体育勝負を申し込む」
「ムッツリーニイーッ！」

Fクラス 土屋康太 保健体育 441点

VS

Bクラス 根本恭二 保健体育 203点

ムッツリー二の召喚獣は手にした小太刀を一閃し、一撃で敵を切り捨てる。

今ここに、Bクラス戦は終結した。

「明久、随分と思いつた行動にでたのう」

終戦後、Bクラスにやってきた秀吉に、まず最初にそんなことを言われた。

「うう……。痛いよう、痛いよう……」

とにかく今は手が痛い。100%全てが変えるわけじゃないとは言え、素手で鉄筋コンクリートの壁を壊したんだから、その痛みは並じゃない。

「なんとも……。お主らしい作戦じゃったな」

「で、でしょ？ もっと褒めてもいいと思うよ？」

「後のことを考えず、自分の立場を追い詰める、男気溢れる素晴らしい作戦じゃな」

「……遠まわしに馬鹿って言ってない？」

学校の壁を破壊するなんて、問題にならないわけがない。僕の放課後の予定は職員室でのハートフルコミュニケーションで埋まってしまった。初犯でなければ留年や退学になっていたかもしれない。

「ま、それが明久の強みだからな」

雄二がバンバンと肩を叩いてくる。馬鹿が強み！？なんて不名誉な！

「それにしてもおかしいのう。夏樹がお主がそんな怪我をしたと知ったら心配して救急箱を持ってくるか、お主を引きずってでも保健

室に連れて行くじやろうに、一向に現れん」

『うつ！』

それを聞いて僕と雄二は同時に目をそらす。僕と雄二以外は夏樹は体調不良であると認識しているから、その疑問はもっともだ。

「あ、あー、多分あんな隙間風だらけのところで休んでたから悪化しちまったんじゃないか？」

とつさに雄二が誤魔化す。だけど、おかしいな。最初は僕も夏樹が来なくて当然って思ったけど、夏樹は物事はきっちりと分けて考える性質だからさっきのことで喧嘩しても怪我の心配くらいはしてくれると思うんだけど。……そういえば、夏樹で思い出したけど、Bクラス戦の終わりからずっと引かかっていることがあるんだよね。何なんだろう？

「それならば、皆で様子を見に行くべきではないかのう？」

「い、いや、あんまり五月蠅くすると休めねえだろう。そつとしておこつぜ。つと、嬉し恥ずかし戦後対談といこうぜ。負け組代表？」

僕が引つかかっていることについて考えている間にも秀吉と雄二の会話が續いていたが、雄二は秀吉の追及を逃れるために強引に戦後対談を始めた。いけない、いけない。根本君から手紙を回収しなきゃいけないんだから、今はこっちに集中しないと。

「本来なら設備を明け渡してもらい、お前らには素敵な卓袱台をプレゼントするところだが、特別に免除してやらんでもない。」

そんな雄二の発言に、ざわざわと周囲の皆が騒ぎ始める。

「落ち着け、皆。前にも言ったが俺たちの目標はAクラスだ。ここがゴールじゃない」

「うむ。確かに」

「ここはあくまで通過点だ。だから、Bクラスが条件を呑めば開放してやるうかと思う」

その言葉でうちのクラスの皆はどこか納得したような表情になった。

「……条件はなんだ」

力なく根本君が問う。

「条件？ それはお前だよ、負け組代表さん」

「俺、だと？」

「ああ。お前には散々好き勝手やってもらったし、正直去年から目障りだったんだよな」

凄いいい様だけど、そう言われるだけのことを彼はやっている。だからこそ彼をフォローする人間はいない。

「Aクラスに行つて、試召戦争の準備が出来ていると宣言して来い。そうすれば今回は設備については見逃してやつてもいい。ただし、宣戦布告はするな。すると戦争は避けられないからな。あくまでも戦争の意思と準備があるただけ伝えるんだ」

「……それだけでいいのか？」

疑うような根本君の視線。当初の計画ではそれだけでよかったんだけどね。

「ああ。Bクラス代表がコレを着て言った通りに行動してくれたら見逃そう」

そう言っ て雄二が取り出したのは、先ほど秀吉が着ていた女子の制服。

「ば、馬鹿なことを言うな！ この俺がそんなふざけたことを……！」

根本君が慌てふためく。そりゃ嫌だよな。

『Bクラス生徒全員で必ず実行させよう！』

『任せて！ 必ずやらせるから！』

『それだけで教室を守るなら、やらない手はないな！』

Bクラスの仲間達の温かい声援。これを見るだけで根本君が今までどういった行動を取ってきたかがわかる気がする。

「んじゃ、決定だな」

「くっ！ よ、寄るな！ 変態ぐふうっ！」

「とりあえず黙らせました」

「お、おう、ありがとう」

一瞬で代表を見限って腹部に拳を打ち込んだBクラスの男子。流石の雄二も変わり身の早さに驚いている。

「では、着付けに移るとするか。明久、任せたぞ」

雄二に根本君の着付けを任された僕は、途中根本君が目を覚ましかけて追加攻撃をしたり、着せ方が分からないといった事態は起き

たが、Bクラス女子が協力してくれることになり問題は解決した。

制服を脱がせた後はその女子に残りの着付けを任せて、僕は彼の制服を手にその場を離れた。

第二十七話：明久の秘策と戦後対談（後書き）

はい、最初に夏樹がDクラスに行くことにしたんですが、普通の校舎には端と端に最低二つの階段があると思っていたので、いったん旧校舎近くの階段で4階に上って新校舎を駆け抜けた後再び降りる予定だったんですが、文月学園の階段って渡り廊下付近の一つしかないんですね。しかも、旧校舎近くには階段がないし。なんて不便な。そもそも、旧校舎は渡り廊下がない頃からあったはずなのに校舎内に階段がないとは如何に？

ちなみに皆さん分かっているとは思いますが、明久が気にかかっていることは壁の粉砕とともに聞こえた夏樹の声です。しかし、そのときの作戦への集中と勝利の高揚感ですっかり忘れています。

今回は手紙を返すところからなので、半分は原作どおりの展開でもう半分はオリジナル展開となります。そして、オリジナル展開は再びシリアス展開を呼ぶこととなります。感想が減っているいろいろ不安ですが、努力で何とかしていきます。そのためにも、次回はあるべく早く書けるようにがんばります。

では、これからよろしくお願いします。

第二十八話：明久への賞賛と……（前書き）

今回は結構早めにかけました。比率としては原作遵守とオリジナル展開がほぼ半々となっています。前回の話もそうですが、この作品でカットしてある部分が気になる人は原作か、原作沿いの他作品へGO！

いやー、最近の展開は原作や他の作品でもあまり見ない展開にしているんで、いろいろと反響が怖いです。しかも、夏樹というキャラが作品を進めているうちにどんどん動くようになってきて、執筆前のプロットから大分変わってきているんですね。キャラが勝手に動き出すってことを今まさに実感しています。

それでは二十八話、始まります。後半のオリジナル展開をお楽しみに！

第二十八話：明久への賞賛と……

明久 side

根本君の制服を持ってBクラスを出た僕は廊下で制服を探った。すると、指の先に何かがあたる感触があった。

「……あつたあつた」

見覚えのある封筒を取り出し、自分のポケットに入れる。

さて、この制服はどうでしょうか？——よし。捨てちゃおう。折角だから根本君には女子の制服の着心地を家まで楽しんでもらうとしよう。

そんなことを考えながら、皆より先にFクラスへ戻る。根本君の制服をゴミ箱に突っ込み、その後ポケットから例の封筒を取り出した。

「落し物は持ち主に、っと」

姫路さんに席に置いてある、彼女の鞆に入れておく。これで作戦完了っと。

「吉井君！」

「ふえっ！？」

背後からいきなり声をかけられて、不覚にも僕は間抜けな悲鳴を上げてしまった。なんか凄く恥ずかしい！

「な、なに？」

慌てて振り向く。するとそこには、姫路さんがいた。

「吉井君……！」

目が潤んでいる。今日の姫路さんは泣き顔ばかりだ。

「ど、どうかした？」

鞆を勝手にいじっている姿を見られてしまい、慌てる僕。するとそんな僕に姫路さんはあろうことか正面から抱きついてきた。

「ほわぁあつとー!？」

「あ、ありがとう、ございます……わ、私、ずっと、どうしていいか、わかんなくて……」

どうしていいのかわからないのは僕の方だ。くそっ！ これは新
手の陽動作戦か？

「と、とにかく落ち着いて。泣かれると僕も困るよ」

「は、はい……」

精神の安定を図る為に姫路さんを引き離す。ってしまった！ 引き離してどうする！ こんなチャンスは二度とないだろうが！

「いきなりすみません……」

涙目をこする姫路さん。ああっ！ 言いたい！ もう一度抱きつ

いてってお願いしたい！

「も、もう一度――」

「はい？」

げっ！ 思わず口に出ていた！ 何か他の事を言わないと！

「もう一度壁を壊したい！」

って馬鹿あつ！ 僕の馬鹿あつ！ お前はどこのテロリストだよ！
もう一度壁を壊してなんになるっていうんだよ！

「あの、更に壊したら中年させられちゃうと思いますよ……」

うん。わかってる。わかってるからそんなに気の毒そうな目で僕
を見ないで。

「……それじゃ、皆のところに行こうか」

「あ、待ってください！」

いたたまれない気持ちで逃げようとする僕を、姫路さんが袖を握
って引き止める。

「な、なに？」

「あの……」

まさか、良い病院を紹介してくれる気だろうか？ くっ！ 前に
僕が行った台詞がそのまま返ってくるなんて、こんな屈辱はいつも
通りだ！

「手紙、ありがとうございます」

うつむきがちに小さな声で言う彼女。

「別に根本君の制服から姫路さんの手紙が出てきたから戻しただけだよ」

「それってウソ、ですよね？」

「いや、そんなことは——」

「やっぱり吉井君は優しいです。振り分け試験で途中退席した時だって『具合が悪くて退席するだけでFクラス行きになるのはおかしい』って、私のためにあんなに先生と言い合いをしてくれていたし……」

そういえば、そんなこともあったなあ。あの時は先生に冷たくあしらわれたから、逆に熱くなっちゃったっけ。

「それに、この戦争って……私の為にやってくれてるんですよ？」

「え！？ あ、いや！ そんなことは！」

「ふふつ。誤魔化してもダメです。だって私、自己紹介が中断された時に吉井君が坂本君と夏樹ちゃんに相談しているの、見ちゃいましたから」

あの相談を見られていたのか。これじゃごまかしようがない。

「凄く嬉しかったです。吉井君は優しくて、小学生の時から変わってなくて……」

な、なんか妙な空気だ。今までに経験したことのないむずがゆさを感じる。よく分からないけど、僕はこの雰囲気能耐えられそうにない！

「そ、その手紙、うまくいくといいね！」

とりあえず話題を変えよう。このままじゃおかしくなっちゃいそうだ。

「あ……。はいっ！ 頑張りますっ！」

そんな僕の言葉に応えたのは、姫路さんの満面の笑み。その笑顔を見て思う。この子は本当に雄二のことが好きなんだな。わかっていたことだし、僕は雄二に敵わないとも実感している。悔しいけどしょうがないか。

「で、いつ告白するの？」

下世話な話題を振ってみる。ま、これくらいは許されてもいいよね。

「え、ええと……。全部が終わったら……」

姫路さんは真っ赤になりながらもそう答えてくれた。

「そっか。けど、それなら手紙より直接言った方がいいかもね」

「そ、そうですね？ 吉井君はその方が好きですか？」

「うん。少なくとも僕なら顔を合わせて言ってもらう方が嬉しいよ」

手紙は根本君のせいで嫌な記憶になっていそうだしね。

「本当ですか？ 今言ったこと、忘れないで下さいね？」

「え？ あ、うん」

僕の意見だから雄二とは違うかもしれないのに、姫路さんは金言きんげんを得たかのように嬉しそうだ。

その後、廊下から聞こえてきた話し声で根本君がこの後で撮影会を行って素敵な思い出を作るであろうことを知った後、姫路さんと一緒に皆のところに戻った。おっと、帰る前にしっかりと雄二の教科書に卑猥な落書きをしておいたよ。僕がそう簡単に人の幸せを祝ってやる奴だと思ふなよ。……夏樹にばれたら怖いけど、夏樹は疑わしきは罰せずだから何とか誤魔化せるはず。

僕は解散して皆と別れた後、先生方とのハートフルコミュニケーションをするために足取り重く職員室へと向かった。うう、覚悟していたこととは言え、気が重い。まあ、ちよつとの間の辛抱だ。頑張れ、僕！

ガラリッ

「失礼しまあーす」

挨拶とともに職員室に入った僕は鉄人の姿を探した。だけど、どこにも見当たらない。あれ？ 先生一同の指導ではあるけど、鉄人なら入ってすぐに怒鳴ってくると思ったんだけど。それになんだろう、空気が重い。

いや、確かに壁を壊したんだから空気が重いのは当たり前なんだけど、職員室への呼び出しを命じた先生はもう少し柔らかかった気がするんだけど。

「あら、吉井君。災難だったわね」

そんなことを考えていると不意に船越先生が声をかけてきた。でも、やっぱりおかしい。僕をいたわる言葉を言ってくれるのは勿論だけど、それ以上に台詞は僕をいたわっているのに表情が台詞と一致していない。なんていうか、アレだ。憎い仇が目の前にいるのに裁判で無罪になったから手を出すことが出来ないみたいなの。

「え、ええっと、何がどうなっているか訳が分からないんですけど」「そのことについては後で西村先生から説明があると思うわ」

こめかみをひくつかせながらそう言うと、船越先生は自分の机へと戻っていった。何がどうなっているんだろっ。

「吉井」

後ろから野太い声が。振り向くとそこには呆れるような、蔑むような、同情するようなそんな複雑な表情をした鉄人がいた。

「えっと、西村先生。どうかしたんですか？」

流石の僕もいつものふざけた調子で接することが出来ず、鉄人と言っただけではなく本名で呼んで尋ねた。すると鉄人は顎で出入り口を指しながら告げてきた。

「職員室の先生方は皆知っているが、職員室には誰が入ってくるのか分からん。隣の応接室に來い」

職員室から応接室に移動した僕たちは向かい合って座ると、鉄人

は一旦目を閉じて重々しいため息をついた後、口を開いた。

「まずは面倒くさいことは言わず、結論から言おう。今回の事件でお前に指導をすると通達したのはこちらのミスだった。すまなかったな」

「は、はあ」

事態が飲み込めず、間の抜けた声を出してしまう。

「お前は今回の事件に不幸にも巻き込まれただけだということが判明したんだ」

どうということだろう。僕が壁を壊したのは遠藤先生も見ているから間違えようがないんだけど。すると、鉄人は表情を一気に引き締めて信じられないことを話す。

「お前に指導の通達をしたのとはほぼ同時刻に神谷が学園長室に来たそうだ」

……なんだかとてもなく嫌な予感がする。まさかそんなわけがないよね。

「今回の事件は自分の召喚獣の腕輪能力のせいで吉井の召喚獣が暴走したことが原因であって、お前に罪はない。全ては自分の責任だとな」

「そんな！」

「なんでも、お前と島田の喧嘩を止めようとして咄嗟にお前の召喚獣に能力を使ってしまったらしい。実際に召喚システムには神谷の召喚獣の召喚と腕輪使用のログが残っている。遠藤先生の目撃証言についても遠藤先生はお前たちに注目していて教室全体を見れてい

ないだろうから神谷に気づけなかったんだろうということになった」
「ちよつと、聞いてるんですか！」

「そのため、あいつは今は補習室で漢字の書き取りの罰則中だ。それが終わったら俺と二人きりで指導を始める」

鉄人は僕の叫びを無視して淡々と事実だけを述べ続ける。痺れを切らした僕はテーブルを思いっきり叩きながら声を上げた。

「あなたは夏樹のそんな話を信じているんですか！」

鉄人は思わず叫んでしまった僕を睨み付ける。

「……吉井、俺を嘗めるなよ。いや、俺だけじゃない。この学園にそんな話を信じている教師がいる筈がないだろう。あいつはお前らとつるんでいるのが不思議なくらいの優良児だ」

「だったら！」

「それでも学園長は神谷が原因であると結論付けた。ならばそれに対する処罰は行わなければならない」

「それなら僕が今から学園長に直談判してきます。僕の代わりに夏樹が処罰されているなんて間違ってる！」

「勘違いするなよ、吉井。そんなことは俺も学園長も重々承知だ。それでもあえて神谷を処罰するのはあいつの覚悟を尊重してのことだ。あいつは極稀にだがちよつとした悪戯をすることはあった。だが、少なくとも嘘をついたことだけはなかった。そんなあいつが嘘をついてまで守ろうとしたというのは相当なことだからな。だからこそ、俺たち教師はあいつのバレバレの嘘にだまされているんだ」

鉄人の言葉に何も言えなくなってしまう。そうか、職員室の空気がおかしかったのはこれが原因だったのか。でも、まさか僕の行動がこんなことを引き起こすなんて。

「それにしても去年一年間あいつを見てきたが、あいつの中にあんなに激しいものがあつたとはな」

「僕もそんな一面があるなんて初めて知りました」

「そういえばお前と神谷は同じ中学で3年間同じクラスだったそうだな。俺としてはコレを機にあいつには交友関係を見直して欲しいものだが、こればかりは教師といえども他人が口出しをすべき内容ではないからな」

「……」

鉄人がからかうように言うが、その言葉は罪悪感がある僕には痛すぎる。

（予測はしていたことだが、やはりこれが最良の方法だったのかもしれんな。吉井は自分のことではどれほど怒られても懲りんかっただろうが、神谷が処罰されたというのは自分が指導されるのとは比べ物にならないほどに堪えただろう。これでコイツも少しは生活態度を改めるといいのだが）

鉄人が何か期待するような眼で僕を見ていたけど、夏樹のことでショックを受けている僕はそのことに気づけなかった。

「まあいい。お前への話はこれで終わりだ。帰っていいぞ」

その言葉を聞いても僕は立ち上がることが出来なかった。

「……お前の気持ちは分からんでもないが、少なくともこの部屋は出る。俺はこれから神谷の指導に行くからな」

そう促されて僕は重い腰を上げた。

「……あいつの指導は6時に終わる予定だ。いくらバカでもこれをお前に話した意味くらいは分かるな」

「……はい」

夏樹に対しての感情はいろいろと複雑に渦巻いていて上手く言い表せないけど、まずは何をにおいても謝らないと。とりあえず、夏樹の指導が終わるまで教室で待ってようかな。

第二十八話：明久への賞賛と……（後書き）

やってしまいました。夏樹が明久の身代わりに処分を受けるという展開。少なくとも自分は今まで見たことがないし、今後もここで明久の罪を肩代わりするという展開はないのではないのでしょうか？

少しだけ言い分けさせていただきますと、夏樹は壁を壊した時点で動き出したので、明久が指導で終わる予定だということを知りません。なので、停学や最悪の場合退学があると思って行動しています。鉄人は夏樹の覚悟を尊重したと言いましたが、その他に括弧で考えていたように明久は夏樹が怒られれば本当に反省するだろうと考えたので渋々ではあります。が了承しました。

船越先生の機嫌がかなり悪いのは明久のせいで従兄弟姪（予定）が処罰を受けるということは頭にくるけど、おば（になってみせる）として従兄弟姪の意思は尊重したいという複雑な思いゆえです。

今回、夏樹が嘘をついて明久を庇うという常識はずれな行動をしたことで「常識人な」夏樹が好きで読んでいた方に怒られたり、最悪見放されたりしないか非常に心配です。ですが、前話のあとがきでも書いたとおり、ここからシリアスな展開になりますので、今回呆れた方もせめて1巻分が終わるまで温かく見守ってくださいと嬉しいです。

それでは、これからよろしく願います。

……夏樹と学園長の会話って需要ありますか。書いてあるわけじゃないですけど、頭の中にはしっかり構成が出来上がっているんで

リクエストさえあれば「裏・二十七話」とかってタイトルで書けるんですけど。

裏二十七話：公証人 神谷夏樹（前書き）

糖分摂取魔様、虚和様、感想ありがとうございます。

今回は明久や雄二が根本と戦後対談をしている間に夏樹がどのようなにして学園長と交渉したかのお話です。話がそれだけ＋論点が少ないので文量は少なめです。でも、二十九話を書いてからこの作品を書いたので本編の続きはいつでも出せます。ですので、本日の夜にでも投稿しようと思っています。

それでは、夏樹の拙いなりに必死な交渉をお楽しみください。

裏二十七話：公証人 神谷夏樹

コンコンコン

「あいよ。入んな」

「失礼します」

学園長先生から入室の許可をもらった私は挨拶と共に学園長室に入りました。ばっちゃんをやり込めるのはかなり大変だし、心苦しいけど、絶対に失敗できない。

「おや、神谷じゃないかい。どうしたんだい？」

「えーっと、学園長にお話がありました」

「なんか怪しいねえ。あんたがアタシに対してそんな話し方をするなんて。実験のことがい？」

「いえ、学園長はDクラスの壁破壊事件についてご存知ですか？」

「ああ、ったく、あのバカ。新学期早々問題を起こしやがって」

勝負はもう始まっている。絶対に手札を切り間違えないようにしないと。

「本当にすみませんでした！」

私はぶつぶつと文句を言っている学園長に対して、深々と頭を下げた。すると、学園長はキョトンとした表情をする。

「何言ってるんだい。あんたは関係ないだろう。問題を起こしたのは吉井って奴じゃないかい。まったく、あいつは観察処分者にしても全然反省していないようだね」

「いえ、あいつのせいじゃないんです」

私のその言葉に学園長は思いつき眉をひそめた。確かにそうだろう。先生からしっかりと報告があがっている事象を思いつき否定したんだから。

「ああ、そう言えばあんと吉井は友達だとか職員室でも噂になっていたね。まあ、そんなんじゃ庇いたくなるのも無理ないかもしれないね」

「庇うとかそんなんじゃありません。いくら私でも友達のために無実の罪を被るほどバカじゃありません」

「遠藤先生がしっかりと現場を見てるんだ。そんなことも忘れるなんてあんたらしくないねえ」

ここからが正念場だ。学園長は科学者だけあって頭の回転は私なんかとは比べ物にならないだろう。でも、そんなの関係ない！

「すみません。その原因は全て私にあるんです」

「……どうということだい」

「実は吉井君と島田さんが召喚獣対決をしてるのを偶然見てしまい、咄嗟に止めようと思ったんです。だから、私も召喚獣を召喚して吉井君の召喚獣に対して腕輪の能力を使ってしまう……」

「それで暴走したっていうのかい？ はっ、話にならないねえ。あんたの腕輪の能力は命令の混乱。そんな状態で召喚獣がともに動くはずないだろう。いくら焦っているからって浅慮さね」

「あいつは観察処分者ですから」

「だからなんだい？ 確かに観察処分者の召喚獣は別系統で動いているとは言え、研究当初ならともかく、しっかりと研究を進めている今のあんたの召喚獣だったら観察処分者用のジャミングプログラムもしっかりと作動するはずだよ」

「いえ、観察処分者ですからフィードバックを通して命令系統の混乱を把握したのかも。もしかしたら、比較的普段との差異が少なかったのかもしれないし」

「……ひとまずはそんなことも起こりえると考えてやるさね」

やった！ 言質を取りました。学園長はまだ否定材料があるからこそこのひとまずの納得でしょうが、一旦納得したからにはこの論点では絶対に勝負させてあげません。

「だが、召喚システムの記録はどう説明するんだい？」

「はて、何のことでしょう？ 召喚システムのログを見たわけではないですが、多分私の召喚履歴と能力使用履歴が残っていると思うんですが。いやー、それにしても立会人が遠藤先生でよかったです。それ以外だと腕輪が使えませんでしたし」

「確かにあなたの召喚獣のログは残っているさね。だが、あなたの召喚は吉井たちの召喚から大分時間が空いているようだね？ あんたが召喚したのは壁を壊す寸前。腕輪の発動に至っては壁を壊した後じゃないかい」

「学園長先生。その時間の判断はどこから持ってきたんですか？」

「遠藤先生の証言に決まってるじゃないか」

「学園長。人間の主観的な証言を鵜呑みにするなんて科学者らしくありませんよ。遠藤先生はずっと時計を見て計測していたわけじゃないかもしれません、数分の狂いがあるかもしれないじゃないですか」

「……吉井の召喚獣のダメージ履歴も残っているんだがねえ」

「あらら、観察処分者に能力を使うのは初めてでしたからねえ。そっちの方までジャミング効果が効いちゃったのかもしれないね」

「それは本気で言ってるのかい」

「だって、壁が壊れた後に私が召喚する理由なんてありませんし」

学園長は鋭い目で私を睨み付けてくる。あまりの緊張で口の中の

水分がどんどん無くなり、私はひりつく喉を潤そうとなけなしの唾液を無理やり飲み込む。

「あるじゃないか。友達を庇うための証拠を作ろうとしたんじゃないのかい？」

「学園長もしつこいですね。そんな理由で自分の身を危なくするようなことをしたりしませんよ」

「まあ、いいさね。とにかく！ この事件があんたのせいだって言ってるのはあんただけなのに対して、吉井が原因だというのは遠藤先生が証言しているし、あんたの言葉は召喚システムのログが否定している。こんな状況であんたの証言を信じるわけにはいかないよ」

「そうですか」

やっぱり召喚獣のダメージ処理の履歴が残っているのは厳しいですね。っていうか、そんなのも残っているんですね。悔しいなあ。それが無ければもう少し粘れたのに。これが春華ならここからでも逆転できたのかな。でも、私は春華じゃないし、これ以外にはたった一枚のジョーカーしか残されていない。このジョーカーは出来れば最後まで切りたくなかったカードだけど、正攻法で負けたなら仕方ない。今から最終手段を出します。……本当にゴメンね、ばっちゃん。私のことを軽蔑してくれてもいいから。

「生徒が勇気を振り絞って自らの罪を告白したのに学園長先生は信じてくださらないのですね」

「学園の長としてバレバレの偽証で無実の生徒を裁くわけにはいかんさね」

「でしたら仕方ありません。こんな信頼関係では学園長他少数の実験室に長時間いることなんてできません」

「あ、あんた何を言っているんだい」

私の言葉に学園長が眼に見えて狼狽しました。私の言葉の意味が分かったみたいです。

「分かり辛かったなら率直に言います。私はこれから先、学園長の研究に付き合うことはできません！」

「……アタシを脅す気かい？」

「いえ、私だって人間ですから信頼関係がないと長時間拘束されることに承諾することはできません」

「可愛い顔して随分とやるじゃないか」

「……おっしゃっている意味が分かりかねます」

「はあ、あなたはこういうことがは大嫌いだと思っていたんだがねえ」

学園長の言葉が胸に突き刺さる。咄嗟に涙が出そうになったのを何とか堪える。しかし、表情が歪むのまでは抑えることが出来なかった。

「まったく、しょうがない子だねえ」

学園長はため息と共に立ち上がると、私の傍に近づいてきた。一体どういふつもりなんだろう。

「鏡を見てごらん。酷い顔だよ。本当に子供が無茶なことするんじゃないよ」

そう言っただけ私の頭を優しく撫でてくれた。だが、そのせいで余計に申し訳ない気持ちが高まり、更に表情が歪む。

「あんたには負けたよ。その覚悟に免じて今回の吉井への処罰は無しだ。だが、次はないと思いなよ」

「ばっちゃん」

「その代わりあんたは西村先生にみっちり叱って貰うから覚悟しな。二度とこんな無茶はさせないさね」

「……ばっちゃん。ありがとう」

私は学園長の気持ちが嬉しくて、学園長の胸にすがって恥も外聞も無く涙を流してしまった。

裏二十七話：公証人 神谷夏樹（後書き）

はい、こんな感じになりました。気づいた人はいないかもしれませんが、最初にプライベートノックをしているので夏樹と学園長の仲が良好なのはすぐに分かったり。そして、またしてもオリジナル設定で召喚獣のログを出しました。しかし、コンピュータ処理で召喚している以上その履歴は残るだろうと判断しました。

最後に、なんか今回の学園長は原作以上の人格者になっていますね。まあ、夏樹が「ばっちゃん」と親しげに呼んでいる影響もあって、孫を見る眼に近くなっているということも関係しています。

前書き通り本編は夜に投稿予定です。そちらも楽しみにしてください。ださい。

第二十九話：大切なものへくだらないもの（前書き）

予告通り本編の続きを投稿しました。

今回は明久を庇った夏樹と庇われた明久の会話だけで一話が終わっています。さあーて、今まで夏樹の行動にビクビクしてきましたけど、それもここで終わり。この展開さえ受け入れられるなら他の展開に嫌悪を示されることは無いはずです。

この話は書き始め前のプロットでは違う展開だったのですが夏樹のキャラがしっかりするにつれこの展開が浮かび、それ以来ずっと書きたかったシーンなので何度も何度も描写や台詞を吟味し、力を入れて書きました。そのためにオリジナル展開なのに執筆に時間がかかりました。

では、波乱の二十九話始まります！

第二十九話：大切なものへくだらないもの

明久 side

教室で夏樹の指導が終わるのを待っていた僕は5時50分になったのを確認したところで夏樹と自分の鞆を持って補習室の前に行くことにした。うう、どうしよう。鉄人と別れてからずっと何を話そうか考えていたんだけど、何も思い浮かばないよ。そうやって補習室の前で思い悩んでいると時計の長針は垂直から右へとわずかに角度をずらした。

ガラッ

「……本当にすみませんでした」

それと同時に補習室から出てきた夏樹は補習室に向き直り、深々と頭を下げた。

「夏樹！」

「……ン」

僕は夏樹に呼びかけるが、夏樹はそんな声が聞こえていないかのようには緩慢に振り返ると顔を俯けたままボソリと呟く。

「えっ？」

「……私のカバン」

「あ、ああ。……いや。途中まで僕が持つよ」
「ん」

鞆を渡すように促す夏樹だったが、お詫び代わりの一つとして途中まで持つつもりでいたからそのことを告げる。しかし、夏樹はそれに対してお礼を言うでもなく、本当に理解の意でしかない言葉を放つと黙々と歩き出した。呆氣にとられた僕だったが、すぐに現実に戻ってくると、僕のことを意に介さず歩き続けている夏樹を慌てて追いかけた。

その後も僕たちは一言も発することなく帰路を歩き続けた。二人の間の空気はとてつもなく重い。その空気のあまりの重さに、僕はすぐに謝るつもりだったのにも関わらず、謝罪の言葉を口にするこ^{はばか}とすら憚られた。ここまで怒った夏樹は初めて見る。今の夏樹に比べれば昼間のなんてちよつと機嫌が悪かったってレベルだよ。うう、そんなに怒るなら肩代わりなんてしなればよかったじゃないか。……別に僕が頼んだんじゃないのに。

そんな気まずい時間も終わりが近づいてきた。この公園を横切れば僕と夏樹の帰り道が分かれる。未だに夏樹とどんなことを話せばいいかは思いつかないけど、とりあえず謝罪だけはしっかりとしよう。頼んでいないとはいえ夏樹の気持ち嬉しかったのは本当のことだし。そう決心すると僕は足を速めて夏樹の前に躍り出る。そして、出来るだけ朗らかな笑顔を作って鞆を手渡した。

「はい、鞆！」

「……ありがとう」

夏樹は睨み付けるように僕を見ながら、鞆を受け取った。

さあ、言っぞ！ 僕はこんなときに何を言っているのか分からない。バカだけど、バカはバカらしくこの言葉に全部の気持ちを込めるんだ。

「それと、ほんつとーにゴメン！」
「……」

腰を90度近くまで曲げて頭を下げたけど、夏樹は依然として冷たい目つきのままだ。こ、これはかなり気まずい。

「えっと、な、夏樹？」

「……それだけ？」

「えっ？」

「言いたいことはそれだけなのかって聞いているの」

「あー、何か話すべきなんだろうけど、夏樹も知ってのとおり僕はバカだから何を言ってもいいのかわからないんだよね」

「だったら、バカでも分かりやすいように質問を変える。そのゴメンは何に対してのゴメンなの？」

「えーっと、今回庇ってくれたことに対する謝罪と、その……いつも助けられている申し訳のなさかな」

「それ以外には何も感じていないんだ」

「あー、そうだよな、ゴメン。お礼を言うのを忘れてた。今回は助けてくれてありがとう」

「……それ以外」

僕の返答が意に沿わないものだったようで夏樹は何度も質問してきたが、僕は戸惑いながらも一つずつ答えていく。

「え、今回の謝罪と感謝以外のこと？ う、うん。特には思い当たらないけど」

パァーン！

そんな音と共に僕は強制的に右を向かされた。少し遅れて左頬がジンジンとした痛みを訴え、熱を持つてくる。

「ったいな！ 何すんだ——」

「ふざけないで！ 私がどれだけ心配したと思ってるの！」

頬を張られたことに気づき、文句を言おうと正面に視線を戻して怒鳴りつけようとすると、そこには大粒の涙を流しながら右手を振りぬいた夏樹がいた。

「……本当に、本当に心配したんだよ」

そして、再びうつむくと涙を拭うこともなく、搾り出すような声を出した。

「え、あ、そ、その……」

「……あんな風に壁を壊すなんて、一発で停学とか退学になってもおかしくないんだよ」

「だ、大丈夫だよ。夏樹が庇ってくれる前も指導で終わりだったんだから」

「そんなのは結果論でしょ！ あんたはちよつとは自分の危険も考えろ！ なんであんな無茶したの！」

夏樹は能天気な答えを返した僕の胸倉をつかみ上げ、怒鳴りつけてきた。あまりの剣幕に咄嗟に全て話してしまいそうになった。だけと言えない。姫路さんのことは夏樹にだって知られるわけにはいけない。

「えっと、ほら。ずっとバカバカって言われてからかわれてたから、ここで活躍して——」

「嘘。いくらあんたがバカでもそんな理由であんなことをするはずがないよ。本当は姫路さんのためなんですよ」

「ち、違うよ。何を根拠にそんなこと言ってるのさ」

「じゃあ、姫路さんが戦争に参加してなかった理由を教えてよ」

「み、見てたの」

「トイレに行った帰りに偶々姫路さんが戦場から離れているのをね」

「えーっと、その、ほら、ね？」

「ちなみに体調不良は却下。前例として私が空き教室にいたんだから姫路さんもそこに来るはずでしょ」

まずい。こんなときでも夏樹の頭の回転のよさは健在だ。僕の返答を先回りして封じてくる。しょうがない、当たり障りがない範囲で話そう。

「じ、実は、Bクラスが教室を壊したときに姫路さんの大切なものを盗んだみたいで、姫路さんはそれが原因で脅されてたんだ」

「……なんで」

「え？」

「だったら、何で相談してくれなかったの！？ 私が姫路さんの代わり戦争に出て道を作っても良かったし、他の方法だっていくらでも考えたのに！」

「だ、だって、夏樹は今回の戦争に反対して——」

「私が友達のピンチにそんなくだらしないこと言って助けを突っぱねるでも思ってたの！」

「……そうだよ。本当にごめん。でも、姫路さんは今回のことを知られたくなかったと思うし、僕が覚悟を決めれば解決する問題だったから」

「それで！？ もし今回のことで退学になってたらどうするつもりだったのさ！」

「えっと、その……頭に血が上ってて後のことは何も考えてなかった」

た」

「今回は運良く退学にならなかったけど、本当に退学になってたらどうするの！ 私はもの凄く悲しいし、なにより姫路さんは自分のせいであんたが退学になったって後悔を一生背負っていくことになってたんだよ！？」

夏樹の言葉を聞いた瞬間、頭を鈍器のようなもので思いっきり叩かれたような衝撃を覚えた。確かにそうだ。姫路さんは僕がラブレターのために行動したことを知っていた。そして、優しい姫路さんのことだ。もし僕が退学にでもなったら、そのことを酷く後悔しただろうし、その責任をとろうとして自分も一緒に辞めかねない。

「で、でも、それでも僕は姫路さんがあんな眼にあっているのを見過ごせなかったんだ。だから、僕が怒られるだけで解決するならって」

「何かに集中したときにそれ以外のことを考えないのはあんたの長所だよ。だけど、今回は酷すぎる。あんたは周りの人たちのことを本当に考えてるの？ あんたが他人を思いやるように、他の人だって違う誰かを思いやってるんだよ！？ 勝手に自分のこと過小評価して、自分のことを心配している奴がいることを忘れんな！」

「……」

「世界中の人間があんたのことを必要ない、大嫌いだって言っただけで私はずっとあんたのことが必要だし、大好きだって思ってる。あんたが困ってるなら最大限の力になってあげたいと思う。毎日楽しく笑いあって、時々バカやって、そんな毎日私は私にとって宝物なんだよ？ なのに、あんた自身が自分のことをぞんざいに扱って、退学と紙一重のことを何度もしてさ。まるで、私が大事に思っていることなんてあんたにとっては簡単に捨てられるくだらないものみたい」

「夏樹！」

「そんなことはない！ 僕だって皆といる毎日が大切だと思っている」そう言いたかったけど、夏樹の顔を見るとどうしてもその言葉が音にならない。ふいに夏樹が胸倉をつかんでいた手を離れた。そして、夏樹の言葉で力が抜けていた僕は突然支えを失い、少し後ろに下がった後、しりもちをついた。

「……それじゃあ、そんなくだらないものを必死になって守ってる私がバカみたいじゃない」

再びうつむいた夏樹の表情は、下から見上げている状態であるにも関わらず伺うことが出来なかった。

「……なんでそうやっていつも大事なときに限って私に何も言ってくれないのさ」

「夏樹には迷惑をかけたくなかったから……」

「迷惑くらい！ ……迷惑くらいいいくらいでもかけてよ。友達じゃない」

「でも、夏樹にはいつも助けられてるしこんなときくらい——」

「そんな時に頼ってこそ、お互いに助け合ってこそその親友でしょ！」

立ち上がりながら夏樹に迷惑をかけたくない旨を伝えようとする、夏樹はその言葉を遮って叫び声を上げる。

「……寂しいじゃんか。大事なときに限って信用してくれないなんてさ。本当は親友だと思ってたのは私だけってこと？」

「ち、ちが——」

「そんなに一人で背負うのが好きならずっとそうしてればいいじゃない！」

そう叫ぶとこれで最後だと言わんばかりに僕に背を向けた。だが、僕の方はこれで話が終わりだなんて納得できない。

「夏樹！」

だから僕は夏樹に追いつがった。だけど、夏樹は一瞬だけ体の向きを変えると僕の胸を軽く、本当に軽く突き飛ばした。そんな軽い衝撃でも虚を突かれた僕を止めるには十分だった。

「……さよなら、吉井君」

夏樹は振り返りざまにそう言って駆け出した。その言葉で楔を打たれたように僕の足は固まったまま動かず、そんな夏樹をただ見ていることしか出来なかった。

壁を壊したフィードバックを受けた右手は未だにズキズキするし、夏樹に張られた頬はジンジンとまだ熱を訴え続けている。でも、本当に軽く押されただけの胸が張り裂けそうに痛かった。

「……『さよなら、吉井君』かあ」

ポツリと呟いた言葉はまだ寒い春の夕闇に溶けて消えた。

第二十九話：大切なものへくだらないもの（後書き）

やってしまいました。親友二人の大喧嘩……夏樹の不满による仲たがいが。友情が売りの主人公であり、前回友情ゆえに明久を庇った後でのこの展開。今までも夏樹の行動への反響を気にしてきましたが、これがそのハイエンドです。

まあ、理由としてはお互いの価値観の違いですね。書いている途中で思ったんですが、原作の明久って体を張って皆を助けるけど、誰かに助けられたことって無くありません？ 雄二に勉強を教えてもらったり、9巻で姫路が明久の分までがんばろうとしたけど、明久のような全力の助けはなかったり。3巻の秀吉は雄二と明久二人のためでしたし、4巻では全ての責任を押し付けられました。対して、夏樹は友達なら苦しいときほど頼って欲しいという考えです。もしかしたら明久も同じ意見かもしれませんが、少なくとも今回の壁壊しをしている現状ではどんな言葉も言い訳になってしまいますし。

今回仲たがいしてしまいましたが、原作4巻のあの騒動見たいなレベルです。なのでそこまでこの問題を長引かせるつもりはありません。

前々から言っている元々のプロットでは、明久を同様に庇った後、笑顔で「あんたがそんな怪我をして肉体的な負担を負ったんだ。せめてこっちの責任くらいは私が背負うよ。だって、私たちはニコイチでしょ？ 責任も二人で背負いたいじゃない」的な展開になる予定でした。うん。夏樹のキャラじゃないですね。本当に今の展開を思いついてよかったです。

次回はあの方たちの出番を早めた意味が出てきます。それではこれからよろしくお願いします。

第三十話：良き便りを待っています（前書き）

投稿が遅くなつてすみません。今回の話も以前の裏話のように対になる話があるのでそちらを時間を空けずに投稿できるようにそちらが完成してから投稿しようとしていたので2週空きました。なので、次のお話は割りとすぐに投稿できます。

では、三十話始まります。

第三十話：良き便りを待っています

吉井君と別れた私は家に帰る前に一旦マンションの屋上に上って時間を潰していた。

「ん。そろそろ大丈夫かな」

コンパクトで顔を確認すると目はまだ少し赤い気がするが近くで覗き込みでもしない限り簡単にはバレないだろう。袖で乱暴に拭いたのを我慢してハンカチで丁寧に涙を拭いたのでこの程度の赤みで済んだのかもしれない。さて、もうねえさんも帰ってるだろうしあんまり遅いと心配かけちゃうよね。それに、ねえさんがお腹を空かせてるかもしれないし。

「ただいまー」

「あら、夏樹。遅かったわね。心配したのよ？」

「ごめん。試召戦争のことでゴタゴタしちゃって」

「もう、お腹空いちゃったわよ」

「あー、そっちもごめん。豆腐ハンバーグ作るときは豆腐の水切りしなくちゃいけないからちよつと少し時間かかったちゃうんだ」

「えー。……まあ、しょうがないわね」

「あはは、大急ぎで作るから待っててね」

拗ねた子供のような態度でしぶしぶ納得したねえさんを見ると自然と笑みが浮かぶ。台所に向かった私は冷蔵庫から豆腐を出して、水気が切れるのをリビングで待つことにしました。待っている間どうしようかな。いつもなら小説でも読んで待ってるんだけど、流石に今日はそんな気分にはなれないし。そんな風に思っているときなり背中に衝撃を受けた。な、何事！

「はっはっは、未成年がこんなに遅くまで外出するとは。とうとう不良になってしまったのか。兄さんは悲しいぞ」

「ふ、ざ、け、る、な！ 8時にもなっていないのに不良にされてたまるかあ」

「おお、謝るところか言い訳か。家族として辛い。おい、あやめ。不良少女を逮捕だ」

「酒臭あつ！ あんたこそ何こんな時間からベロンベロンに酔ってんのさ」

「おいおい、私は全然酔ってなんかいないぞ」

「酔っ払いは皆そう言うんだよ。さっさと離れて、台所で水でも飲んで来い」

「そんな冷たいこと言わなくてもいいだろう」

「はあーなあーせえー」

必死に春華の拘束から逃れようとしたけど、流石に男女の力の差もあって振り払うことは出来なかった。だが、そんな私にとっての救世主が現れた。鋭い掌底が春華の側頭部を打ち抜いた。

「あら、こんなところにうら若き乙女に絡む酔っ払いが。しっかりとお仕置きをしないと。ね、夏樹？」

「ね、ねえさん？」

ねえさんはそう言う私の肩を抱き、私の部屋へ向かうとしている。な、なんで？

「罰として今日の夕食はあんたが作りなさい。で、夕飯を遅らせた夏樹は私の愚痴に付き合いなさい」

「えー、私は昨日しっかりと作ったじゃないか」

「なら、あんたが愚痴に付き合う？ ストレス発散込みで」

「さあ、下ごしらえはしっかりとやらないとな」

不満の声をあげた春華だったが、ねえさんがいい笑顔で指の関節を鳴らすと、素直に立ち上がり台所に向かっていった。

「ちょっと待つて、ねえさん！」

「大丈夫よ。愚痴って言ったけど、本当はガールズトークしたいだけだから」

「そっちじゃない！ 別にねえさんと話すのには何の問題もないよ。だけど、あの酔っ払いに料理を任せるのだけは認められない」

「平気平気。あいつは基本的に料理は得意なんだからそれなりのものは作るわよ」

「いやー！ お願い。作るの自分だけど、夕食の豆腐ハンバーグは少しでも楽しみだっただから美味しいものが食べたいよ」

「ほら、我がまま言わないの」

「どっちが！」

その後、私の抵抗も空しく自室へと連行された。畜生。もし不味かったら春華だけ今日のデザートはなしだ。自室に連行された私と連行したねえさんはベッドに隣り合って座った。

「えっと、どうしたの、ねえさん？ 嫌な上司にでも嫌がらせされた？」

「はあー、本題は私じゃなくてあんたよ」

「え、どういうこと？」

すると、ねえさんは私の顔をしたから覗き込み、真剣な表情を作った。

「あんた、なんか隠してるでしょ。学校で何があったの」

「べ、別に隠してなんか――」

ピシッ！「あうっ！」

突然の衝撃に軽く仰け反り、額を押さえました。少し涙目になって視線を戻すとデコピンをした体勢のまま、こちらを見つめているねえさん。

「嘘おっしやい。こんなに赤い目をして」

「いや、それは今ねえさんが――」

「夏樹。お願いだから話してくれない？　それとも私になんか教えられない？」

「そ、それは……」

「大事な家族なんだから力になりたいのよ。それとも夏樹にとって私は――」

「そんなことない！　でも、……これはもう解決した問題だから」

「問題が解決した人間はこんな顔なんてしないわよ。まあ、いいわ。解決したならなおさら話しても問題ないでしょ」

「……分かった」

「まったく。明るいようで塞ぎ込みやすい子なんだから」

ため息混じりに苦笑したねえさんに今日学園であつた出来事をポツリポツリと話した。ねえさんは途中で口を挟むことなく静かに聴いてくれた。そして、最後にあいつを「吉井君」と呼んだところで額を軽く押さえた。

「あんたが、明久くんを知り合いレベルにするとはいっぱど頭にきたのね」

「だ、だって、あんな危ないことするなんて。……私に相談してくれればもっと安全な方法があつたかもしれないのにさ」

「でも、明久くんのが嫌いつて訳じゃないのよね？」

「そりゃあね。あいつは私にとっていつまでも大切な奴だし」

「……あんた。私達とか明久くん以外の前でそんなこと言うのは止めなさい。絶対誤解されるわよ」

誇らしげな顔で言った私に対してねえさんが複雑な表情でよく分からない忠告をしてきた。一体、どういうことだろう。

「まあ、それは今は関係ないわね。でも、そんな明久くんがいきなり知り合いになっちゃうくらい怒ったの？」

「う、そ、それは……」

気まずくて目をそらした私の頬を両手で挟んで正面に持ってきた。そして、私の目を真剣に覗き込む。

「さては、あんた。しっかりと意見を聞かせたから今はそれほど怒ってないでしょ」

「そんなことは」

「警官がそう簡単に騙されると思わないことね」

「……あいつだって人より数倍時間はかかるけど、それなりの理解力もあるしさ。怒って不満を出してるうちに少しずつ冷静になって今回のことは特にこたえただろうからいつもよりは反省するだろうなって考えている冷静な自分がどうかにいたんだ」

「それでも今回の名前の呼び分けは反省を促すためじゃなくて、決別の言葉なんでしょ？」

「だから、結構自己嫌悪してるの。今考えると多分、私は自分のためにあんなこと言ったんだと思うから」

「自分のため？」

「うん。私は臆病だからさ、きつとあいつを嫌いになるのが怖かったんだと思う。今は注意するだけで何とか許せているあいつの自己

犠牲も何度もやられるといつか許せなくなっちゃう。それが怖かったからまだ好きなうちに別れたんじゃないかって」

「夏樹……」

「最低だよな」

「……夏樹」

ねえさんはそう言うど頼に当てていた手を離し、形をパーからグーに変えた。そして、その手をこめかみに持って行き、

「この大バカがあー！」

「うなあー！」

某永遠の5歳児よろしくグリグリされた。私はあまりの痛みに叫び声を上げる。

「本気の喧嘩してるときにそんなややこしいこと考えられるわけ無いでしょ！ 後付けで変に考え込んで自分が悪かったって思って解決しようとするのは止めなさい！」

「で、でも……」

「あの子のことを悪く思い続けたくないのかもしれないけど、私からすれば今回のことはどっちもが原因よ。あんたの言ったことは確かに正論だから明久くんが原因の根源だし、今回のことで決別しようとしたのは流石にあんたが狭量すぎる」

「……自分でもそれは分かってるけどさ」

「まあ、自分で分かっているならいいわ」

「ええ！？ そこはそういうところは早めに直せって注意するところじゃないの？」

「ふふ、完璧な人間なんていないんだからそんな欠点も全部ひくくめてこそその神谷夏樹でしょ。それにあんたなら自分で直したいって自覚している欠点を直すくらい訳ないし、明久くんのことが好き

なら直せるでしょ」

「……ねえさんは凄いな。私は良いとこと悪いとこまとめて受け入れてこそその友達だって理解はしているけど、実践できる自信はないし」

「なーに言ってるのよ。あんただって明久くんのいいところに惚れ込んだからどんなバカやつても友達でいたし、大変なことから助けてきたんでしょ。だったら、大丈夫。そもそもあんたは真剣に悩みすぎているだけだからもう少し力を抜けば人の欠点だって受け入れられるでしょ。まあ、私からすれば今でも十分受け入れていると思うけどな」

「そ、そうかな？」

ねえさんはそう言って励ましてくれるけど、自分としては実感が湧かないな。

「とにかく、さしあたっての課題は明久くんとの仲直りね」

「ぜ、善処します」

「まったく、あんたは。気楽にいきなさいって。すぐに仲直りしなきゃいけないわけでもないし、しろとも言っていないんだから。というか、案外あの子の方から仲直りのきっかけ作ってくれるかもよ」

「で、でも、あっきー任せってのも……」

「（ふふ、呼び方が無意識に戻ってる。これは仲直りにそんなに時間はないからね）いいじゃない。いつも手助けしてあげてたんだから、こんなときくらいは助けてもらいなさいな」

「こんなときって……。それじゃあ、あいつに助けられっぱなしだよ」

「いいのよ。喧嘩したときに男から謝らせるのはいい女の特権よ。というかダメよ。女の方から簡単に謝ったりしたら。そんなのは男を付け上がらせるだけなんだから」

「それって恋愛のいろはなんじゃ」

「いいのよ。応用できることは何にでも応用しないと」

「……ねえさんが言っても説得力がないんだけど」

「なにおう！」

私の言葉を聞き、ねえさんはむくれたような表情を作る。だけど、こつちにだって言い分がある。

「だって、ねえさんが喧嘩した時って大抵ねえさんから謝るじゃん」

「うっ！ それは……できればベストってだけで」

「ぷっ、あはははは。ありがと、ねえさん」

「ん？」

「おかげで元気出た。すぐには無理かもしれないけど、あいつとは絶対仲直りするよ。だって、あいつとはこれから先もずっと笑いあっていたいもん」

「どういたしまして。その気持ちがあれば大丈夫よ」

「行こ！ もう流石に春華の料理も出来てるでしょ」

「そうね。私ももうお腹ペコペコよ」

私達は笑いあいながらリビングへと向かった。

「で？ これは一体何？」

私はこめかみをひくつかせながら春華を問い詰めた。なのに、この男は飄々とした態度を崩さずにふざけたことをのたまいやがった。

「なんだ、高校生にもなって湯豆腐も知らんのか。常識のない子だな」

「そんなのは見れば分かるに決まってんでしょ！ なんで豆腐ハン

バーグの用意をして置いたのに湯豆腐に変わっているのさ」

「決まっているだろう。面倒くさかったからだ」

「ふざけんな！ 楽しみにしてたのに！」

「おいおい、たかが食べ物でそんなにむきになるんじゃない。そんなだから食いしん坊キヤラになるんだ」

「なつてない！ 適当なことを言うな」

「気づかぬのは自分だけか」

「そんなんだから、私はあんたのことが嫌いなんだよ」

私の文句に謝るところか私をバカにしてくる春華。くつ、この男に口喧嘩で勝負するのは分が悪すぎる。

「ねえ、春華？ 私も豆腐ハンバーグは楽しみだったんだけど、私も食いしん坊キヤラなのかしら？」

「あ、あやめさん？」

「私は罰で夕食作りを命じたはずだけど、なんで手を抜いたのかしらね？」

「ははは、あ、兄として妹に負ける料理を出すわけには行かなくてだね」

「そんな、くだらない理由かぁー！」

そして、春華のお仕置きを開始するねえさん。その後は、春華に文句を言いながらも穏やかに食事は進んだ。今日の夕食は良くも悪くもいつもの神谷家だった。

S i d e あやめ

私は他の二人が眠った後に、リビングで一人でビールを飲んでい

た。どうしても、一人で飲みたい気分になったのだ。

「……流石は兄妹って感じね。本当にしっかり見ているわ」

春華はそんなに酒に弱い方ではない。そんな春華が夏樹が帰ってからの短時間であそこまで酔うはずが無い。ただ、夏樹に酔っ払っていると思わせるために口の中に酒の匂いを付けたんだろう。そこまでされてようやく夏樹の様子がおかしいことに気づけた。あいつは自分に夏樹を励まさせるためにあんな演技をしたのだ。

「まったく、気づいてんなら私に任せないで自分が話しなさいよ」

あいつの行動の前に気づけなかった事実にしほこむ。でも、本当に兄妹そろっていろいろなことを器用にこなすくせに生き方の不器用な二人だ。二人とももっと気楽に生きればいいのに。

「まあ、あいつなりに動いたから許してやるか」

そう言っ、手の中の携帯を開く。当然ロックがかかっているが、夏樹の生年月日を入れると簡単に開いた。意外に分かりやすい男よね。そして、発信履歴を見ると私と夏樹の話が終わるちよつと前に発信記録がある。でも、

「あんたがウチの兄さんに何の用があるのよ」

おそらく本当に電話した相手を隠したくて履歴を消した後には適当な番号に発信したんだろうけど、人選が悪すぎる。普段は完璧なのにこんな凡ミスをするなんてよっぽど妹が心配だったのだろう。

「今回のことであの子たちはもったいい関係になれるだろうから、

あとはウチのバカの方ね。まあ、こっちはじつくりと改善していくか」

言い終わると同時に缶を傾けたが、口の中に液体が流れてくることは無かった。

「ありや、もう空？ 仕方ない、もう一本取ってくるか」

第三十話：良き便りを待っています（後書き）

今回は夏樹とあやめの対話でした。今回は少し夏樹の友情観について一抹の不安がないでもないでしたが恋愛観と同じで友情の考え方も人それぞれ、キャラに少し歪みがあったほうが面白いと思い、今は不安には思っていないせん。

今回のタイトルはあやめねえさんを表しています。今回の夏樹と明久の仲直りや不器用兄妹の今後など、よくなるように願っています、なによりあやめの花の花言葉の一つですしね。「信じる者の幸福」も候補だったのですが、微妙に合わないしあざとすぎるので止めました。そして、あやめさんといえば話の中で違和感を感じ、ラストで「おや？」と思った人や、以前からの疑問が解決した人がいるのではないのでしょうか？ おそらく皆さんにはバレバレでしょうけど、作中ではまだまだ引つ張りますよ。

今回は前書き通りに本編の続きではなく、裏話になります。では、これからよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0931u/>

バカとテストと右脳娘

2011年12月3日14時54分発行